

を焚き拂つて終つた。

語釋 永興・鐵嶺・鏡城(咸鏡道) ○驍騎(馬上弓を射る驍兵隊)

聞二王子在會寧府驅而赴之。府韓極北也。行五十日至焉。府使鞠景仁懼拘二王子、使人來乞降。且曰、府內食盡、王子不食三日。願賜之食。清正許之、欲自入城。將校皆諫曰、「吾窺府內、虜人填咽。我以寡兵入、恐有變也。」清正曰、「虜何能爲。吾已失王。不可又失王子。即有變、吾與王子決死。毋憾也。」乃與十餘騎入城。令饋者數十人、人執一器隨而入。韓人危疑、張弓環清正。清正叱之、辯其無他。韓人不能解。清正自開襟、當箭取印於懷。印紙示是。韓人捨弓拜。於是清正拘王子及其大臣黃赫、金貴榮等、使人護送之鏡城。

訓讀 二王子會寧府に在りと聞き、驅つて之に赴く。府は韓の極北なり。行くこと五十日にして至る。府使鞠景仁懼れ、二王子を拘へ、人をして來つて降を乞はしむ。且つ曰く「府内食盡き、王子食はざること三日。願はくば之に食を賜へ」と。清正之を許し、自ら城に入らんと欲す。將校皆諫めて曰く「吾れ府内を窺ふに、虜人填咽す。我れ寡兵を以て入らば、恐らくは變有らん」と。清正曰く「虜何ぞ能く爲さん。吾れ已に王を失ふ。又王子

子を失ふべからず。即し變あらば吾れ王子と死を決せん。憾無きなり」と。乃ち十餘騎と城に入る。饋者數十人をして人ごとに一器を執り、隨つて入らしむ。韓人危疑し、弓を張つて清正を環る。清正之を叱し、其の他無きを辯す。韓人解する能はず。清正自ら襟を開いて箭に當り、印を懷より取り、紙に印して是に示す。韓人弓を捨て、拜す。是に於て、清正、王子及び其の大臣黃赫・金貴榮等を拘へ、人をして之を鏡城に護送せしむ。

通釋 二王子が會寧府に居ると聞いたので、馬を驅つて其地へ向つた。會寧府と云ふのは朝鮮の北端である。五十日も掛つてやつと到着した。府使鞠景仁は懼れて二王子を拘へ置き、人を派して降服を乞はしめた。そして曰ふには「府内では食糧が盡き、王子も三日間食を取られない。どうぞ願はくは王子に食を與へて下さい」と。清正は之を許し、自身で城中に入らうと思つた。すると將士連は皆諫めて、曰ふには「吾々が府内の様子を窺ひ見るに、虜人がいっぱい詰つて居ります。それなのにこちらで少數の兵を以つて入つたならば、或ひは變事が起るでせうから、御止めなさい」と。清正が曰ふのに「何、虜共は何が出来もんか。自分は先きに國王を取り逃した。今又王子を取り逃すことはどうしても出来ないのだ。若し異變あらば、自分は王子と死を決する。さすれば死んでも心残りはないのだ」と。そこで十騎餘りを引きつれて城内に入つた。又食物を送る者數十人をも、各人につづ、の器を持たせて一緒に城内に入らせた。韓人は危ぶみ疑ひ、弓を張つて清正をおつ取り圍んだ。清正は之を叱責して他意無きことを辯解した。それが韓人には通じなかつた。そこで清正は自分の襟を開いて箭の前に立ち塞がり、印判を懷かり取出して紙に押しつけて見せた。すると初めて韓人は清正であることを知り、弓を捨て、清正を拜した。是に於いて清正は王子及び其の大臣黃赫・金貴榮等を拘へ、人をして之を鏡城に護送せしめた。

會寧府(咸鏡道) ○開襟(胸を矢先に當て、敵をしない意を表はす) ○印紙(別意なき證)

乃問景仁曰朝鮮北境盡於此乎對曰然曰北鄰何國曰元良哈清正乃以八千人進入其境攻一城拔之既夜下令曰勿釋甲夜半胡騎大至我兵力戰走之清正曰虜不意我至我一捷足以報太閤矣乃收其貨寶引兵南還胡騎躡之清正自殿而退終至海濱西南望得高山韓捕虜曰富士岳也清正下馬免胄而拜謂其騎曰自吾辭太閤謂日西北行矣今望岳於西南覺吾行遼遠也乃歸二十日至鏡城

訓讀 乃ち景仁に問うて曰く「朝鮮の北鏡、此に盡くるか」と。對へて曰く「然り」と。曰く「北隣は何の國ぞ」と。曰く「元良哈」と。清正乃ち八千人を以て進んで其の境に入り、一城を攻めて之を拔く。既にして夜なり。令を下して曰く「甲を釋くこと勿れ」と。夜半、胡騎は大に至る。我が兵力戰して之を走らす。清正曰く「虜我が至るを意はず。我が一捷、以て太閤に報ずるに足れり」と。乃ち其の貨寶を收め、兵を引いて南に還る。胡騎之を躡す。清正自ら殿して退く。終に海濱に至り、西南に望んで高山を得たり。韓の捕虜曰く「富士岳なり」と。清正馬を下り、胄を免いで拜し、其の騎に謂つて曰く「吾れ太閤に辭してより、日に西北に行くと謂へり。今、岳を西南に望む。吾が行の遼遠なるを覺ゆ」と。乃ち歸り、二十日鏡城に至る。

と。「それでは北の隣國は何と云ふ國か」と又問うた。「元良哈と申します」と答へた。そこで清正は八千人をつれて進んで其の境に入り、一城を攻め落した。其の内に夜になつた。清正は陣中に令して曰ふには「鏡をぬいではならぬ」と。夜半に胡騎が多数押寄せた。我が兵力戰して之を蹴散らした。清正が曰ふには「虜共は乃公が來るとは思ひ設けなかつたのだ。今我れ一たび捷つたことは太閤に報告するに十分だ」と。そこで其の城の寶物を取り上げ、兵を引き隨へ、南を指して還つた。胡騎が後を追ひ掛けて來た。清正は自ら部隊の後方にさがつて退いた。終に濱邊に至つて西南を望むと一つの高山を見つけた。韓の捕虜が「あれは日本の富士山です」と言つた。清正は馬から下りて胄をぬいで仰き拜み、其の騎馬に向つて曰ふには「自分は太閤殿下に暇乞ひしてから、毎日西北の方に向つて進んだと思つてゐた。が、今富士山を西南の方向に望む。して見ると我が一行の遠くへ來たことが分る」と。そこで歸路に着き、二十日目に鏡城に到着した。

語釋 元良哈(朝鮮と地隔てゝゐるので之を疑ふものが多い。一説) ○一城(宛部) ○海濱(北青) ○富士岳(これは傳稱にて)

八月、韓王自義州遣李贊、李元翼來攻平壤者。再行長輒擊卻之。王亦聞清正已略定咸鏡、恐其與行長并力來襲也。益告急於明。明既得承訓、敗聞、舉朝震驚。大司馬石星說明主曰「秀吉兵乘勝而遠鬪、未可與爭鋒。且寧夏未平、復有事於遼東。不若且議和以紓禍也。」因薦沈惟敬。惟敬越人、慧黠有辯口。遊燕、與燕倡家僕鄭四善。鄭

四營在對馬。惟敬以故略知和事。徵幸富貴。其友袁茂嘗納女於星。星因知惟敬。召而與語。大悅。遂薦之。於是明主以惟敬爲遊擊將軍。多資金帛。往說我軍。投書平壤。卑辭乞和。行長與宗義智見惟敬於城北。曰。明即欲和。宜使使濟海。因徵數條。惟敬盡順其意。曰。歸取報。五十日復來。乃請界平壤西北十里。和韓俱不相踰。行長許而遣歸。告狀於秀家。

訓讀 八月、韓王、義州より李贊・李元翼を遣はし、來つて平壤を攻むること再びす。行長輒ち撃つて之を卻く。王亦清正已に咸鏡を略定すと聞き、其の行長と力を并せて來り襲ふを恐るゝや、益々急を明に告ぐ。明既に承訓の敗聞を得、舉朝震驚す。大司馬石星、明主に説いて曰く「秀吉の兵、勝に乗じて遠く闘ふ。未だ與に鋒を争ふべからず。且つ寧夏未だ平がす。復遼東に事あり。且く和を議して以て禍を紓べんに若かざるなり」と。因つて沈惟敬を薦む。惟敬は越人、慧黠にして辯口あり。燕に遊び、燕の倡家の僕鄭四と善し。鄭四嘗て對馬に在り。惟敬、故を以て略和事を知り、富貴を徵幸す。其の友袁茂、嘗て女を星に納る。星因つて惟敬を知る。召して與に語り、大に悦び、遂に之を薦む。是に於て、明主、惟敬を以て遊擊將軍と爲し、多く金帛を資し、往いて我が軍に説かしめ、書を平壤に投じ、辭を卑くして和を乞ふ。行長、宗義智と惟敬を城北に見る。曰く「明即し和を欲せば、宜しく使をして海を渡らしむべし」と。因つて數條を徵す。惟敬、盡く其の意に順ひて曰く「

つて報を取り、五十日にして復來らん」と。乃ち平壤の西北十里を界とし、和韓俱に相踰えざるを請ふ。行長許して遣歸し、狀を秀家に告ぐ。

通釋 八月、韓王は義州から李贊・李元翼を遣はして、平壤を攻めに奇越すこと兩度に及んだ。行長はたちまち之を撃退して終つた。王も亦清正が已に咸鏡を征服したと聞き、従つて清正が行長と力を并せて來り攻めるのを恐れ、益々急を明に告げ知らせた。明はとつて承訓の敗報を聞いて、朝廷を擧げて一同震へ驚いたのであつた。大司馬石星は明の王に説いて曰ふには「秀吉の軍は勝に乗じて遠く進んで闘つてゐます。未だく相手になつて鋒を争ふべきではありません。その上に寧夏はまだ平定しませぬ。復遼東方面に事件を起すので御座います。これは考慮を要す可きでありまして且らく和平を議して禍をのばしのがれるのが最上の手段であります」と。因つて沈惟敬を推薦した。惟敬は越の人、その性質は狡猾で小才があり、辯舌のなかく上手な男であつた。燕の地に遊び其處の遊廓の下僕鄭四といふ者と仲が善かつた。その鄭四は前に對馬に居たことがあつた。従つて惟敬はその爲めに大體日本の事を知り、あわよくば富貴を得んと願ふ心があつた。其の友人袁茂は嘗て娘を石星の側女にした。因つて石星は惟敬を知つたのである。召して相共に語り、大いに投合する所あり、遂に之を推擧したのである。是に於て明主は惟敬を遊擊將軍と爲し、澤山な金帛を資らせて、來つて我が軍に説かしめ、書面を平壤に送つて辭を卑くして和を乞うたのである。行長は宗義智と城北で惟敬と面接した。そして曰ふには「明が若し和睦を願ふならば、使者を立て、海を渡つて直接に本營に來るやうにせよ」と。そこで和睦の條件數個條を示して要求した。惟敬は盡く行長等の意に順つて曰ふには「一旦歸國して返事を貰ひ受け、五十日たつてもう一度參りませう」と。因つて平壤の西北十里を界として、日本も朝鮮も俱に其の界を踰えない様に請うた。行長

は此の申出でを許可して歸らしめ、此の状況を秀家に報告した。

義州(平安)

於是、我兵在平壤者、不復西下。而韓兵竊發諸道、沈岱者募兵朔寧、計復都城。秀家攻而斬之。鄭湛邊應井亦聚兵全州、筑紫廣門自慶尙入全羅、與湛應井戰熊嶺、斬之。而全州未下。九月、應井弟應星敗石田三成于馬灘、元豪敗蜂須賀家政于龜尾浦、遂攻毛利高政于春川。高政伏兵擒豪、遂定江原。鍋島直茂、相良賴定在永興、取德原、咸興等七城、移守咸興。清正自鏡城以諸俘虜還、至蓮下。會韓兵二萬、扼梁養山。清正擊破之、走其將梅天。直茂、賴定迎之、相見于橋中、賀其無恙。時已十月矣。清正返軍安邊、乃修金山、橋州諸城、相與協心、按據韓人。

訓讀 是に於て我が兵の平壤に在る者、復西下せず。而るに韓兵は竊に諸道を發し、沈岱なる者、兵を朔寧に募り、都城を復せんと計る。秀家攻めて之を斬る。鄭湛邊應井も亦兵を全州に聚む。筑紫廣門、慶尙より全羅に入り、湛應井と熊嶺に戰つて之を斬る。而して全州未だ下らず。九月應井の弟應星、石田三成を馬灘に敗り、元豪、蜂須賀家政を龜尾浦に敗り、遂に毛利高政を春川に攻む。高政兵を伏せて豪を擒にし、遂に江原を定む。鍋島直茂、相良賴定、永興に在り。德原・咸興等の七城を取り、移つて咸興を守る。清正、鏡城より諸俘虜を以て

還り、蓮下に至る。會々韓兵二萬、梁養山を扼す。清正、擊つて之を破り、其の將梅天を走らす。直茂、賴定、之を迎へ、橋中に相見え、其の恙無きを賀す。時已に十月なり。清正、軍を安邊に返し、乃ち金山・橋州の諸城を修め、相與に心を協はせて韓人を按據す。

通釋 そこで我が兵の平壤に在る者は、復西に下らなかつた。而るに韓兵は竊かに諸道を發足し、沈岱といふ者朔寧で兵を募り集め、都城を回復することを計畫した。秀家は之を攻め殺して終つた。鄭湛邊應井も亦兵を全州から募集した。筑紫廣門が慶尙から全羅に入り、湛應井と熊嶺に戰つて之を斬つた。併し全州は未だに降服しなかつた。九月、應井の弟應星は石田三成を馬灘に敗り、元豪は蜂須賀家政を龜尾浦に敗つて、遂に毛利高政を春川に攻めた。高政は伏兵を設けて豪を擒へ、遂に江原道を略定した。鍋島直茂、相良賴定の二人が永興に居つた。德原や咸興等の七城を攻め取り、移つて咸興を守つて居た。清正是鏡城から多くの生捕をつれて還り、蓮下まで来た。すると韓兵二萬人が梁養山を保ち守つて居るのに出會つた。清正是擊つて之を破り、其の將梅天を潰走せしめた。直茂、賴定は清正を迎へて橋中といふ所で會見し、其の無事であつたことを祝賀した。その時はもう十月に入つてゐた。清正是軍を安邊に返し、そこで金山や橋州の諸城を修理し、相與に心を合せて韓人を鎮め安んじ、守りに就いて居た。

語釋 朔寧(京畿) ○全州・熊嶺(全羅) ○馬灘・龜尾浦・春川・江原(江原) ○永興・德原・咸興・蓮下・梁養山・橋中・安邊・金山・橋州(咸鏡)

當是時、諸將稟事秀吉、使舸交於海中。是月、秀吉復奏請赴行營、天子詔曰、征戎之

事一任將佐勿輕濟海。秀吉拜謝而行。十一月直茂以三千人與韓將李希得兵三萬戰于咸興北走之。斬首千餘級。清正盡收咸鏡二十二管。遂議自北道長驅入遼東。未果。行長亦以惟敬過期不至乃怒下令軍中曰皆修行具。吾將飲馬鴨綠江也。義州聞之荷擔而立。韓王飛書告明。

訓讀 是の時に當り諸將事を秀吉に稟す。使阿海中に交る。是の月秀吉復奏請して行營に赴く。天子、詔して曰く「征戎の事は一に將佐に任じ、輕がるしく海を濟る勿れ」と。秀吉、拜謝して行く。十一月、直茂三千人を以て、韓將李希得の兵三萬と咸興の北に戰つて之を走らす。斬首千餘級。清正盡く咸鏡の二十二管を收め、遂に北道より長驅して遼東に入るを議す。未だ果さず。行長も亦惟敬の期を過ぎて至らざるを以て乃ち怒り、令を軍中に下して曰く「皆行具を修めよ。吾れ將に馬に鴨綠江に飲はんとす」と。義州之を開き、荷擔して立つ。韓王書を飛ばして明に告ぐ。

通釋 是の時に當つて諸將は事情を秀吉に申傳へた。その使者の早船が海上で頻りに行き違つた。是の月、秀吉は再び天皇に奏上してお許を請ひ那古耶の行營に出掛けた。天皇は詔して仰せらるゝに「えびす征伐の事は一切大將どもに任せ、輕くしく海を渡つたりせぬやうに」と。秀吉拜謝して西下した。十一月、直茂は三千の兵を率ゐて韓將李希得の兵三萬と咸興の北方で戦ひ、之を敗北せしめた。斬つた首級が千餘もあつた。清正は咸鏡二十二郡を全部手中に收め、遂に北道から長驅して遼東に入らうと相談を纏めた。併しまだ果さなかつた。行長も亦惟敬が遼東の期を過ぎてもやつて來ないので怒つて命令を軍中に下して曰ふには「一同出發の用意をせよ。吾はこれから鴨綠江の水を馬に飲ませようとするのだ」と。義州の者は此の事を聞いて荷物を背負つて立ち上り逃げ支度をした。韓王は書面を飛ばして明に告げ知らせた。

語釋 北道(朝鮮北方) ○過期(五十日を經過す)

明群臣議曰惟敬說不可信。秀吉殊無退兵意。曩者以暑濕取敗。今天寒馬肥。宜出兵也。翊鈞猶豫未決。懸令有能獻奇計。復東藩者。購萬金。封伯爵。襲之子孫。莫敢應者。衆推少司馬宋應昌曰。應昌去歲上書言。秀吉必來。是知兵矣。翊鈞遂拜應昌爲都御史。經略東北。劉黃裳、袁黃爲贊畫。而選將兵者。李如松、稱材武。天下無雙。會其平寧夏而旋。則拜爲大將。率六將軍。東拒秀吉。期以十一月發北京。獨大司馬猶持前議。復遣惟敬至平壤。伺秀吉意。惟敬留平壤城中。與行長密定議。以去。而如松等大兵已至遼東。惟敬要之於路。曰。媾將成矣。和人約棄平壤界。大同江而退。如松方銳意立功。弗憚。惟敬言。欲執而斬之。應昌等說曰。宜舍此。因怠敵而襲之。如松從之。率渡鴨綠。會降虜爲我耳目者。爲韓相所摘發。皆就拘縛。以故不知明軍至。

訓讀 明の群臣、議して曰く「惟敬の説、信すべからず。秀吉殊に兵を退くるの意なし。曩者には暑濕を以て敗を取る。今、天寒く馬肥ゆ。宜しく兵を出すべきなり」と。翊鈞、猶豫して未だ決せず。令を懸く、「能く奇計を獻じ、東藩を復する者有らば、萬金に購ひ、伯爵に封じ、之を子孫に襲がしめん」と。敢て應ずるもの莫し。衆、少司馬宋應昌を推して曰く「應昌は、去歲、上書して秀吉必ず來るを言ふ。是れ兵を知るなり」と。翊鈞、遂に應昌を拜して都御史と爲し、東北を經略せしむ。劉黃裳・袁黃、贊畫と爲り、兵に將たるものを選ぶ。李如松、材武天下無雙と稱す。會々其の寧夏を平けて旋る。則ち拜して大將と爲し、六將軍を率ゐて、東のかた秀吉を拒がしむ。期するに十一月を以てして北京を發せんとす。獨り大司馬、猶ほ前議を持し、復惟敬を遣はして平壤に至りて秀吉の意を伺はしむ。惟敬、平壤の城中に留り、行長と密に議を定め以て去る。而して如松等の大兵已に遼東に至る。惟敬之を路に要して曰く、「將に成らんとす。和人平壤を棄て、大同江を界として退かんと約す」と。如松方に意を功を立つるに銳くし惟敬の言を憚ばず。執へて之を斬らんと欲す。應昌等説いて曰く「宜しく此を舍し、因つて敵を怠らしめて之を襲ふべし」と。如松、之に従ひ、率ゐて鴨綠を渡る。會々降虜の我が耳目と爲る者、韓相の摘發する所と爲り、皆拘縛に就く。故を以て、明軍の至るを知らず。

通釋 明の群臣は評議して曰ふには「惟敬の説く所は信じ難い。秀吉は格別兵を退ける意志はないやうに思はれる。前に明軍は暑くて濕氣多くそれが爲めに敗けを取つた。今は秋の末で、氣候は寒く馬も元氣だ。此の際宜しく出兵すべきである」と。然るに明主朱翊鈞は愚圖々々して決心がつかなかつた。命令を制札場に掛けて曰ふには「能く奇計を獻じて朝鮮を恢復する者があるならば、萬金を與へ伯爵に封じ、そして子孫を永く相續させるであらう」と。併して之に應じて、策を獻ずる者は無かつた。結局衆臣は少司馬宋應昌を推舉して曰ふには「曩

昌は昨年上書して秀吉がきつと攻め來ると豫言しました。是れは實に兵を知るものであります」と。翊鈞も遂に此の應昌を迎へて都御史となし、東北部を經略させた。劉黃裳・袁黃の二人は贊畫の官に任じ、兵に將となるべき者を選ぶことになつた。所が李如松は人物と言ひ、武勇と言ひ、天下に並ぶものがないと稱されてゐた。其の李如松がその時丁度寧夏を平けて凱旋した。そこで之を拜して大將となし、六人の將軍を率ゐて東の方秀吉の軍を拒がせることとした。そして十一月を以て北京を發足しようとしてゐた。然るに只大司馬石星は尙ほ前の意見を維持し、再び惟敬を平壤に遣つて秀吉の意中をさぐらしめた。惟敬は平壤の城中に留り、行長と祕密に相談を定めて立ち去つた。其の内に如松の大軍は已に遼東に到着した。惟敬は之を途中に待ち受けて曰ふには「和睦は今出來かゝつて居る。日本人は平壤を棄て、大同江を境界にして兵を退ける約束をした」と。如松は時方に功名を樹てたいと切りに希望して居たので、惟敬の言葉を憚はなかつた。惟敬を執へて之を斬つて終はうと思つた。應昌等が之を止めて曰ふには「此を許し因つて敵を油斷させ、不意に襲うて打ち破るのが宜いでせう」と。如松もこの議に従ひ、軍を引きつれて鴨綠江を渡つた。其の時丁度降參した朝鮮人で我が軍の手先となつて居た者が、朝鮮の宰相に依つてそれを見破られ、皆縛られて終つた。そんな譯で知らせて呉れるものが縛られてゐるので、我が軍では明兵が來たのを一寸も知らなかつたのである。

語釋 東藩(朝鮮をさす) ○袁黃(袁了) ○前議(和睦) ○韓相(柳成龍)

二年正月朔、如松至肅寧、使裨將查大受先往順安。大受使人來告曰、「沈遊擊至、和議成矣。」行長喜、亦使一將以二十人會順安。大受誘與飲酒、伏起二十人搏戰、亡其

三人走還平壤。行長大驚。丹波人內藤如安爲行長侍史。冒小西氏稱飛驒守。於是行長命如安往詰如松。如松慰解遣還。而六日以諸軍薄平壤。行長與宗義智等急修守備。馳使告急於鳳山。使者未歸。如松已以先鋒攻含毬門。我兵擊卻之。其夜出襲李如栢營。不利。

訓讀 二年正月朔、如松、肅寧に至り、裨將查大受をして先づ順安に往かしむ。大受人をして來り告げしめて曰く、「沈遊擊至り、和議成る」と。行長喜び、亦一將をして二十人を以て順安に會せしむ。大受誘ひて與に酒を飲む。伏起る。二十人、搏戦して、其の三人を亡ひ、走つて平壤に還る。行長、大に驚く。丹波の内藤如安、行長の侍史と爲り、小西氏を冒し、飛驒守と稱す。是に於て行長、如安に命じ、往いて如松を詰らしむ。如松、慰解して遣り還す。而るに六日、諸軍を以て平壤に薄る。行長、宗義智等と急に守備を修め、使を馳せて急を鳳山に告ぐ。使者未だ歸らず。如松已に先鋒を以て含毬門を攻む。我が兵撃つて之を卻く。其の夜出で、李如栢の營を襲ふ。利あらず。

通釋 二年正月元日、如松は肅寧に來り、副將查大受を先づ順安に往かしめた。大受は人をして我が軍に來り曰はしめるには「沈遊擊將軍がやつて來て、媾和の約束が出来上りました」と。行長は喜んで、亦一將をして二十人をつれて順安で會見させることにした。大受は誘つて一緒に酒を飲んだ。忽ち伏兵が起つた。二十人は組討ちして戦ひ、其の内三人を失つたが、逃げて平壤に還つた。行長は大いに驚いた。丹波の内藤如安といふ者は、行長のお側のお書き役となつて、小西の姓を名乗り、飛驒守と稱してゐた。そこで行長はこの如安に命じて、往つて李如松を詰責させた。如松は之を慰めなだめて還した。而るに六日諸軍を率ゐて平壤に薄つて來た。行長は宗義智等と急ぎ守備を堅めると共に、使を馳らせて急を鳳山に告げた。その使者がまだ歸着しない。その内に、もう如松は先鋒部隊を率ゐて含毬門を攻めた。我が兵は之を撃退した。そして其の夜城を出て李如栢の陣屋を襲つた。併しうまく行かなかつた。

語釋 遊擊(遊軍) ○侍史(書佐、祿筆などと同じ) ○肅寧(順安) ○沈遊擊(沈惟敬は遊) ○一將(逸見) ○鳳山(黃海) ○含毬門(平壤城門の名)

其明、明軍大至。如松攻小西門、如栢攻大西門。吳惟忠、駱尙志攻北門、祖承訓攻南門。承訓欲立奇功、償前敗。知我易韓人也、令其兵皆尙韓裝。故路阻不進。行長以爲韓人也、專距西北、自率銃手擊卻如松。如松益用大礮、火箭、毒煙蔽城。我兵殊死戰。承訓則脫韓裝、露明甲、鼓譟而登。行長驚急、分兵拒之。而西北即陷。行長退保牡丹臺。明軍四面攀堞。我兵力拒、刀槍攢垂。堞如蝟毛。明兵死傷數千人、不能拔。退營城外。行長將木戶某說曰、鳳山兵不來援。吾以孤城抗大敵。終不可支。盍退合於諸將。

以圖再舉。行長然之。即夜潛率衆出城至江。江冰方合。蹈而渡。至鳳山。大友義統已遁之國都。黑田長政在白川。聞敗。引兵迎行長。代殿而退。明軍不敢追躡。終至國都。韓人聞之。所在竝起。以應明軍。

訓讀 其の明、明軍大に至る。如松、小西門を攻め、如栢、大西門を攻め、吳惟忠・駱尙志、北門を攻め、祖承訓、南門を攻む。承訓、奇功を立て、前敗を償はんと欲す。我が韓人を易るを知り、其の兵をして、皆韓装を尙へ、故に路阻して進まざらしむ。行長以て韓人と爲し、専ら西北を拒ぎ、自ら銃手を率ゐて、撃つて如松を卻く。如松、益々大礮、火箭を用ひ、毒烟、城を蔽ふ。我が兵殊死して戦ふ。承訓、則ち韓装を脱ぎ、明甲を露し、鼓譟して登る。行長驚き、急に兵を分つて之を拒ぐ。而して西北即ち陥る。行長退き牡丹臺を保つ。明軍、四面より堞を攀づ。我が兵、力め拒ぎ、刀槍攢り垂る。堞・蟬毛の如し。明兵の死傷數千人、抜くこと能はず。退いて城外に營す。行長の將木戸某、説いて曰く「鳳山の兵、來り援けず。吾れ孤城を以て大敵に抗す。終に支ふべからず。盍ぞ退いて諸將に合し、以て再舉を圖らざる」と。行長之を然りとし、即夜、潛に衆を率ゐて城を出で、江に至る。江冰、方に合す。踏んで渡り、鳳山に至る。大友義統、已に遁れて國都に之く。黒田長政、白川に在り。敗を聞き、兵を引いて行長を迎へ、代り殿して退く。明軍、敢て追躡せず。終に國都に至る。韓人之を聞き所在竝び起つて、以て明軍に應ず。

を攻め、祖承訓は南門を攻めた。承訓は奇功を立て、前敗の理合せをしようと思つてゐた。我が軍が朝鮮人を輕視してゐることを知つたので、部下の兵隊全部に、鎧の上に朝鮮服を着させて故意に愚圖／＼ためらつて進ましめない様にさせた。行長は朝鮮人と思ひ込んで専ら西北方面を拒ぎ、自ら小銃隊を率ゐて如松を撃退した。如松は益々大礮や火矢を用ひて射つたので濛々たる烟が城を蔽うた。我が兵は死を決して戦つた。承訓は此の際に部下の着てゐた朝鮮服を脱がせ、明軍の鎧を露はして、陣太鼓を打ち鳴らし、喊聲を揚げて登つて來た。行長打ち驚いて急ぎ兵を分けて之を拒いだ。其の内に西北方面が陥つて終つた。行長は後退して牡丹臺に立て籠つた。すると明軍は四面から、城の物見の垣に攀ち登つて來た。我が兵は力を盡して守り拒ぎ、垣の下へ刀や槍を集め垂れた。物見の垣に針鼠の毛の様に突き出た。明軍は之に觸れて死傷する者が數千人もあつたので、遂に此處を抜くことは出来なかつた。そこで退き下つて城外に陣取つた。行長の將木戸某なる者行長に説いて曰ふには「鳳山の援兵が來ません。吾々は孤城を以て大敵に對抗してゐます。終には此の城も支へることは出来ません。どうして退いて諸將の軍と合し、再舉をお圖りにならないのですか」と。行長は此は尤もなことだと思ひ、其の夜直に潛に衆を率ゐて城を出で、大同江まで來た。河の水が丁度氷つて居た。そこで之を踏んで渡りやがて鳳山に着いた。すると大友義統は已に國都に遁れて行つた後である。黒田長政は白川に居て此の敗を聞き、軍隊をつれ行長を迎へに來て、行長に代つて後部を守り乍ら退いた。明軍は敢て之を進撃しなかつた。終に國都に到着した。韓人は此の戦の様子を聞いて、至る所一齊に竝び起つて、明軍に呼應した。

語釋 牡丹臺(都城を少し離れた所) ○擗垂(突き落さん爲めに群る) ○白川(黃海道)

宋應昌等謀曰「秀吉將帥皆萃王城。而加藤清正者懸孤軍在咸鏡。聲聞不通。可虛喝而取也。」使辯士馮仲纓以譯說。清正曰「和無故攻韓。韓告急於明。明皇帝大怒。遣大兵救韓。復平壤。復開城。遂復國都。擒浮田小西。盡逐其兵。令琉球暹羅諸國壓和境。而足下猶守韓。欲爲誰乎。」皇帝聞足下高義。使使臣爲報告之。爲足下計。莫若速返韓王子。收軍歸和。否則明軍四十萬。驅韓兵而東。直萃於安邊。足下雖欲服明。得乎。清正使侍史答之曰「清正知奉國命而戰。不知聽明令而和也。歸語明主。我有敵甲凋兵。近苦無事。貴國來伐。已聞命矣。而咸鏡之途險阨。騎不可比行。卒不得成列。兵之來。日一二萬而已。吾迎而擊之。日殺一萬。四十日殲之。日殺二萬。二十日殲之。既殲而西。指度遼破燕。奉大駕於海東。清正可以復命矣。」仲纓走歸。

訓讀 宋應昌等謀つて曰く「秀吉の將帥、皆王城に萃る。而るに加藤清正是孤軍を懸けて咸鏡に在り。聲聞通ぜず。虚喝して取るべきなり」と。辯士馮仲纓をして、譯を以て清正に説かしめて曰く「和、故なくして韓を攻む。韓、急を明に告ぐ。明の皇帝、大に怒り、大兵を遣はして韓を救ひ、平壤を復し、開城を復し、遂に國都を復し、浮田・小西を擒にして、盡く其の兵を逐ひ、琉球、暹羅の諸國をして和境を壓せしむ。而るに足下、既

韓を守り、誰が爲めにせんと欲するか。皇帝、足下の高義を聞き、使臣をして、爲めに之を報告せしむ。足下の計を爲すに、速に韓の王子を返し、軍を收めて和に歸るに若くは莫し。否ざれば則ち明軍四十萬、韓兵を驅つて東し、直に安邊に萃らん。足下、明に服せんと欲すと雖も、得んや」と。清正、侍史をして之に答へしめて曰く「清正、國命を奉じて戦ふを知り、明の令を聽いて和するを知らざるなり。歸つて明主に語げよ。我に敵甲凋兵有り。近ごろ事無きに苦しむ。貴國來り伐つは、己に命を聞けり。而るに咸鏡の途、險阨、騎、比行すべからず。卒、列を成すを得ず。兵の來る、日に一二萬のみ。吾れ迎へて之を撃ち、日に一萬を殺さば、四十日にして之を殲さん。日に二萬を殺さば、二十日にして之を殲さん。既に殲して西に指し、遼を度り燕を破り、大駕を海東に奉ぜん。清正以て復命すべし」と。仲纓、走り歸る。

通釋 宋應昌等は相謀つて曰ふには「秀吉の大將共は皆王城に集つて居る。加藤清正是一軍だけで懸け離れて咸鏡道に居る。音信不通の状態に置かれて居る。だから之を空おどしに脅かして打ち取ることが出来る」と。辯士馮仲纓を使はし、通譯官を以て清正に説き付けて曰ふには「日本は何等理由もなく韓を攻めた。そこで韓國は急を明に告げた。明の皇帝は大に怒られ、大兵を派遣して韓を救ひ、平壤を恢復し、開城を取り戻し、遂に國都をも恢復して、浮田・小西の兩大將を生擒り、其の兵を全部追つ拂ひ、又琉球や暹羅の諸國に頼んで日本の國境を壓迫させた。それなのに足下は今猶ほ韓土に踏み止まつてゐるが、一體誰の爲めに忠義を盡さうと思つて居られるのか。我が明の皇帝は足下の義に堅い心を聞き召され、私を遣はして足下の爲めに之を報告させられたのである。それで足下の爲めに此の際最もよい計は早速韓の王子を返し、軍隊を收めて日本へお歸りになることである。さもなければ明の四十萬の大軍は韓兵を驅り立て、東に向ひ、直に安邊に集まるだらう。其の時になつ

てから、足下が明に降服しようと思つても、最早遅いだらう」と。そこで清正は傍付きの書役をして之に答へしめて曰ふには「清正は日本の國命を奉じて戦ふことだけは知つて居るが、明國の命令に従つて和睦することは知らぬ。歸つて明主に語れ。こちらにはお粗末ながら甲冑もあるし武器もある。近頃は無事に苦しんで居る所だ。そちらでやつて來ることはもう承知した。しかし威鏡道の途は狭く険しく、騎兵は並んで行くことは出來ぬ。歩卒も列を作つて進むことは出來ぬ。だから君の方の兵がやつて來るのは、精々一日に一萬か二萬だらう。之を迎へ撃つて一日に一萬を殺したら、四十萬の全軍は四十日で皆殺しに出来る。又一日に二萬を殺せば二十日で皆殺しだ。之を皆殺しにした後で西に向つて遼東を過ぎ、燕を打ち破り、そして明王を生捕つて日本に連れ歸らう。斯くてこそ清正は國命にお答へすることが出来る次第ぢや」と。仲總は驚き走り歸つて行つた。

語釋 獨兵(いたんだ) ○燕(北京は昔の燕國の地)

當是時、明軍乘勝、鼓行而東。國都將吏令大同以東諸城撤守來會。諸城皆聽命。獨小早川隆景與毛利秀包立花宗茂弗肯、曰「吾輩竭力報國、固在今日。且明軍勝而驕、易與耳。」三奉行促之甚急、乃退未至王城三十里而軍。明軍進入開城、遂渡臨津。查大受爲其先鋒、值宗茂于礪石嶺。宗茂擊破之、斬百餘人。如松乃盡引其軍而至。隆景以二萬人邀擊于碧蹄館、大戰良久。宗茂與秀包橫擊之。如松初以火器襲平壤、一戰得志、謂和兵不足、復畏、乃輕進、不具銃礮。以短兵接戰。我軍兵銳、刃利、縱橫揮擊、人馬皆倒。莫敢當其鋒。我兵呼聲動天、遂大破明軍、斬首一萬、殆獲如松、追北至臨津、擠明兵于江。江水爲之不流。如松痛哭徹夜。聚敗軍、退入坡州。韓將相請其再進、不肯。

訓讀 是の時に當り、明軍、勝に乗じ鼓行して東す。國都の將吏、大同以東の諸城をして、守を撤して來り會せしむ。諸城皆命を聽く。獨り小早川隆景、毛利秀包、立花宗茂と、肯んぜずして曰く「吾が輩力を竭し國に報ゆる、固より今日に在り。且つ明軍は勝ちて驕る。與し易きのみ」と。三奉行之を促すこと甚だ急なり。乃ち退いて、未だ王城に至らざること三十里にして軍す。明軍進んで開城に入り、遂に臨津を渡る。查大受、其の先鋒と爲り、宗茂に礪石嶺に値ふ。宗茂撃つて之を破り、百餘人を斬る。如松乃ち盡く其の軍を引いて至る。隆景三萬人を以て碧蹄館に邀撃し、大戰すること良久し。宗茂、秀包と、横に之を撃つ。如松、初め火器を以て平壤を襲ひ、一戦して志を得、謂へらく、和兵復畏るゝに足らず」と。乃ち輕しく進んで、銃礮を具へず、短兵を以て接戦す。我が軍は兵銳く刃利し、縱横に揮ひ撃ち、人馬皆倒る。敢て其の鋒に當る莫し。我が兵の呼聲天を動し、遂に大に明軍を破り、斬首一萬、殆んど如松を獲んとす。北ぐるを追うて臨津に至り、明兵を江に擠す。江水之が爲めに流れず。如松、痛哭して夜を徹す。敗軍を聚め、退いて坡州に入る。韓の將相其の再び進むを請ふ。肯んぜず。是の時明軍は勝ちに勢づいて、太鼓を打ち鳴らして東へ進んだ。國都に居つた大將や軍吏は大同以東

の諸城をして守を解いて國都に來り集る様に命令を發した。從つて諸城の軍は皆命令に從つた。たゞ小早川隆景は毛利秀包や立花宗茂と共にその命令を肯かないで曰ふには「吾が輩が力を竭して國の爲めに報いるのは、もとより今日のやうな場合に於てなざるべきだ。それに明の軍勢は勝つて心驕りたかぶつて居る。相手にし易い。自分はこの際退軍などするものか」と。三奉行がきびしく撤退を促した。仕方なく退いて未だ王城まで達しない、其の手前三十里の所に軍を止めた。明軍は進んで開城に入り、遂に臨津を渡つた。查大受が其の先鋒となつて進み、宗茂の軍と礪石嶺で出會つた。宗茂は之を撃破して百人餘りの明兵を斬り捨てた。そこで如松は其の軍全部をつれてやつて來た。隆景は三萬人を率ゐて碧蹄館で迎へ撃ち、稍々久しく大に戰つた。宗茂と秀包とは側面から敵を撃つた。如松は初め銃砲などの火器を以て平壤を攻め、一戰して勝利を博したので、思ふには「日本兵は格別畏れるにも當らない」と。そこで今度は輕卒に進み、鐵砲や大砲を具へなかつた。刀や槍を持つて、間近く押寄せ、戰ふのであつた。併し我が軍は兵は鋭く、刃は實に切れ味が良い。縦横に揮ひ撃つと、人も馬も皆倒れた。我が軍の銳鋒に當つて來ようとするものもなかつた。我が兵の勇敢な掛聲は天も震ふばかりに轟き渡つて、遂に大に明軍を破り、首を斬ること一萬で又殆んど如松を生捕るばかりの所であつた。敵の逃げるのを追ひ掛けて臨津江に至り、明兵を其の河の中へ押し落した。河の水は之が爲めに流を遮ぎられる位であつた。如松は非常に泣き悲しんで夜を明した。敗軍を引きまゝとめて坡州に退いた。韓の大將や大臣連がもう一度進んで呉れと願つた。併し承知しなかつた。

【語釋】 三奉行(石田三成、増田長盛、大谷吉隆) ○礪石嶺・碧蹄館・坡州(京畿道)

時^ニ天^ノ雨^リ冰^ク釋^ク。如^ク松^ト託^シ言^フ坡^州多^ク泥^ト不^可爲^ス營^ヲ遂^ニ退^入東^坡二^月猶^ホ雨^リ明^馬多^ク病^斃我^兵縱^テ火^ヲ而^テ進^ム。如^ク松^ト退^入開^城遣^テ人^ヲ還^テ明^稱疾^請代^ヲ而^テ韓^人寇^レ我^者不^衰我^兵在^幸州^者亦^爲韓^將權^慄所^ト敗^ル。秀^家等^乃使^使召^テ清^正。清^正平^橋中^寇斬^テ首^虜三^千餘^級。與^直茂[・]賴^定、皆^之都^城。明^兵相^驚曰^ク「清^正自^北道^繞襲^平壤^扼我^歸路^如松^大懼^留諸^將守^臨津^而自^退入^平壤[」]。

【訓讀】 時に天雨ふり冰釋く。如松、坡州は泥多く、營を爲すべからずと託言し、遂に退いて東坡に入る。二月、猶ほ雨ふり、明の馬多く病んで斃る。我が兵、火を縱つて進む。如松、退いて開城に入り、人を遣はして明に還らしめ、疾と稱して代を請ふ。而るに韓人の我に寇する者衰へず。我が兵幸州に在る者、亦韓將權慄の敗るゝとなる。秀家等乃ち使をして清正を召さしむ。清正、橋中の寇を平ぐ。斬首虜三千餘級。直茂・賴定と、皆都城に之を臨津を守らしめ、而して自ら退いて平壤に入る。

【通釋】 其の時、雨が降つて氷が釋けた。如松は坡州は泥沼が多く、陣屋を築くことが出来ないとかこつけ、遂に退いて東坡に入つた。二月になつてもやはり雨が續き、明の馬は随分病死した。我が兵は火をつけて敵の陣地を焼きながら進んだ。如松は退いて開城に遁げ込み、人を遣はして明に還らしめ、病氣だと言ひ立て代理する人を差し廻すように請はしめた。然るに韓人の我に仇するものは、少しも衰へなかつた。我が兵で幸州に在つた者

も亦韓將權慄に敗られた。秀家等はそこで使をやつて清正を召し寄せさせた。折から清正は桶中の賊を平げた。首を斬ること三千餘。大勝利で直茂・頼定などと一緒に皆都城に向つた。明兵共は相驚いて曰ふには「清正は北道から廻つて平壤を襲ひ、我々の歸り路をおさへふせぐのだ」と。如松は大に懼れをなし、諸將を留めて臨津を守らせ、自分は退いて平壤に逃げ込んだ。

語釋 東坡(京畿) ○辛州(忠清)

秀吉使毛利秀元・加藤光泰・細川忠興等、七將赴援。三月、攻晉州。晉州城險、韓王之奔置其重器、以精兵二萬守之。七將皆大敗、退入都城。都城傍有龍山倉。我兵仰食焉。查大受、李如梅、潛兵火倉。而金命元等軍臨津南、絕我糧道。已而我與明軍皆大疫。三奉行以糧竭欲退守釜山。光泰曰「糧竭寧食砂。國都不可棄也。清正亦爭之曰「吾以孤軍破強胡數萬、明韓兵何足爲意。何不奪其糧。三成曰「公宜往奪。不得取助於人。清正曰「諾。即夜、以手兵襲明軍、奪糧而還。」

訓讀 秀吉、毛利秀元・加藤光泰・細川忠興等の七將をして赴き援けしむ。三月、晉州を攻む。晉州の城は險なり。韓王の奔るや、其の重器を置き、精兵二萬を以て之を守らしむ。七將皆大に敗れ、退いて都城に入る。都城の傍に龍山倉あり。我が兵、食を仰ぐ。查大受・李如梅、兵を潛めて倉を火く。而して金命元等、臨津の南に軍を置きて、我々の糧道を絶つ。我々が糧を食はん。國都は棄つ可からざるなり」と。清正も亦之を争うて曰く「吾れ孤軍を以て強胡數萬を破る。明韓の兵、何ぞ意と爲すに足らん。何ぞ其の糧を奪はざる」と。三成曰く「公宜しく往いて奪ふべし。助を人に取るを得ず」と。清正曰く「諾」と。即夜、手兵を以て明軍を襲ひ、糧を奪つて還る。

通釋 秀吉は毛利秀元・加藤光泰・細川忠興などの七人の大將をやつて赴き援けさせた。三月、晉州を攻めた。晉州城は元來險固であつた。前に韓王が逃げ出す時に其の大切な器を藏ひ込んで、精兵二萬人を以て之を守らせたのである。七將は皆大敗北して、退いて都城に入った。都城の傍には龍山倉といふ米倉があつた。我が兵は此處から兵糧の供給を仰いで居たのである。すると查大受・李如梅は兵を潛めて倉に火をつけて焼いてしまつた。そして金命元等は臨津の南に陣取り、我が軍の糧道を絶ち切つた。さうかうして居る内に我が軍も明の軍も大いに疫病の流行に悩まされた。三人の奉行等は兵糧が無くなつたので、退いて釜山を守らうと思つた。光泰が曰ふのに「兵糧が無くなつたら寧ろ砂でも食はう。決して國都を抛棄してはならない」と。清正も亦反對して言ふには「自分は孤立無援の軍隊を以て強い胡ども數萬を破つたのだ。明韓の兵は實際恐るゝに足りない。なぜ敵の兵糧を奪ひ取らないのだ」と。すると三成が曰ふのに「それでは貴公が掛けて取つて來たら宜いだらう。併し人に助勢を請うてはならぬぞ」と。清正が曰ふには「いかにも承知した」と。其の夜すぐ手勢をつれて明軍を襲ひ、兵糧を奪つて返つて來た。

時如松使沈惟敬計和。惟敬赴北京報曰「秀吉欲封日本國王、如足利氏故事耳。」因

與石星定議來韓都城厚賂行長曰太閤歸韓俘則割慶尙全羅忠清三道封爲王。行長等素不學不諳封王故事以爲王於明之謂也欲許之已知其非惟敬巧彌縫之清正不可其議行長與三奉行皆懷歸乃報秀吉曰明人欲尊殿下爲皇帝。秀吉即許和惟敬請解都城兵諸將乃焚城更殿而東如松乃肯進韓相柳成龍請尾擊之乃遣李如栢等萬餘人觀我陣整不敢逼諸將至慶尙起蔚山東萊金海巨濟等十八屯以埃秀吉令明主以孫鑛代宋應昌遣劉綎吳惟忠等分守星州居昌諸城而使謝用梓沈一貫沈惟敬來謁秀吉于行營秀吉饗明使者還之遣小西如安與偕放還清正所俘二王子大臣以下以大友義統不救行長罰奪其封遂令在韓諸將屠晉州以償前敗。

訓讀 時に如松、沈惟敬をして和を計らしむ。惟敬、北京に起き、報じて曰く「秀吉、日本國王に封する、足利氏の故事の如きを欲するのみ」と。因つて石星と議を定め、韓の都城に來り、厚く行長に賂ひて曰く「太閤、韓の俘を歸さば、則ち慶尙・全羅・忠清の三道を割き、封じて王と爲さん」と。行長等素より不學、封王の故事を語んぜず。以爲へらく「明に王たるの謂なり」と。之を許さんと欲す。已にして其の非を知る。惟敬、巧に之を彌縫す。清正其の議を可かず。行長、三奉行と、皆歸るを懷ひ、乃ち秀吉に報じて曰く「明人、殿下を尊んで皇帝と爲さんと欲す」と。秀吉即ち和を許す。惟敬、都城の兵を解かんと請ふ。諸將乃ち城を焚き、更々殿して東す。如松乃ち肯て進む。韓相柳成龍、之を尾撃せんと請ふ。乃ち李如栢等萬餘人を遣はし、我が陣の整ふを觀て、敢て迫らず。諸將、慶尙に至る。蔚山・東萊・金海・巨濟の十八屯を起して、以て秀吉の令を埃つ。明主、孫鑛を以て宋應昌に代らしめ、劉綎・吳惟忠等を遣はし、分つて星州・居昌の諸城を守らしめ、而して謝用梓・沈一貫・沈惟敬をして、來つて秀吉に行營に謁せしむ。秀吉、明の使者を饗して之を還し、小西如安を遣はして與に偕にし、清正の俘ふる所の二王子大臣以下を放還せしむ。大友義統、行長を救はざりしを以て、罰して其の封を奪ひ、遂に在韓諸將をして、晉州を屠つて以て前敗を償はしむ。

通釋 其の時、如松は沈惟敬に和睦のことを計らせた。惟敬は北京に行つて報告して曰ふには「秀吉は足利氏の先例のやうに、日本國王に封じて貰ひ度いと、思つて居るのです」と。そこで石星と相談をきめ、韓の都城に來て行長に澤山の賄賂を贈つて曰ふには「豊太閤が韓の捕虜を返して下さるなら、慶尙・全羅・忠清の三道を差し上げて王様に封じませう」と。行長等は元來一片の武將にすぎないので深い學問は無く、王に封ずるといふ故事など知つてゐない。王に封ずるとは、つぎり明の王様になることだと思ひ込んだ。だから惟敬の言を承諾しようと思つた。その内に其の誤りを悟つた。惟敬は上手に程よく、そこを取り繕つて居た。清正は何としても、其の議を聞入れようとはしなかつた。行長と三人の奉行とは皆日本に歸りたくなり、秀吉に報じて曰ふには「明の者共は殿下を尊んで、皇帝に戴かうと欲して居ります」と。秀吉は早速和睦することを許した。惟敬は都城の兵を解除せられんことを願つた。そこで諸將は城を燒いて、更るゝ後詰めになつて東に向つた。そこで、如松は肯

へて進出して来た。韓相の柳成龍が日本軍の背後から攻撃したいと申し出た。そこで李如栢等一萬餘人を遣はして見たが、我が陣立の立派に整つて居るのを見て強ひて逼らうともしなかつた。諸將は慶尙道に着いた。蔚山・東萊・金海・巨濟などの十八個所の屯所をこしらへて、秀吉の命令の來るのを俟つた。明主は孫鏞を以て宋應昌に代らせ、劉綎・吳惟忠等を遣はして、分つて星州や居昌の諸城を守らせ、又謝用梓・沈一貫・沈惟敬などの使者をして、秀吉と那古耶の行營に於て謁見させた。秀吉は明の使者を御馳走して之を返し、小西如安を遣はし一緒に同行させ、清正が捕へた二王子大臣其他を放ちかへした。又大友義統は鳳山で行長を救はなかつたので、其の罰として領地を取り上げ、遂に在韓の諸將に命令して、晋州を屠り倒して、前の敗北を償ふやうに言ひ渡した。

語釋 金海・居昌(慶尙) ○其封(豐)

六月、諸將合兵圍晋州。城兵益熾。我軍填濠蒙竹楯仰攻。城上矢石如注。清正造龜甲車、牛革包之、載以死士、穿城足。樓櫓崩折。清正與黑田長政先登。諸將繼之、斬城將徐禮元、金千鎰等、虜六萬餘人、夷城池而還。醜禮元首、獻之行營。仍屯故地。韓王大驚、訴之明。李如松令沈惟敬來見、行長曰「公等許和、未十日有晋州之事、何也」。行長怒曰「汝請和而明兵入韓、者益衆、何也」。惟敬語塞。去至北京、請石星召還如松以下、獨留劉綎、吳惟忠等萬人。

訓讀 六月、諸將兵を合せて晋州を圍む。城兵益々熾なり。我が軍、濠を填め、竹楯を蒙りて仰ぎ攻む。城上、矢石注ぐが如し。清正、龜甲車を造り、牛革もて之を包み、載するに死士を以てし、城足を穿つ。樓櫓崩折す。清正、黒田長政と先登す。諸將之に繼ぎ、城將徐禮元・金千鎰等を斬り、六萬餘人を虜にし、城池を夷げて還る。禮元の首を醜し、之を行營に獻じ、仍故地に屯す。韓王大に驚き、之を明に訴ふ。李如松、沈惟敬をして、來つて行長に見えしめて曰く「公等和を許す。未だ十日ならざるに、晋州の事有るは何ぞや」と。行長怒つて曰く「汝、和を請うて、明兵の韓に入る者益々衆きは何ぞや」と。惟敬、語塞る。去つて北京に至り、石星に請ひ、如松以下を召還し、獨り劉綎・吳惟忠等萬人を留む。

通釋 六月、諸將は兵を一緒にして晋州を取り圍んだ。城中の兵は益々勢が盛であつた。我が軍は城の周囲の濠を埋め、竹製の楯を蒙りて、城の上に見て攻め寄せた。城の上から矢や石などが降り注ぐやうに飛んで來た。清正は堅い板を以て龜の甲に似せた車を作り、牛の皮でもつて此の車を覆ひ包み、それに決死隊の兵を載せ、城の根に穴を掘らせた。城の樓臺や物見櫓などが崩れ折れてしまつた。清正は黒田長政と共に先頭に立つて登つて行つた。諸將も之につゞき、城將徐禮元・金千鎰等を斬り捨て、六萬餘人を皆殺しにし、又城や濠を押し潰して平らな地面として引き返し、禮元の首を鹽漬にして秀吉の陣屋へ送り、相も變らず故の屯所に陣取つて居た。韓の王は非常に驚いて、之を明に訴へ知らせた。李如松は沈惟敬をして來つて行長と會見させて曰ふには「已に和睦を許された。まだ十日も経たぬ内に晋州の事件が勃發したのはどうしたわけか」と。行長は怒つて曰ふには「お前の方で先きに和睦を請ひながら、明兵の韓に入る者が益々多くなつて行くのは何ういふ理由だ」と。惟敬はさすがにグツと言ひ詰つた。去つて北京に歸り、石星に頼んで如松以下を召しかへし、只劉綎・吳惟忠等一萬人だけ

を留めることにした。

明主疑如安不敢納、舍之遼東。秀吉亦以如安久不還意、惟敬欺己、日夜謀議軍事。黑田孝高私語同僚曰、「吾聞外征諸將有威無恩、所過無不殘滅、夷民逃匿、野毋青草。是得其地、果何益哉。且聞兩先鋒爭功相鬪、法令牴牾、衆莫知所從。而浮田宰相不能制之。夫浮田、非統御之才也。能堪此任者、非德川則前田、若孝高而已。」秀吉側聽而首肯之。已而大召諸將、會議行臺曰、「朝鮮之事、如今日狀、則何時定乎。乃公不可不自往也。吾留家康使守吾邦、無復所顧慮焉。今舉國內兵、雖少猶可得三十萬人。因顧諸將曰、「利家、汝將五萬。曰、「氏郷、汝亦將五萬。吾親將十五萬、爲中軍。左右汝二人、掃蕩朝鮮、直入于明。疾具兵艦、吾意決矣。」

訓 明主、如安を疑ひ、敢て納れず。之を遼東に舍す。秀吉も亦如安久しく還らざるを以て、惟敬、己を欺くと思ひ、日夜軍事を謀議す。黒田孝高私に同僚に語つて曰く、「吾れ聞く、外征の諸將、威有つて恩無く、過ぐる所殘滅せざる無く、夷民逃匿し、野に青草毋しと。是れ其の地を得るも、果して何の益ぞや。且つ聞く、兩先鋒、力を争ひて鬪鬪き、法令牴牾し、衆、從ふ所を知る莫し。而して浮田宰相、之を制する能はずと。夫れ浮田は、

統御の才に非ざるなり。能く此の任に堪ふる者は、徳川に非ざれば、則ち前田、若しくは孝高のみ」と。秀吉、側聽して之を首肯す。已にして大に諸將を召し、行臺に會議す。曰く、「朝鮮の事、今日の狀の如くば、則ち何れの時にか定まらん。乃公自ら往かざる可からず。吾れ家康を留めて吾が邦を守らしめば、復顧慮する所無けん。今、國內の兵を擧ぐれば、少しと雖も、猶ほ三十萬を得べし」と。因つて諸將を顧みて曰く、「利家、汝五萬に將たれ。曰く、「氏郷、汝も五萬に將たれ。吾れ親ら十五萬に將として中軍と爲り、汝二人を左右にし朝鮮を掃蕩し、直に明に入らん。疾く兵艦を具へよ。吾が意決せり」と。

通釋 明主は如安を疑つて敢て聞き納れようとしなかつた。之を遼東に留めて置いた。秀吉も亦如安が長く歸らないので、惟敬が自分を欺したのだと悟り、日夜軍事を謀つて、相談に耽つた。黒田孝高は私に同僚の者と語つて曰ふには、「外征の諸將は武威はあるが、恩顧を施すこと更に無く、攻め行く所は皆そこなひ滅すことばかりなので夷の民は逃げ匿れ、野山も青草がないほどに荒れ果ててしまつたと聞いて居る。これでは其の土地を取つたと何の利益にもならない。尙ほ聞く所に依れば清正・行長の兩先鋒が功を争つて互ひに鬪き合ひ、軍事の法令は相違つて人々從ふ所を知らない。そして浮田宰相は之を制御することが出来ないのださうだ。元來浮田氏は人を統べ抑へる才能は乏しい人だ。能く此の任に務め堪へることの出来る者は徳川公でなければ前田氏だ。或ひは斯く申す自分位ひのものだ」と。秀吉はそれとなく聽き知つて、成程さうかと肯いた。其の内に秀吉は大に諸將を召し集め、假本營に會議を開いた。秀吉は曰ふのに、「朝鮮征伐の事が、今日のやうな状態ならば、結局何時になつたら收まることだらう。斯くなる上は余自ら乗り出さずばなるまい。余は家康を留めて我が國を守らしめて置けば、あとの心配は更にない。今國中の兵隊を全部募つたら、少くとも、猶ほ三十萬は得られるだらう」と。

因つて諸將を顧みて曰ふには「利家、お主は五萬人に大將となれ」と。又曰ふのに「氏郷、お主も又五萬人に大將となれ。余は自ら十五萬人に將となつて中央部隊を率ゐ、お主等二人を左右兩翼として、朝鮮を綺麗さつぱり薙ぎ掃つて眞直に明に攻め入らう。早く軍隊輸送の船を具へる。余の決心は定まつたぞ」と。

德川公弗憚謂利家氏郷曰「二公擢于群中榮孰大焉僕少小事弓馬今雖老矣猶足以當一面何居守爲二公幸推輓之彈正少弼進曰德川公勿復言臣視殿下近狀彼爲野狐所憑爾秀吉怫然扣刀而跽曰吾爲狐憑有說乎無說則死少弼對曰有說也饒使無說臣固不辭死且如臣等頭雖到十百何足惜乎顧天下纔定瘡痕未愈人人希休息無爲而殿下乃興無故之軍以殘暴異域使我父子兄弟暴骸骨於海外哭泣之聲四聞加之漕轉賦役之相因所在盡爲荒野當是之時殿下一舉趾則六十州之寇賊雷動風起雖有德川公安得鎮定之乎是其所以願外征爾臣恐殿下舟師未達釜山而根本之地已爲他人所據是勢之最易觀者使殿下有平昔之心豈有不察於此不察於此故謂之狐憑耳鄙語曰「鼯欲噬人反噬於人」殿

下之謂也。

訓讀 德川公憚ばず。利家氏郷に謂つて曰く「二公群中に擢んでらる。榮孰か焉より大なる。僕、少小より弓馬を事とす。今老いたり。雖も、猶ほ以て一面に當るに足る。何ぞ居守を爲さん。二公、幸に之を推輓せよ」と。彈正少弼進んで曰く「德川公、復言ふこと勿れ。臣、殿下の近狀を視るに、彼れ野狐の憑る所と爲りしのみ」と。秀吉、怫然として刀を叩へて跪いて曰く「吾れを狐憑となすは、説有るか。説無ければ則ち死せん」と。少弼對へて曰く「説有るなり。饒使説なきも臣固より死を辭せず。且つ臣等の頭の如きは、十百を到ると雖も、何ぞ惜むに足らんや。顧ふに天下纔に定り、瘡痕未だ愈えず。人人、休息無爲を希ふ。而るに殿下は乃ち故なきの軍を興し、以て異域を殘暴し、我が父子兄弟をして骸骨を海外に暴さしむ。哭泣の聲四もに聞ゆ。之に加ふるに漕轉賦役の相因る、所在盡く荒野となる。是の時に當り殿下一たび趾を擧ぐれば、則ち六十州の寇賊、雷動風起せん。德川公有りと雖も、安んぞ之を鎮定するを得んや。是れ其の外征を願ふ所以のみ。臣恐る、殿下の舟師未だ釜山に達せずして、根本の地、已に他人の據る所と爲らん。是れ勢の最も觀易き者、殿下をして平昔の心有らしめば、豈に此に察せざる有らん。此に察せず、故に、之を狐憑と謂ふのみ。鄙語に曰く「鼯、人を噬はんと欲し、反つて人に噬はる」と。殿下の謂なり」と。

通釋 德川家康は之を喜ばなかつた。利家氏郷に向つていふには「お二人は大勢の中から抜き出されなすつた。誠に面目此の上もござらぬ。併し拙者とても弱年より弓馬を業とする士である。今年を取つたと言へ、猶ほ一面を引き受けて戦ふことは出来る。どうしてこちらに留まつて守つて居るやうなことを致さうや。御兩所に

は何卒取り持つて、出陣出来るやうに計つて下されよ」と。すると彈正少弼(淺野長政)が進み出て曰ふには「徳川殿、もう何もお言ひ召さるな。拙者が此の頃の殿下の御様子を見ると、どうも殿下は狐にでもつかれておられるやうです」と。秀吉はサツト顔色を變へて怒り、おつ取り刀で膝頭をついて曰ふには「乃公が狐につかれたとは何んといふ譯か。若しその譯がなければ討ち首だぞ」と。少弼は答へて曰ふに「無論譯がございます。よし言譯が出来ないにしても、私は固より死を惜しむものでは御座いませぬ。それに私共の首などは、十や百切つた所で何の惜しいことがありません。さて思ふに、今、天下はやつと平定したばかりで、人民の傷手もまだ全治しませぬ。人々は只只休息して事なからんことをのみ希つて居る状態です。然るに殿下は却つて理由のない軍をおこして外國を荒し廻り、我が國の父子兄弟をして骸骨を海外に曝らさしめておいでになる。今その泣き叫ぶ歎きの聲は四方八方に起つてゐます。おまけに運漕のこと、租税とが一緒になつて割當てられたので、至る所盡く荒野と變り果てました。此の際、殿下が一度足をあげて朝鮮へお出掛けなられたら、日本六十州の一揆は雷の如く動き風の起る様に吹き捲つて騒動することです。たとひ徳川公が居残つてをられても、どうして之を鎮めおさへることが出来ませうや。さればこそ徳川公も外征を願はれるわけ合ひのものです。私は恐れるのでありますが、殿下の軍勢がまだ釜山にも達せられない内に根據地日本が已に他人の手に奪はれて終ひませう。是は最も見易い天下の大勢で、若し殿下をして昔のやうな心持がなくなりなさらば、どうしてこの位のことを見抜かれないことはない筈です。之を察しないから狐につかれたと申し上げたまで、ございます。俗間の諺に「鼈が人を食はうとして、却つて人に食はれて終ふ」と申してゐます。此はとりもなほさず殿下のことを申すので御座います」と。

推轂(前より曳く)

秀吉益々怒曰「狐乎、鼈乎、吾且舍諸、以臣罵君、不可舍也。將拔刀斬之。利家氏郷進擁之曰「臣等在此。苟欲行誅戮、不必勞親手。因斜睨少弼曰「可去矣。少弼乃徐起還舍。待罪數日。有上變事者、肥後、賊梅北舉兵、取佐敷城。秀吉大驚、急召少弼、謝曰「吾甚慚於汝也。命汝兒幸長爲大將、往定肥後。因命徳川公以其將本多忠勝助之。未發、肥後人斬梅北來獻、乃止。命少弼按定其國、滅韓成卒。」

秀吉益々怒つて曰く「狐か、鼈か、吾れ且く諸を舍く。臣を以て君を罵る、舍す可からざるなり」と。將に刀を抜いて之を斬らんとす。利家氏郷進んで之を擁して曰く「臣等此に在り。苟も誅戮を行はんと欲せば、必ずしも親手を勞せず」と。因つて少弼を斜睨して曰く「去る可し」と。少弼乃ち徐に起つて舍に還る。罪を待つこと數日。變事を上る者あり、肥後の賊梅北、兵を擧げて佐敷城を取ると。秀吉、大に驚き、急に少弼を召し、謝して曰く「吾れ甚だ汝に慚づるなり。汝の兒幸長に命じて大將と爲し、往いて肥後を定めしめん」と。因つて徳川公に命じ、其の將本多忠勝を以て之を助けしむ。未だ發せず。肥後の人梅北を斬つて來り獻す。乃ち止む。少弼に命じて其の國を按定せしめ、韓の成卒を滅す。

秀吉は益々怒つて曰ふには「狐であらうが、それは暫らく論じない。兎にも角にも臣

下の身分を以て主君を罵ることは差し許すこと罷りならぬ」と。すんでのことに抜刀して之を斬らうとした。利家と氏郷は進み寄つて秀吉を抱き止めて曰ふには「私共がこゝに居ります。若し本統に殺すと思召しますならば、必ずしもお手づからなさらずともよろしうございませう」と。そこで少弼を横に睨みつけて曰ふは「そこを去れ」と。そこで少弼は靜かに起ち上つて陣屋に返つて行つた。少弼は數日罪を待つてゐた。肥後の賊、梅北といふ者が兵を擧げて佐敷城を取つたといふ變事を報するものがあつた。秀吉は大層驚き、急に少弼を召し呼んで謝まつて曰ふには「余は甚だお前に恥入る。お前の倅幸長に命じて、大將となし肥後を鎮定に遣はすであらう」と。因つて徳川公家康に命令して徳川公の大將本多忠勝をして之を助けさせた。まだ出發しなかつた。肥後の人が梅北の首を斬り、獻上して來た。そこで此の軍の出立は中止した。少弼に命じて肥後を安んじ定めさせ、又韓の守備兵も減らすことにした。

語釋 佐敷城(後肥)

八月、淺井氏復生男。秀吉大喜、使前田利家攝軍事、而自歸大阪。命所生男幼字棄丸、長曰秀頼。韓王乃敢歸都城。清正喪其俘、心甚不懌。又知和議必不成、十一月進攻安康、大破之。虜尤畏清正、呼曰鬼上官。時韓野多尸、虎豹群至。我將士留戍者因大獵之、殺獲無數。檻其尤大者以獻焉。三年正月、大城于伏見、與卒二十五萬人將

帥萬石以上皆助役。三月、秀吉與秀次及徳川前田諸將遊吉野。四月、浴有馬温泉。是年、加藤光泰卒。初、石田三成以韓都之議不合、隙光泰甚深、遂毒之也。嗣子貞泰猶幼。徙邑美濃、以甲斐賜淺野氏。

訓 八月、淺井氏復生男を。秀吉大に喜び、前田利家をして軍事を攝せしめ、而して自ら大阪に歸る。生む所の男に幼字を棄丸と命じ、長じて秀頼と曰はしむ。韓王乃ち敢て都城に歸る。清正其の俘を喪ひ心甚だ懌ばす。又和議の必ず成らざるを知り、十一月、進んで安康を攻め、大に之を破る。虜尤も清正を畏れ、呼んで鬼上官と曰ふ。時に韓の野に尸多く、虎豹群り至る。我が將士の留戍する者、因つて大に之を獵し、殺獲無數なり。其の尤も大なる者を檻し以て獻す。三年正月、大に伏見に城き、卒二十五萬人を興す。將帥の萬石以上は皆役を助く。三月、秀吉、秀次及び徳川前田の諸將と吉野に遊び、四月、有馬の温泉に浴す。是の年、加藤光泰卒す。初め石田三成、韓都の議合はざるを以て、光泰と隙する甚だ深く、遂に之を毒するなり。嗣子貞泰猶幼し。邑を美濃に徙し、甲斐を以て淺野氏に賜ふ。

通釋 八月、秀吉の寵妾淺井氏はまた男の子を産んだ。秀吉は大に喜んで、前田利家をして軍事を代理させて自分は大阪に歸つた。そして産れた所の其の男の子に幼名を棄丸と名附け、成長後は秀頼と呼ばせた。韓の王は和議の成るのを信じて、強ひて都城に歸つた。清正は先に捕へた二王子と大臣を放免したので心中甚だ面白くなかつた。又和睦のことは成立しないものと知つたので、十一月に、進んで安康を攻めて大に之を破つた。朝鮮

人は中でも清正を一番畏れて、鬼上官と呼んでゐた。其の頃朝鮮の野には死骸が澤山ころがって居たので、虎や豹が群れ集まつて来た。韓に留り守つて居た日本の將卒は、此の虎や豹を澤山獲つて、殺したり生捕つたり、殆んど無数であつた。そして其の内一番大きな奴を檻に入れて秀吉に献上した。三年の正月、大々的に伏見に城を築き、人夫は二十五萬人を使つた。一萬石以上の封地を持つて居る大名には皆工事に助勢させた。三月、秀吉は秀次や徳川・前田の諸將と一緒に吉野山に遊び、四月には有馬温泉に入浴した。この年加藤光泰が死んだ。初め石田三成は、韓の國都に於て議論が合はなかつたので、随分光泰と不仲になつてゐたが、遂に之を毒殺して終つたのである。其の嗣子貞泰はまだ幼少であつた。其の封邑を美濃國に移し、甲斐は淺野氏に賜はるることとなつた。

當是時韓成未撤韓王數促明定和十月明主召如安石星命沿道供帳十二月至燕星就拜於其館待以王公禮厚賂之使曲成其媾如安諾之居數日明主延見之如安騎而入至闕衛士呵下之如安昂然不下入見明主明主令諸將相大臣會于左闕悉問秀吉意如安所答勉副星意明乃定封王議遣正使李宗誠副使楊方亨以沈惟敬爲導惟敬缺望且難星曰前約七事今止封冊事必不成星弗聽如安與三使皆發

訓讀 是の時に當り、韓の成未だ撤せず。韓王、數く明を促して和を定む。十月、明主、如安を召す。石星、沿道に命じて供帳せしむ。十二月、燕に至る。星就いて其の館に拜し、待つに王公の禮を以てし、厚く之に賂ひ、曲げて其の媾を成さしむ。如安之を諾す。居ること數日、明主之を延見す。如安騎して入り、闕に至る。衛士呵して之を下す。如安昂然として下らず。入つて明主を見る。明主、諸將相大臣をして左闕に會せしめ、悉く秀吉の意を問ふ。如安答ふる所、勉めて星の意に副ふ。明乃ち封王の議を定め、正使李宗誠、副使楊方亨を遣はし、沈惟敬を以て導と爲す。惟敬、缺望し且つ星を難じて曰く「前に七事を約す。今封冊に止めば、事必ず成らざらん」と。星聽かず。如安三使と皆發す。

通釋 此の當時 韓の守備はまだ撤しなかつた。韓王は何度も明國に催促して、和睦が早く成立するやうにして戴き度いと願つた。十月、明主は遼東に留めて置いた如安を呼び戻した。石星は道筋に命じて充分に接待させた。十二月、北京に到着した。石星はわざ／＼出掛けて其の旅館で面會し、王公に對する禮儀を以て待遇したり、澤山の賄賂を贈つたりして、無理にも和睦が成り立つ様に頼んだ。如安は之を承諾した。數日待つて居ると、明主がいよく面會することになつた。如安は馬に乗つて宮門を入つた。門番の役人は叱りつけて馬から降りした。如安は鼻高々と威張つて降りようとはしなかつた。そのまゝ通りすぎて、遂に御殿に入つて明主に面會した。明主は將軍や宰相や大官連を左闕に召し集めて、いよく秀吉の意中を問ひ聞かした。如安は出来る丈に石星の思惑に副ふ様に答へた。そこで明は王に封するといふ相談を決定して、正使李宗誠、副使楊方亨を派遣し、又沈惟敬を案内役とすることにした。すると惟敬は之を不満足に思ひ、且つ石星を非難して曰ふには「前には七ヶ條を約束した。今封王の一事だけでは、此の談判はきつと成立しないだらう」と。併し石星は言ふことを

聞かなかつた。如安は三人の使者と共に發足した。
七事(俘を歸すこと。地を割くこと。入貢すること。封冊すること。他の三事は傳はらない。)

四年二月、蒲生氏郷卒。幼子秀行嗣。尋徙之下野、以會津封上杉景勝。三月、伏見城成。秀吉徙居、以畧明使者、置淺井氏于淀。世呼淀君。淀君既生秀頼、而秀次無避位之意、以故秀吉城伏見、欲以讓秀次、而予秀頼以大阪也。秀次爲人頑放、其留守聚樂、淫虐日甚。漁色、不論貴賤、右大臣晴季、女新寡、而有孤女。秀次并取母子、嬖之上。皇崩而數日、出獵、手刃近臣、夜出、行人、自櫓上銃人爲戲、至欲剖孕婦。世呼曰殺生關白。以殺生與攝政音相近也。田中吉政爲其傳、數諫之。乃託事遠吉政。

四年二月、蒲生氏郷、卒す。幼子秀行嗣ぐ。尋いで之を下野に徙し、會津を以て上杉景勝を封す。三月、伏見城成る。秀吉徙り居り、以て、明の使者を畧つ。淺井氏を淀に置く。世、淀君と呼ぶ。淀君既に秀頼を生む。而して秀次位を避くるの意無し。故を以て秀吉伏見に城き、以て秀次に譲り而して秀頼に予ふるに大阪を以てせんと欲するなり。秀次人と爲り頑放、其の聚樂に留守するや、淫虐日に甚だし。色を漁するに貴賤を論ぜず。右大臣晴季の女、新に寡となりて孤女有り。秀次、母子を并せ取りて之を嬖す。上皇崩じて數日なるに、出で、獵し、手づから近臣を刃し、夜出で、行人を戕し、櫓上より人を銃して、戯れと爲し、孕婦を剖かんと欲するに至る。

世呼んで殺生關白といふ。殺生と攝政と、音相近きを以てなり。田中吉政、其の傳たり。數々之を諫む。乃ち事に託して吉政を遠ざく。

四年の二月、蒲生氏郷が死んだ。まだ年齒のゆかない秀行が嗣いだ。間もなく之を下野に國替へし、會津には上杉景勝を封じた。三月、伏見城が落成した。秀吉はこゝに移り住み、そして明の使者を待つて居た。淺井氏を淀に住ませた。世間の人は之を淀君と呼んだ。淀君は既に秀頼を産んだ。而るに秀次には位を避ける意志がなかつた。そこで秀吉、伏見の城を築いて之を秀次に譲り、そして秀頼には大阪城を與へようと思つたのである。元來秀次の人物といふものは我儘でだらしがなく、聚樂第に留守して居た時などは、色に耽り人を虐げること日増しに甚だしくなつた。女色を漁る時は身分の貴い賤いなどは考へて居らなかつた。右大臣晴季の娘が其の頃夫に死なれて寡婦となり、一人の娘の子があつた。秀次は此の母子を一緒に召して妾とし寵愛した。正親町上皇がお崩れになつた時でも、五六日も立たぬ内に狩に出かけ、その上、手づから近臣を殺したり、夜は邸を抜けて通行人を斬つたり、又物見櫓の上から鐵砲で人を撃ち殺してなくさみとしたり、遂には孕み女の腹を剖いて見度いといふまでに至つた。それで世間では殺生關白と諱名するやうになつた。つまり殺生と攝政とは音が相似て居るからであつた。田中吉政は秀次のお守役であつた。度々之を諫めた。そこで何とか事にかこつけて吉政を遠ざけて終つた。

上皇(正親町天皇、文祿二年崩御。)

秀吉之再赴行營也、外議以爲秀次當代行、而殊無行意。黑田孝高說之曰、殿下之

威靈可謂甚矣。文武之轂、相擊于門。天下士民視其喜怒、以為慶弔。殿下知其故乎。秀次曰、「吾爲關白故耳。」曰、「否。殿下不以太閤爲叔父、則能得爲關白乎。太閤年已六十、猶枕甲而眠、而殿下恬然獨縱嗜慾、何不自省乎。夫位極乎人臣、而望不厭於天下、怨之所萃、姦之所乘也。臣竊爲殿下危之。爲殿下計者、宜赴那古耶、代統軍事。太閤已倦兵事、必喜許之。立功自固、誰得動之。願殿下熟思之。」蒲生氏郷亦勸其濟海、自請爲其先鋒。秀次皆弗納。有流言闕白謀反。秀吉弗問。及秀頼生、秀次自疑被廢、益不聊賴。石田三成、増田長盛與之有郤。希秀吉旨、數惡之。

訓讀 秀吉の再び行營に赴くや、外議以爲へらく、秀次當に代り行くべしと。而るに殊に得意無し。黒田孝高之に説いて曰く、「殿下の威靈甚だしと謂ふべし。文武の轂門に相撃ち、天下の士民其の喜怒を視て、以て慶弔を爲す。殿下、其の故を知るか」と。秀次曰く、「吾れ關白たるが故のみ」と。曰く、「否。殿下、太閤を以て叔父と爲さずば、則ち能く關白と爲るを得んや。太閤、年已に六十、猶ほ甲を枕にして眠る、而るに殿下、恬然として獨り嗜慾を縱にす。何ぞ自ら省みざるや。夫れ位人臣を極めて望天下に厭かず、怨の萃る所、姦の乘する所なり。臣竊に殿下の爲めに之を危む。殿下の計を爲すには、宜しく那古耶に赴き、代つて軍事を統ぶべし。太閤已に六十、

事に倦めり。必ず喜んで之を許さん。功を立て、自ら固くせば、誰か之を動かすを得ん。願はくは殿下、之を惡し思せよ」と。蒲生氏郷も亦其の海を濟るを勸め、自ら其の先鋒と爲らんと請ふ。秀次皆納れず。流言あり、關白、反を謀ると。秀吉問はず。秀頼生るゝに及んで、秀次自ら廢せらるゝを疑ひ、益々聊賴せず。石田三成・増田長盛、之と郤有り。秀吉の旨を希ひ、數々之を惡す。

通釋 秀吉が再び那古耶の假本營に行くやうになると、世間の噂では秀次が當然代つて行くのだらうといふのであつた。併し秀次には決して行く氣は無かつた。黒田孝高は之に説いて曰ふには「殿下、あなたの御威光は誠に大層なものでございます。文武の轂門に相撃ち、天下の士や人民は、あなたの喜びと怒りに従つて、喜んでたり悲しんだりして居ります。殿下は其のわけを知つてをられますか」と。秀次が曰ふのに「勿論自分が關白だからである」と。孝高は「いや、いや、あなたも太閤を叔父様となされないならば、どうして關白となることが出来ませう。太閤はもうお年は六十にもなられたが、今以て戰の道具を身につけてお寝みになるといふ風であります。而るに殿下は安氣に構へて、自分の好みや慾望を縱にして居られます。何故自ら御反省なさらぬか。一體位は人臣として登り詰め、而かも尚ほ天下に望みを持つて厭きることをされぬ。それでは遂には怨みの集る所となつたり、又奸がしこい家來の乘する所となるものであります。私は祕に殿下のために之を心配して居ります。殿下の爲めに考へて見ると、那古耶にお出でになつて、太閤様に代つて軍事を統べられる事がよろしいです。太閤様はもう軍のことはお倦きになりました。必ず喜んで之をお許しになるでせう。手柄を立て、自分で自分の根本を固くしたら、誰が之を動かすことが出来ませう。どうか殿下よ、之をよく考へて下さい」と。蒲生氏郷も亦、秀次が海を越えて朝鮮へ乗り出すことをすゝめ、自分は其の先鋒とならうと申し出た。併し秀次は

いづれも皆聞き納れなかつた。そうかうして居る内に、關白秀次が謀叛をするといふ噂が立つた。秀吉は之を捨てて置いた。秀頼が産れると、秀次は後嗣を廢されるのではないかと疑つて、益々不安に思つて居た。石田三成・増田長盛は秀次と仲が悪かつた。秀吉のお氣に入らうと思つて、度々秀次を讒言した。

【註釋】 外議(一般の) ○相擊(出入多き故殺と)

初常陸介木村重茲、有寵於秀吉、而爲三成奪其寵、乃結於秀次。秀次自知取怨多也、每出遊輒具鎧仗、又厚贈諸侯伯而與之誓。三成長盛因證其有反形。七月、秀吉使三成、長盛及前田玄以就詰問之。秀次大駭、獻誓書七通。秀吉意稍解。翌夜、重茲乘婦人車入聚樂、盡漏而出。三成偵知以告。比曉、秀次促德川氏嗣子、使朝參。欲因劫爲質。嗣子走歸、伏見。毛利氏亦獻秀次所擬誓書。秀吉大怒、使使召秀次。秀次愛將吉田修理、請假萬人、夜襲伏見、弗聽。遂赴謁、不許見。命放之高野、附僧興山監守焉。興山南征時、首納款者也。於是奏請削秀次在身官爵、廢爲庶人。三成勸遂殺之。潛諷興山促其自裁。秀吉遂遣福島正則、就賜死。然冀興山乞其命也。正則還獻秀次首。秀吉愕然曰、山僧無情。三成請而梟之。京師併其妻兒、姬妾三十餘人、皆斬之。

瘞之一次、名曰畜生冢。

初め常陸介木村重茲、秀吉に寵有りしが、三成に其の寵を奪はる。乃ち秀次に結ぶ。秀次自ら怨を取る。こと多きを知るや、出遊する毎に輒ち鎧仗を具へ、又厚く諸侯伯に贈つて之と誓ふ。三成・長盛、因つて其の反形有るを證す。七月、秀吉、三成・長盛及び前田玄以をして、就いて之を詰問せしむ。秀次大に駭き、誓書七通を獻す。秀吉、意稍解く。翌夜、重茲、婦人の車に乗つて聚樂に入り、漏を盡して出づ。三成偵知し以て告ぐ。曉くる比、秀次、德川氏の嗣子を促して、朝參せしめ、因つて劫して質と爲さんと欲す。嗣子、走つて伏見に歸る。毛利氏も亦、秀次の擬する所の誓書を獻す。秀吉、大に怒り、使をして秀次を召さしむ。秀次の愛將吉田修理、萬人を假り、夜、伏見を襲はんと請ふ。聽かず。遂に赴き謁す。見ゆるを許さず。命じて之を高野に放ち、僧興山に附し監守せしむ。興山は南征の時、首として款を納れし者なり。是に於て、奏請して、秀次在身の官爵を削り廢して庶人と爲す。三成遂に之を殺すを勸め、潛に興山に諷し、其の自裁を促す。秀吉遂に福島正則を遣はし、就いて死を賜はらしむ。然れども興山の其の命を乞ふを冀ふ。正則還り秀次の首を獻す。秀吉、愕然として曰く、「山僧無情」と。三成請うて之を京師に梟し、其の妻兒・姬妾三十餘人を併せて皆之を斬り、之を一次に瘞め、名づけて畜生冢と曰ふ。

【通釋】 初め常陸介木村重茲は秀吉に寵せられて居たが、後に其の寵を三成に取られてしまつた。そこで秀次の方へ附くこととなつた。秀次は人に大分怨まれて居ることに氣が附いて、外に出て遊ぶ時にはいつも鎧や兵器を用意して守り、又諸大名に澤山物を贈つて、恩を施し、之と結托するのであつた。三成と長盛は之を利用して其

の謀叛の證據とした。七月、秀吉は三成・長盛及び前田立以をやつて、詰り問はせた。秀次は非常に驚いて誓ひの書面七通を差出した。秀吉の心は少し解けた。然るに其の次の夜、重茲は目立たぬ様に婦人の車に乗つて聚樂第に入り、真夜中になつて引き上げた。三成は忍びの者を放つて此の事を知り、秀吉に傳へた。夜明け頃になつて秀次は徳川氏の世嗣秀忠に催促して御殿に參上させ、そのまゝ脅しつけて人質に取らうとした。秀忠は走つて伏見に逃げ歸つた。すると毛利氏でも亦秀次から推しつけた誓書の下書きを差し出した。秀吉は非常に怒つて、使をやつて秀次を呼ばせた。秀次が日頃大事に目をかけて居た大將吉田修理は、一萬の軍勢を借りて、夜、伏見を襲撃しませうと願つて見た。秀次は許さなかつた。遂に出かけて秀吉にお目にかゝりに行つた。秀吉は對面を許さなかつた。秀吉は命令して高野山に追放し、僧侶の興山といふ者に預けて監督させた。此の興山といふのは、秀吉の紀州征伐の時に一番最初に内通したものであつた。そこで秀吉は朝廷に願つて、秀次の身に附いて居る、官位や爵を取り上げて、平民に落した。三成は遂に之を殺さんことをすゝめ、潛かに興山にさととして、秀次に自殺を催促させた。秀吉は遂に福島正則をやつて死を賜はらせた。併し秀吉の心の内では興山が命乞ひをするだらうと念じ願つて居た。正則は歸つて秀次の首を献上した。秀吉は吃驚して、「さて、高野の坊主は無情なもんだ」と嘆いた。三成は願つてその首を京都で曝しものにし、妻、子、妾三十餘人皆一緒に斬り殺して、一つの穴に埋め、畜生塚と名附けた。

語釋 畜生塚(畜生は禽獸をいふ。鄙み悪んでかく名づく。隋文帝が太子廣を罵つて畜生といつたことから人を罵るとき畜生といふ。)

以下、重茲有遺腹子、曰重成。其母嘗乳養秀賴。以故秀吉召祿重成。任長門守。以隸於秀賴。三成既誅重茲。遂誣伊達。最上氏黨秀次。有匿名書。曰伊達最上欲分豐臣而霸。秀吉笑曰。是怨家所爲耳。乃皆釋之。淺野左京大夫書記芹川藤助者。亡命歸三成。三成使僞作舊主通聚樂書上之。因發兵圍淺野氏。前田利家爲白其冤。秀吉捕鞠藤助。得實。乃還於淺野氏。磔之。先是大納言秀俊卒。秀俊亦昏暴。嘗觀蜻螟瀑。命左右自投于湫。左右與之俱沒。無嗣。國除以郡山予增田長盛。以藤堂高虎爲今治城主。

訓 聚樂を毀ち、諸邸第を伏見に徙し、召して吉政を賞し、秀次の地を分ち、福島正則に予ふるに清洲を以てし、木村重茲以下を誅夷す。重茲に遺腹の子有り、重成と曰ふ。其の母嘗て秀賴を乳養す。故を以て、秀吉召して重成に祿し、長門守に任じ、以て秀賴に隸す。三成、既に重茲を誅し、遂に伊達、最上氏、秀次に黨すと誣ゆ。匿名の書有り、曰く「伊達、最上、豊臣を分つて覇たらんと欲す」と。秀吉笑つて曰く「是れ怨家の爲す所のみ」と。乃ち皆之を釋す。淺野左京大夫の書記芹川藤助といふ者、亡命して三成に歸す。三成、僞つて舊主、聚樂に通ずる書を作らしめて之を上り、因つて兵を發して淺野氏を圍む。前田利家、爲めに其の冤を白す。秀吉、藤助を捕鞠して、實を得たり。乃ち淺野氏に還して、之を磔せしむ。是より先き、大納言秀俊卒す。秀俊も

亦昏暴、嘗て蜻蛉の瀑を觀、左右に命じて、自ら湫に投ぜしむ。左右之と俱に没す。嗣なし。國除かる。郡山を以て増田長盛に予へ、藤堂高虎を以て今治の城主となす。

聚樂第は打ち毀し、他の邸宅は全部伏見に移し、元秀次のお守役であつた吉政を召し出してそれを褒めて秀次の所領であつた地を分ち與へ、福島正則には清洲を與へ、そして木村重茲以下、秀次の家來を殺して終つた。重茲には死後子供が生れ重成と言つた。其の母が前に秀頼に乳を與へたことがあつた。それ故秀吉は、重成を召し抱へて祿をやり、長門守に任命して、秀頼の部下につけた。三成は既に重茲を殺したが、遂に伊達・最上の兩氏も秀次に味方したと偽り告げた。偶々名前を隠した書附が出たが、それには「伊達・最上の二氏が、豊臣の地を分けて、天下に大將とならうとして居る」と書いてあつた。秀吉は之を見て笑つて曰ふには「これは伊達・最上に怨のある者の仕事だ」と。誰も咎めなかつた。淺野左京大夫の書記で芹川藤助といふ者は、國を逃れて三成の處へ來た。三成は此の者に、舊主の淺野が秀次と氣脈を通じた手紙を偽作させて、之を秀吉に奉り、因つて兵を發して淺野氏を取り圍んだ。前田利家は、淺野の爲めに其の無實の罪であることを申し立てた。秀吉は藤助を捕へて責め立て、實を吐かした。そこで藤助は淺野氏に返して磔の刑にかけさせた。是より先き、大納言秀俊が死んだ。秀俊も亦心暗く亂暴な性質であつた。或る時蜻蛉の瀧を見に行つて、左右のお附きの者に命じて、自分から池に飛び込ませた。左右の近臣は秀俊と一緒に飛込んで溺死した。秀俊には後嗣が無かつた。所領は取り上げられた。郡山を増田長盛に與へ、藤堂高虎を今治城主とした。

蜻蛉瀧(大和吉野山の山中にある) ○湫(瀧) ○郡山(大) ○今治(伊)

當り是時、明三使已入韓境、疑懼不敢進。請我撤兵。諸將不得已、約戍于釜山、未肯濟海歸。李宗誠、貴族子、日夜思歸。惟敬因欲逐而代之。慶長元年正月、小西行長歸告和成。惟敬私從之、以地圖、兵書、蟒服及燕代、良馬三百匹、獻秀吉而去。惟敬曰、「和成敗矣。秀吉、兵將來執我輩。」四月、宗誠遁去。楊方亨問計於惟敬。惟敬曰、「有兩語。汝慎記之。舉我大明奉承日本而已。明主遂以方亨爲正使。惟敬副之。多出金帛資惟敬。齎封冊促往。因令韓發使。韓以和議未固、依違不從。獨使黃愼、朴弘長從之。刻日發。」

是の時に當り、明の三使已に韓境に入り、疑懼して敢て進まず。我に兵を撤せんと請ふ。諸將已むことを得ず、戍を釜山に約し、未だ海を濟つて歸るを肯んぜず。李宗誠は貴族の子なり。日夜歸るを思ふ。惟敬因つて逐うて之に代らんと欲す。慶長元年正月、小西行長、歸つて和の成るを告ぐ。惟敬私に之に従ひ、地圖・兵書・蟒服及び燕代・代の良馬三百匹を以て、秀吉に獻じて去る。宗誠を怱れしめて曰く、「和成れたり。秀吉の兵、將に來つて我が輩を執へんとす」と。四月、宗誠遁れ去る。楊方亨、計を惟敬に問ふ。惟敬曰く、「兩語有り。汝、愼んで之を記せよ。我が大明を擧げて、日本に奉承せんのみ」と。明主、遂に方亨を以て正使と爲し、惟敬を之に副とし、多く金帛を出して惟敬に資し、封冊を齎し促し往かしめ、因つて韓をして使を發せしむ。韓、和議未だ固からざるを以て、依違して從はず。獨り黃愼・朴弘長をして之に従はしめ、日を刻して發す。

是の時に當つて、明の使者三名は既に朝鮮の國境に入つたが、疑ひ懼れて強ひて進まうとはしなかつた。日本に撤兵して貰ひ度いと請うた。諸將は已むを得ず、兵を釜山に一纏めにしたが、併しまだ海を渡つて歸るといふことは承知しなかつた。李宗誠は貴族の出であつた。だから日夜國へ歸りたいとばかり思つて居た。それで惟敬は之を逐ひ返して自分が正使にならうと考へた。慶長元年正月、小西行長が日本へ歸つて和議が成立したのを報告した。其の時惟敬は私に之に従ひ來り、地圖・兵書・王侯の禮服及び燕・代地方産の名馬三百頭などを秀吉に獻上して立ち去つた。宗誠を脅して曰ふのに「和睦の事は失敗に歸しました。秀吉の兵は今にもやつて來て我れ等を捕へようとして居ます」と。四月、宗誠は逃げ歸つた。副使の楊方亨が計書を惟敬に相談した。惟敬の曰ふのに「只二言ある丈けです。君はよく氣を留めて覺えて居られよ。即ち、我が大明國を擧げて、日本の命を受けるだけのことで」と。明主は遂に方亨を以て正使となし、惟敬を副使とし、澤山金帛を出して惟敬に持つて來させ、又皇帝の詔書を持つて、急ぎ立てる様にして出發させ、因つて又韓國にも使を出すやうに言つた。韓は和議がまだ確かりしたものでないので、ためらつて従はなかつた。只黃愼と朴弘長をして従はしめることとし、やがて日を決めて出立した。

三使(李宗誠、楊方亨、沈惟敬) ○蟒服(大蛇の章ある服で、王侯の禮服)天子の服には龍を畫く)

五月、秀吉以秀頼朝見。詔叙秀頼從三位任右近衛中將。六月、明韓使者濟海。我諸將乃留兵釜山而凱旋。行長、善之。與俱。善之。清正至。

伏見秀吉不許見。乃就増田長盛請申救。長盛曰。子宜謝於治部。清正曰。吾死不能。乃歸第。命。七月、京畿大風。震地。大震。伏見城壞。壓死數百人。清正曰。吾寧犯罪。不可坐視。乃從卒二百入省。秀吉與夫人席地而坐。目清正呼其幼字曰。阿虎。若來何速。清正因前訴冤。畫地而語。陳其軍勞。秀吉顧謂夫人曰。彼肥皙丈夫。今至自朝鮮。何黧且悴也。乃命守其門。三成以下踵至。不得入。有傳命者。特納三成。清正大聲令其卒曰。使短小佞豎入。且日秀吉召見。清正推問海外戰狀。泣下曰。阿虎襁褓育於我。乃類我也。遂愛遇如故。

五月、秀吉、秀頼を以て朝見す。詔して秀頼を從三位に叙し、右近衛中將に任ず。六月、明・韓の使者海を濟へ。我が諸將乃ち兵を釜山に留めて凱旋す。行長・清正を嫉む。清正、三成に惡しく、而して行長之に善し。與俱之を諂す。清正伏見に至る。秀吉見るを許さず。乃ち増田長盛に就いて申救を請ふ。長盛曰く「子、宜しく治部に謝すべし」と。清正曰く「吾れ死すとも能はず」と。乃ち第に歸つて命を袂つ。七月、京畿大に風霾し、地大に震す。伏見城壞れ、壓死數百人あり。清正曰く「吾れ寧ろ罪を犯すとも、坐視すべからず」と。乃ち卒二百を從へ入つて秀吉を省る。秀吉、夫人と地に席して坐し、清正を目し、其の幼字を呼んで曰く「阿虎、若來ること何ぞ速なる」と。清正因つて前んで冤を訴へ、地に畫いて語り、其の軍勞を陳す。秀吉顧みて夫人

に謂つて曰く「彼れ肥背の丈夫。今朝鮮より至る。何ぞ驚く且つ悴するや」と。乃ち命じて其の門を守らしむ。三成以下踵いで至る。入るを得ず。命を傳ふる者有り、特に三成を納れよと。清正大聲其の卒に令して曰く「短小の佞豎をして入らしめよ」と。且日、秀吉清正を召見して海外の戦狀を推問し、泣下つて曰く「阿虎は襦袢より我に育はる。乃ち我に類するなり」と。遂に愛遇すること故の如し。

五月、秀吉は秀頼をつれて天皇に拜謁した。天皇のお言葉に依つて、秀頼は從三位に叙せられ、又右近衛中將に任ぜられた。六月、明と韓の使者が海を渡ることになつた。我が諸將は兵を釜山に留め置いて凱旋した。行長は清正を嫉み憎んだ。清正是三成と仲が悪く、行長は三成と仲が善かつた。行長と三成は連合して清正をそしつた。清正是伏見に來た。秀吉は對面を許さなかつた。そこで増田長盛の所へ行つて申し開きをして救けて呉れと頼んだ。長盛は「君は治部二三成に詫びたらよからう」と言つた。すると清正在曰ふのに「それは死んでも出來ない」と。屋敷に歸つて何分のお仕置を待つて居た。七月、京畿地方で大風が砂を巻き上げて暗くなり、大きな地震が起つた。伏見城は崩れ、潰されて死んだ者が數百人もあつた。すると清正在曰ふに「自分は此の際寧ろ罪を犯すとも、ぢつと見て居るわけにはゆかない」と。そこで二百人の卒を從へつれて、城に入つて秀吉を見舞つた。此の時秀吉は夫人淺野氏と共に地に席を敷いて坐つて居た。清正在見付けて、其の幼名を呼んで曰ふには「虎之助か。お前はマア早く來たではないか」と。清正在そこで進み出て無實の罪を訴へ、土の上には山川や軍勢配置の圖を描いて、在鮮當時の苦勞を述べた。秀吉は夫人を顧みて曰ふには「あれは肥つて色白の男であつた。今朝鮮から歸つて來た。何と色は黒く、やつれて居るではないか」と。そこで門の固めをさせた。三成以下の家來が、次から次とやつて來た。門が締つて居るので入れない。秀吉の言ひつけを傳へる者があつて、殊に三成を

早く入れよと言つた。清正在大聲を張り揚げて其の部下に命じて曰ふには「あのちつぽけな、悪る賢い男を入れる」と。翌日秀吉は清正を召し呼んで海外の戦況を問ひ、色々其の話を聞いて、遂に涙を流して曰ふには「虎之助は赤坊の時から乃公に育てられた。だから乃公に良く似て居るのぢや」と。遂に寵愛すること昔のまゝであつた。

語釋 靈(土ふるごと。即ち大風)

時震仍不止。徳川公夜率兵入衛。秀吉曰「不知皇宮、何如。吾當與卿省焉。」乃遽出。從者未屬。徳川公以其兵擁之而行。道路昏黑、徳川公從者有掣其袖者。公不敢顧。秀吉談笑而行。脱刀授之曰「吾老矣。覺刀之重矣。以煩卿也。」公不敢執。乃授井伊直政。已而秀吉從兵踵至。遂入朝。還過方廣寺前。見大佛倒裂。罵曰「我爲若不憚勞費。將使若濟度衆生。今己身且不能保。何負我也。」因呼弓射之。還乃修伏見城。更作牙城于木幡山。

訓讀 時に震仍止まず。徳川公、夜、兵を率ゐて入衛す。秀吉曰く「皇宮の何如を知らず。吾れ當に卿と省るべし」と。乃ち遽に出づ。從者未だ屬せず。徳川公、其の兵を以て之を擁して行く。道路昏黒、徳川公の從者、其の袖を掣く者あり。公敢て顧みず。秀吉、談笑して行く。刀を脱して之に授けて曰く「吾れ老いたり。刀の重

きを覺ゆ。以て卿を煩さん」と。公敢て執らず。乃ち井伊直政に授く。己にして秀吉の從兵踵いで至る。遂に入朝す。還るとき方廣寺の前を過ぎ、大佛の倒裂を見、罵つて曰く「我れ若の爲めに勞費を憚らず。將に若をして衆生を濟度せしめんとす。今己の身すら且つ保つ能はず。何ぞ我に負くや」と。因つて弓を呼んで之を射て還る。乃ち伏見城を修め、更に牙城を木幡山に作る。

通釋 其の時地震はまだ止まなかつた。徳川公家康は夜兵を率ゐて城に入つて守つた。秀吉が曰ふのに「皇居の方は如何あらせられるだらう。貴殿と一緒に御見舞申さねばならん」と。急に出かけることになつた。從者がまだ出揃はなかつた。徳川公は其の兵を以て秀吉を護つて行つた。途中、あたりは眞暗であつたので、徳川公の從者はそつと公の袖を引いて、合圖をする者があつた。徳川公は顧みもしなかつた。秀吉は談笑しながら進んで行つた。刀を取り外し徳川公に持たせて、曰ふには「年を取つたもんだ。刀が重くて叶はぬ。どうか御苦勞でも持つて下されよ」と。徳川公は強ひて持たうとはしなかつた。井伊直政に渡した。その内に秀吉の從兵も来た。そして遂に入朝した。歸り途に方廣寺の前を通ると、大佛が倒れて壞れてゐるのを見たので、罵つて曰ふには「自分はお前のために、これまで随分人夫の勞力や色々の費用を惜しまなかつた。それはお前に諸々の生あるものを、救つてもらはうとしたのであつたからである。今自分の身一つすら保つことが出来てゐない。何と我が望みに背くものではないか」と。そこで弓を取り寄せ、之を射つて歸つた。それから伏見城を修理し、更らに本丸を木幡山に作つた。

語釋 擊其袖(秀吉を殺させようと思つける爲め)に家康の袖を引張つたのである。

八月、明・韓使者共至界浦。二十九日、造伏見。秀吉使柳川調信責韓使者曰「吾收兵、而汝國未獻三道。今又不使王子來謝再造之恩。乃遣微者辱我。我不許汝入見。二使因行長謝弗聽。九月二日、使毛利氏列兵仗延明使者入城。諸將帥皆坐。頃之、秀吉開幄而出。侍衛呼叱。二使懼伏、莫敢仰視。捧金印、冕服、膝行而進行長助之畢禮。

訓讀 八月、明・韓の使者、共に界浦に至り、二十九日、伏見に造る。秀吉、柳川調信をして、韓の使者を責めしめて曰く「吾れ兵を收むれども、汝の國未だ三道を獻せず。今又、王子をして來つて再造の恩を謝せしめず。乃ち微者を遣はし我を辱かしむ。我れ汝の入見するを許さず」と。二使、行長に因つて謝す。聽かず。九月二日、毛利氏をして兵仗を列ね、明の使者を延いて城に入らしむ。諸將帥、皆坐す。頃くして、秀吉、幄を開いて出づ。侍衛、叱と呼ぶ。二使、懼伏し、敢て仰ぎ視る莫し。金印・冕服を捧げ、膝行して進む。行長、之を助けて禮を畢る。

通釋 八月、明と韓との使者が連れ立つて界浦に到着し、二十九日、伏見にやつて來た。秀吉は柳川調信をして韓の使者を責めさせて曰ふには「此方は兵を纏めて還つたのに、お前の國ではまだ約束の三道を獻上してよこさぬ。それに今又、王子をして來つて國家再建の恩を謝せしむることをさせない。それどころか、つまらない者

を使ひに寄越して我を侮辱した仕打ちである。余はお前方の入つて来て余に對面するを許さないぞ」と。二人の使者は小西行長に頼んで陳謝した。秀吉は承知しなかつた。九月二日、毛利氏をして武器を持つた兵士を列らべて警固せしめ、明の使者を延き入れて城中へ導いた。諸將帥が皆坐つてゐる。暫らくすると秀吉が幄を開けて出て来た。お附きの護衛が「シツ／＼」と制止の掛聲をした。二人の使者は慍え伏し、敢て仰き視ることが出来ないう有様であつた。二人は黄金の印と冠と裝束とを捧げ持つて、膝でにちり乍ら進んで行つた。行長は彼等を助けてこの延見の禮を濟ませた。

○二使(前の二使は韓の二人の使者。後水尾天皇の年號) ○使者(明使は正使楊方亨、副使沈惟敬、韓使は黃慎、朴弘長) ○三道(慶尙・全羅) ○再造(再生、再建の意、一度取つたものを返して元々通りにしてやつたから)

三日、饗使者既罷。秀吉戴冕被袞衣、使德川公以下七人各被其章服、召僧承兌讀冊書。行長私囑之曰、「冊文與惟敬所說、或有齟齬者、子且諱之。承兌不敢聽。乃入讀冊于秀吉之傍。至曰、「封爾爲日本國王、秀吉變色立脫冕服、拋之地、取冊書扯裂之、罵曰、「吾掌握日本。欲王。則王。何待髯虜之封哉。且吾而爲王、如天朝何。乃召行長、誚讓曰、「汝敢欺罔我、以爲我邦之辱。吾將併汝與明使者、皆誅殺之。行長股栗、謾罪於三奉行、出書讀數通爲證。承兌亦救解之、事纔得止而秀吉怒未釋。

三日、使者を饗し、既にして罷む。秀吉、冕を戴き、袞衣を被り、徳川公以下七人をして、各々其の章服を被らしめ、僧承兌を召し、冊書を讀ましむ。行長、私に之に囑して曰く「冊文、惟敬の説く所と、或は齟齬せるもの有らん。子、且く之を諱め」と。承兌敢て聽かず。乃ち入り、冊を秀吉の傍に讀む。爾を封じて日本國王と爲すと曰ふに至つて、秀吉、色を變じ立ちどころに冕服を脱し之を地に抛ち、冊書を取つて之を扯裂し、罵つて曰く「吾れ日本を掌握す。王たらんと欲せば則ち王たり。何ぞ髯虜の封を待たんや。且つ吾にして王と爲らば、天朝を如何せん」と。乃ち行長を召し、誚讓して曰く「汝敢て我を欺罔し、以て我が邦の辱を爲す。吾れ將に汝と明の使者とを併せて、皆之を誅殺せんとす」と。行長、股栗し、罪を三奉行に謾し、書牘數通を出して證と爲す。承兌も亦、之を救解し、事纔に止むを得たり。而して秀吉の怒未だ釋けず。

翌三日に、明の使者を饗應し、それも終つた。秀吉は明から貰つた冠を戴き、長い衣を身につけて徳川公家康以下七人の人々をして各々禮服を衣させ僧の承兌を召して明から持つて来た封冊の書面を讀ました。行長がこつそり承兌に依頼して曰ふのに「封冊の文が沈惟敬の曰ふ所と或は食ひ違つた所があるかも知れぬ。そこは貴公一つ飛ばせて讀まないやうにして戴きたい」と。承兌が左様なことは眞平御免と承け入れなかつた。そこで座に入り、封冊の文を秀吉の傍で讀んだ。文中の「お前を封じて日本國王にして遣はず」といふ所へ來ると、秀吉の形相、見る／＼變り、其の場で冠も裝束も脱ぎ棄て、それを地に擲げつけ、其の封冊の文書を取り上げてズタ／＼に引き裂き、罵つて曰ふのに「余は今日本を手中に收めてゐる。王にならうと思へば今でも王になれるのだ。何んで毛唐等から封ぜられるのを待たうや。それに余が王となつたら、日本の天子様を何うしよう」と曰ふのだ。馬鹿めが」と。そこで行長を招び、そしり責めて曰ふのに「其の方は余を欺し失せて、我が日本

に恥辱を興へ居つた。余は其の方と明の使者とを一緒にして皆誅殺して終ふつもりだ」と。行長は慄へ上つて、この罪を三人の奉行になすりつけ、手紙を數通出して其の證據とした。承兌も亦之を助けて辯解してやつたので、誅殺の事はやつと止められることとなつた。併し秀吉の怒はそんな事では中々解けなかつた。

語釋 裋衣(一説に裋は排の訛ならんと。)○七人(家康・秀俊・利家・秀家)○章服(其位に應じ)○册書(爵位封祿を興へ)○扯裂(扯、裂く義。音シ)○髯虜(明人を罵つて)○諉(すりつけ)

即夜、命加藤清正・大谷吉隆・石田三成・増田長盛・逐明韓使者、賜資糧遣歸使謂之曰、「若亟去、告而君。我將再遣兵屠而國也。」遂下令西南四道、發兵十四萬人、以明年二月、悉會故行臺柳川調信私囑黃慎曰、「太閤意已決矣。速獻三道使王子來謝。不則貴國復被禍矣。惟敬猶疑其虛喝。已而見沿道治兵狀、則大驚奔去。」

訓讀 即夜、加藤清正、大谷吉隆、石田三成、増田長盛に命じて、明韓の使者を逐ひ、資糧を賜ひて遣歸せしめ、之に謂はしめて曰く「若亟に去り、而の君に告げよ。我れ將に再び兵を遣はし、而の國を屠らんとす」と。遂に令を西南四道に下し、兵十四萬人を發し、明年二月を以て、悉く故の行臺に會せしむ。柳川調信、私に黃慎に囑して曰く「太閤の意に已に決せり。速に三道を獻じ、王子をして來り謝せしめよ。不らずんば則ち貴國復被らんとす」と。惟敬、猶ほ其の虛喝を疑ふ。已にして沿道の兵を治むる狀を見て、則ち大に驚き奔り去る。

を興へ、本國へ歸らせした。そして使者に言はしめて曰ふのに「お前等は早く歸つて、お前等の君に告げよ。余は再び汝等の國を攻め屠らうとしてある」と。遂に命令を西南四道に下し、兵十四萬人を繰り出し、來年二月迄に悉く前の那古耶の行營に集まらせた。柳川調信が私に黃慎に言ひ含めて曰ふのに「太閤の心は早や決まつて終つた。早く三道を獻上し、王子をして謝りに來させよ。さもないと、また君の國は禍を受けねばならぬ」と。惟敬はやはりまだ空らおどしたと疑つてゐた。其の内に途筋で出兵準備をしてゐる様を見て、大に驚き奔り去つた。

秀吉初養夫人姪秀秋爲子、出嗣小早川氏。於是、以爲大將、以浮田秀家・毛利秀元副之、以黑田孝高充其參謀、以清正行長充其先鋒、使行長立功、自償諸將皆前役所遣、已諳海外事宜、以故秀吉不復親出、自居伏見、遙授方略、置吏于那古耶、以司諸道糧運。

訓讀 秀吉初め夫人の姪秀秋を養つて子と爲し、出して小早川氏を嗣がしむ。是に於て以て大將と爲し、浮田秀家・毛利秀元を以て之に副とし、黒田孝高を以て其の參謀に充て、清正・行長を以て其の先鋒に充て、行長をして功を立て、自ら償はしむ。諸將は皆前役に遣はす所、已に海外の事宜を諳んず。故を以て秀吉復親ら出でず、自ら伏見に居り、遙に方略を授け、吏を那古耶に置き、以て諸道の糧運を司らしむ。

通釋

秀吉は初め夫人淺野氏の姪の秀秋を養つて、自分の後嗣息子としたが、後に小早川氏を嗣がせることに

した。そこで此の秀秋を以て大將とし、浮田秀家・毛利秀元を副將と、黒田孝高を參謀に充て、清正・行長を先鋒と定めて、行長をして功を立て、自ら今回の罪を償はせることにした。これ等の諸將は皆前の戦に出陣して居るので、もう海外の事状は既に諸記して居た。それ故秀吉は自分が出かけることはやめて、伏見の城中に留つて遠くから指圖をすることとし、役人を那古耶に置いて、諸國の兵糧の運搬を司らしめた。

二年正月、明使者至、明伴報秀吉受封拜舞和議全成。因私貫海外珍寶、號爲日本幣物。已而吳越將吏上變告曰、秀吉先鋒加藤清正已擁二百艘上機張矣。明主因詰方亨得實、乃誚惟敬。惟敬漸謝、因曰、秀吉責韓而已矣。不久將去、明不信。乃戒東北守備、復大募兵、遣邢玠、楊鎬、麻貴、楊元、劉繼董一元等、率而東下。諸將皆以智勇聞其國者也。

訓讀 二年正月、明の使者明に至り、伴り報す。「秀吉封を受けて拜舞し、和議全く成る」と。因つて私に海外の珍寶を賈し號して日本の幣物と爲す。已にして吳越の將吏變を上り、告げて曰く「秀吉の先鋒加藤清正、已に二百艘を擁して機張に上る」と。明主因つて方亨を詰り、實を得、乃ち惟敬を詰む。惟敬漸謝し、因つて曰く「秀吉韓を責むるのみ。久しからずして將に去らんとす」と。明信ぜず。乃ち東北の守備を戒め、復大に兵を募り、邢玠・楊鎬・麻貴・楊元・劉繼董一元等を遣はし、率ゐて東下せしむ。諸將皆智勇を以て其の國に聞ゆる者なり。

通釋 二年の正月、明の使者は明に歸り着き、嘘を報告した。秀吉は封を受けて小躍して喜び拜し、和議の相談は全部纏りました」と。そこで秘に海外の珍らしい品物を買ひ集めて、日本から寄越した贈物だと稱した。それから間もなく吳越の將吏が變事を傳へて告げていふには「秀吉の先鋒加藤清正は既に二百艘の軍艦をつれて機張に上陸しました」と。明王は方亨を責めて本統のことを知つた。そこで惟敬を問ひ詰めた。惟敬は恥ぢ入つて詫び、そこで曰ふには「秀吉は韓國を責めるだけです。間もなく、引き上げることでせう」と。併し明ではその言を信用しなかつた。そこで東北の守備を固め、再び大に兵を募り、邢玠・楊鎬・麻貴・楊元・劉繼董一元等の將士を派して、其の兵を率ゐて東に向はせた。此等の諸將は智勇を以て明國中で名高い人々であつた。

語釋 貫(買ひ取る)

我兩先鋒已濟海、并其戍兵、行長軍釜山。清正自機張攻梁山、陷之。軍于西生浦。韓人懲創前役、逃竄駭散。清正榜諭之曰、太閤命吏責問朝鮮王、屯兵東邊、以俟其報。汝民各安其居、勿敢擾亂。二月、孝高奉秀秋至釜山、因山海之勢、列壘寨、聯舟艦、以爲根據之地。出令禁暴掠、而諸道望風潰奔。時韓地荒廢、無糧可因。我海運亦未達。諸將以故不輒進。聲言朝鮮獻三道如約、乃止不復深入。

訓讀 我が兩先鋒已に海を濟り、其の戍兵を并せ、行長は釜山に軍す。清正是機張より梁山を攻めて之を陷

れ、西生浦に軍す。韓人、前役に懲創し、逃竄駭散す。清正榜し之を諭し曰く「太閤、吏に命じて、朝鮮王を責問し、兵を東邊に屯し以て其の報を俟つ。汝民、各々其の居に安んじ、敢て擾亂すること勿れ」と。二月、孝高、秀秋を奉じて釜山に至り、山海の勢に因り、壘寨を列ね、舟艦を聯ね、以て根據の地と爲し、令を出して暴掠を禁す。而して諸道、風を望んで潰奔す。時に韓の地荒廢し、糧の因る可き無し。我が海運も亦未だ達せず。諸將、故を以て輒に進まず。朝鮮、三道を獻する、約の如くせば、乃ち止りて復深く入らずと聲言す。

通釋 我が兩先鋒は、既に海を渡つて、朝鮮に踏み入り、其處に留つて守つて居た所の兵を合併して、行長は釜山に陣取つた。清正は機張から梁山へ進んで、之を陥れ、そして西生浦に陣取つた。朝鮮人は前の戰にこり／＼して居るので、逃げかくれたものもあるし、驚いて何處かへ行つて終ふものもあつた。そこで清正は立札をして諭すには「太閤は役人に命じて朝鮮王に責め問はせらるゝことあつて、それで兵を東部に駐め其の返事を待つて居るのだ。故に汝等人民はいづれも自分の處に安心して止まつて居れ。決して騒ぎ立てたりするな」と。二月、孝高は秀秋を奉じて釜山に着き、山や海の形勢を見計らつて、とりでを連ね、舟をならべ、そこを根據地と定め命令を出して亂暴をしたり、掠奪をやつたりするのを禁じた。すると諸道は、却つて此の様子に畏れて、崩れ潰え逃げうせた。當時、朝鮮では土地が荒れ果て、食糧を得ることが出来なかつた。又味方の海上からの運搬物もまだ到着しなかつた。それで諸將は容易に進むことをしなかつた。そして朝鮮が約束通り三道を獻上するならば、兵を止めて、もう深入りはしないと云ひ觸らした。

韓王使李元翼守鳥嶺、而自奔海州、告急於明。明君臣歸罪於石星、奪其官、且議曰

「割地之議、出於惟敬之託言、忠清韓之府藏、全羅慶尙韓之門戶、皆其重地、而明之海路亦恃爲藩屏焉。今予之秀吉、秀吉以爲取韓犯明之資、彼之舟帆、晨發夕至、天津登萊、非明之有也。因宥惟敬使往、更爲說以弭和兵。清正行長使人返告韓、不獻地。秀吉報曰「當埃韓穀熟、進入全羅、以攻諸城、必攻破而後已。」且戒行長等曰「前使我不得志者、全羅水軍也。此行必報之。」

訓讀 韓王、李元翼をして鳥嶺を守らしめ而して自ら海州に奔り、急を明に告ぐ。明の君臣、罪を石星に歸し其の官を奪ひ、且つ議して曰く「地を割くの議、惟敬の託言より出づ。忠清は韓の府藏、全羅慶尙は韓の門戸なり。皆其の重地にして、明の海路も亦、恃んで藩屏と爲す。今之を秀吉に予へば、秀吉以て韓を取り明を犯すの資と爲さん。彼の舟帆、晨に發し夕に至り、天津登萊は、明の有に非ざるなり」と。因つて惟敬を宥し、往いて更に爲めに説いて和兵を弭めしむ。清正行長、人をして返つて韓の地を獻せざるを告げしむ。秀吉報じて曰く「當に韓の穀の熟するを俟ち、進んで全羅に入り以て諸城を攻むべし。必ず攻め破つて後に已めん」と。且つ行長等を戒めて曰く「前に我をして志を得ざらしめしは、全羅の水軍なり。此の行必ず之に報ぜよ」と。

宜から出た話である。忠清道は朝鮮の財物の集まる處、全羅・慶尙の二道は朝鮮の入口である。共に朝鮮としては重要な土地であり、明の海路も亦此等の土地を離れずとも恃んである大事な處である。今之を秀吉に與へたならば、秀吉は朝鮮を取つたり、明を攻めたりする根據とするだらう。彼の船が朝に朝鮮を出たら、夕方には明に着く。さうするともう天津や登萊などは、明國の所有ではなくなつて終ふ」と。そこで仕方がないので惟敬を許し、更に日本軍へ遣つて、色々辯解して軍隊を引上げる様に言はせた。清正と行長は人を秀吉の處へやつて、朝鮮が土地を獻上しないことを報告させた。秀吉は通知を出して曰ふには「朝鮮の穀物が熟するのを待つて、それから全羅に進み、段々諸城を攻めるやうにいたせ。きつと攻め落して終へ」と。そして行長等を戒めて曰ふには「前の戰で思ふ様にならなかつたのは、全羅の水軍のためであつた。今度は是非之に仕返しをせよ」と。

○天津(支那の地名) ○登萊(山東省)

惟敬在南原、明主數責其效。韓人亦指目之曰「是左右賣國、反覆之臣也。罔明欺和而使韓受其弊。惟敬大窘。又聞石星已下獄、則恐因度以爲行長主和、清正主戰。不若先退清正、因遺書清正曰「三國媾和、將歸無爲、而足下勸太閤敗之。明主命邢總督以精銳七十萬將首擊足下。足下速請和弭兵。不然禍不旋踵。」清正答書曰「吾每病朝鮮兵羸弱不足與較。今當明軍一快戰、吾所願已。惟敬得書不知所爲。乃因

行長欲投歸於我。行長許之。邢玠在遼東聞之曰「彼入日本、必爲我腹心害者。」乃令楊元伏三千人、要其走路、捕之。尋被誅。而我與明遂絕。

惟敬南原に在り、明主數其の效を責む。韓人も亦之を指目して曰く「是れ左右、國を賣る反覆の臣なり。明を罔ひ和を欺き而して韓をして其の弊を受けしむ」と。惟敬大に窘む。又石星已に獄に下ると聞き則ち恐れ、因つて度つて以爲へらく「行長は和を主とし、清正は戰を主とす。先づ清正を退くるに若かず」と。因つて書を清正に遣つて曰く、「三國媾和し、將に無爲に歸せんとす。而るに足下大閤に勸めて之を敗る。明主、邢總督に命じ、精銳七十萬を以て、將に首として足下を撃たしめんとす。足下速に和を請ひ兵を弭めよ。然らずんば、禍、踵を旋さす」と。清正答書して曰く「吾れ毎に朝鮮の兵は羸弱にして、與に較ぶるに足らざるを病ふ。今、明軍に當り一快戰を作すは、吾が願ふ所のみ」と。惟敬、書を得て爲す所を知らず。乃ち行長に因つて我に投歸せんと欲す。行長之を許す。邢玠、遼東に在り。之を聞いて曰く「彼れ日本に入らば、必ず我が腹心の害を爲す者なり」と。乃ち楊元をして、三千人を伏せ、其の走路を要して之を捕へしむ。尋いで誅せらる。而して我れ明と遂に絶つ。

惟敬は南原に居た。明主は幾度も早く良い結果を得たいと催促して來た。韓人も亦惟敬を指し見て曰ふには「此の男はどちらにも巧いことを言つて、國を賣る、全く節操のない家來だ。一方では明に嘘をつき、一方では日本を欺して、そして朝鮮にそのとばしりを與へるのだ」と。惟敬は非常に苦しい立場に陥つた。又石星が既に獄に下されたと聞いて恐れを抱き、そこで計つて思ふには「行長は和睦を主とし、清正は戰を主

として居る。故に先づ清正をのけて終ふのが良い方法だ」と。因つて手紙を清正にやつて曰ふには「三國は和睦の相談が出来て、間もなく平和にならうとした。所が、貴殿は太閤に勤めて折角の和睦を破つた。それで明主は刑總督に命じて、強い七十萬の兵を率ゐ、第一に貴公を撃たしめようとして居る。貴公は早く和睦を願つて戦をやめなさい。若しさうでないに禍は立ちどころに來るでせう」と。清正は返事をやつて曰ふには「自分はいつも朝鮮の兵が弱すぎて、くらべものにならないのを残念に思つて居る。今、明の軍隊に當つて痛快に戦ふのは、自分の願ふ所だ」と。惟敬は此の手紙を受けて、どうしたらいいかわからなくなつた。そこで行長に頼んで日本に逃げ込まふと考へた。行長は此のことを許した。邢珍は遼東に居た。此の話を聞いて曰ふには「彼が日本に行つたなら、きつとこちらの病根をなす者である」と。そこで楊元に三千人の部下をつけて、これをひそませ、逃げ路に待ち受けて捕へさせた。ついで殺して終つた。かくて日本は明國と全く交通を絶つことゝなつた。

南原(全羅道)

明軍已至全羅。楊元在南原。陳愚衷在全州。韓將元鈞在閑山。唐島水陸相援。以守全羅。七月、我水軍諸將議攻唐島。藤堂高虎協坂安治、先發。韓以數百艘逆擊。高虎安治親揮槍力戰。加藤嘉明後至。遇敵一大艦。艦上列卒、張弓持滿。擬之。嘉明拔刀躍入其艦。敵不敢發。嘉明立斬數人。遂奪其艦。諸將因奮擊。大破之。元鈞收兵守

閑山。而明將楊鎬、麻貴等繼至。韓令鈞進擣釜山。初鈞與李舜臣並將水軍。行長間使人告韓曰。清正首敗。媾吾深嫉之。今孤軍先濟。宜襲執之。韓王乃命鈞舜臣舜臣不肯。鈞劾其逗留。王召舜臣下之獄。鈞於是獨將。及受此命。不得不自進。乃合水路諸軍。赴釜山。

訓讀 明軍已全羅に至る。楊元は南原に在り。陳愚衷は全州に在り。韓將元鈞は閑山、唐島に在り。水陸相援け以て全羅を守る。七月、我が水軍の諸將、議して唐島を攻む。藤堂高虎、脇坂安治、先づ發す。韓、數百艘を以て逆へ撃つ。高虎、安治、親ら槍を揮つて力戰す。加藤嘉明後れ至り、敵の一大艦に遇ふ。艦上に卒を列ね、弓を張り滿を持して之に擬す。嘉明、刀を抜き躍つて其の艦に入る。敵敢て發せず。嘉明立ちどころに數人を斬り、遂に其の艦を奪ふ。諸將因つて奮撃し、大に之を破る。元鈞兵を收めて閑山を守る。而して明將楊鎬、麻貴等、繼いで至る。韓、鈞をして進んで釜山を擣かしむ。初め鈞、李舜臣と、並に水軍に將たり。行長、間に人をして韓に告げしめて曰く「清正、首として媾を敗る。吾れ深く之を嫉む。今、孤軍先づ濟る。宜しく襲つて之を執るべし」と。韓王、乃ち鈞、舜臣に命ず。舜臣肯せず。鈞、其の逗留を劾す。王、舜臣を召し、之を獄に下す。鈞、是に於て、獨り將たり。此の命を受くるに及んで、自ら進まざるを得ず。乃ち水路の諸軍を合せて釜山に赴く。通釋 明の軍隊は既に全羅に着いた。楊元は南原にゐた。陳愚衷は全州に居た。朝鮮の大將元鈞は閑山、唐島に居つた。海軍と陸軍とお互ひに援け合ひ全羅を守つた。七月、日本の海軍の諸大將は、相談して、唐島を攻めた。藤

堂高虎・脇坂安治が先づ出發した。朝鮮では數百艘の水軍を以て迎へ撃つた。高虎や安治は自身で槍を揮ひ、力を盡して戦つた。加藤嘉明は後から來たが、敵の大戦艦に出會つた。其の船の上には兵卒を並べ、弓をいつばいにひき絞つて、こちらを狙つて居た。嘉明は刀を抜いて、其の船に躍り込んだ。敵は弓を射たうともしなかつた。嘉明は忽ち數人を斬り倒し、遂に其の船を占領した。諸將も此によつて奮ひ戦ひ、散々に打ち破つた。元鈞は兵をまとめ閑山を守つた。明の大將楊錦や麻貴等が後から繼いで到着した。韓では元鈞をして、進んで釜山を突かせた。初め元鈞は李舜臣と一緒に水軍の大將であつた。行長は秘に人をやつて韓に告げしめて曰ふには「清正は首として媾和を破つたのである。自分は深く之を憎んで居る。然るに今孤立の軍を以て第一番に朝鮮に渡つた。之を攻めて生捕つたらよからう」と。そこで韓王は清正を伐つことを鈞と舜臣とに命令した。舜臣は之を聞き入れなかつた。鈞は舜臣が王命があり乍ら留まつて進まぬことを王にあばいた。王は舜臣を呼んで牢屋に入れた。それで鈞が一人で大將となることゝなつた。だから今此の釜山攻撃の命令を受けるに至つては、鈞は自ら進まぬわけにはいかなくなつた。そこで水陸の諸軍を合せて釜山に向つた。

【語釋】全州(全羅道)

行長聞之八月、伏兵于加德、以舟兵逆撃于絶影島。會日暮風濤大起。我軍佯退。鈞縱兵冒濤而進。比至加德、飢渴下舟取飲。伏兵起、行長返之、夾撃大敗鈞軍。鈞逃至巨濟。行長復夜襲之、遂斬鈞。乘勝西向、連陷南海、順天、自豆恥津上陸。而清正、兵自西生浦、歷慶州入全羅。諸城望其旗、曰「鬼上官至矣」。不戰而潰。清正進與行長合攻、黄石城陷之。守將郭趁、趙宗道等皆死。

【訓讀】行長、之を聞き、八月、兵を加德に伏せ、舟兵を以て絶影島に逆へ撃つ。會日暮れ風濤大に起る。我が軍伴り退く。鈞、兵を縱ち濤を冒して進む。加德に至る比、飢渴し、舟を下つて飲を取る。伏兵起り、行長、之に返し、夾撃して大に鈞の軍を敗る。鈞逃れて巨濟に至る。行長、復夜之を襲ひ、遂に鈞を斬り、勝に乗じて西に向ひ、連に南海・順天を陥れ、豆恥津より陸に上る。而して清正の兵は西生浦より慶州を歴て全羅に入る。諸城、其の旗を望んで曰く「鬼上官至る」と。戦はずして潰ゆ。清正進んで行長と合し、黄石城を攻めて之を陥る。守將郭趁・趙宗道等皆死す。

【通釋】行長は之を聞いて、八月、兵を加德島にかくして置き、別に小舟に乗せた兵で、絶影島まで出て行つて攻撃した。偶々日は暮れ、風と波が非常に高くなつた。我が軍は伴つて退却した。鈞は兵を繰り出し、波を乗り越えて進んで來た。加德島邊まで來て、腹が減つたり、咽喉が乾いたりしたので舟を下つて飲み食ひして居た。伏兵が急に起り、行長も引き返して夾み撃ちして、大いに鈞の軍を破つた。鈞は逃げて巨濟洋に行つた。行長は再び夜になつて之を襲ひ、遂に鈞を斬り殺し、勝つた勢に乗じて、續けざまに南海や順天を陥れ、豆恥津から上陸した。そして清正の兵は西生浦から、慶州を通つて全羅に入つた。諸城の敵兵は其の軍旗を見て曰ふには「鬼上官が來た」と、戦はないで崩れた。清正は進んで行長と一緒になり、黄石城を攻めて之を陥れた。城の

守將郭越や趙宗道等は此の時皆討死した。

語釋 加德(巨濟島の東北角) ○絶影島(釜山の南海慶尙道) ○豆恥津(全羅道) ○慶州(慶尙道) ○黄石城(全羅道)

我軍乃二道竝進。清正從雲峯、浮田秀家繼之。行長從密陽、毛利秀元繼之。兵各五萬。會於南原。韓元帥權慄軍雲峯。望清正軍、棄守而逃。我諸將使島津義弘、加藤嘉明、絶全州援路。而合軍入南原。投書楊元。約戰期。元高壘深塹。悉衆捍禦。諸將疾攻。兩晝夜。已而退兵。窺城。兵倦且息。則復進。伏卒一面。而三面填塹。踏藉而登。元在帳中。裸跣走。其所率遼東突騎數千。爭門馳出。伏兵要之。奮刀斫馬足。適月明明。明騎莫得脫者。韓將李福男等皆死。我軍進向全州。州民素苦陳愚衷徵求。及聞南原陷。皆遁走。明兵阻之。多爲韓人所傷。愚衷遂棄城走。會麻貴遣牛伯英等援南原。不及。與愚衷合兵。軍于公州。我諸將因糧於全州。終議入國都。

訓讀 我が軍乃ち二道竝に進む。清正は雲峯よりし、浮田秀家之に繼ぎ、行長は密陽よりし、毛利秀元之に繼ぐ。兵各五萬、南原に會す。韓の元帥權慄、雲峯に軍す。清正の軍を望み、守を棄て、逃る。我が諸將、島津義弘、加藤嘉明をして、全州の援路を絶たしめ、而して軍を合せて南原に入り、書を楊元に投じて戰期を約す。元、壘を

高くし塹を深くし、衆を悉して捍禦す。諸將疾く攻むること兩晝夜。已にして兵を退く。城兵の倦み且息ぶを窺ひ、則ち復進み、卒を一面に伏せて、三面は塹を填め、踏藉して登る。元、帳中に在り。裸跣して走る。其の率ある所の遼東の突騎數千、門を争つて馳せ出づ。伏兵之を要し、刀を奮ひ馬足を斫る。適く月明なり。明騎脱するを得る者莫し。韓將李福男等皆死す。我が軍進んで全州に向ふ。州民素より陳愚衷の徵求に苦しむ。南原陥ると聞くに及び、皆遁れ走る。明兵之を阻み、多く韓人の傷つくる所と爲る。愚衷遂に城を棄て、走る。會麻貴、牛伯英等を遣はし南原を援く。及ばず。愚衷と兵を合せ公州に軍す。我が諸將、糧に全州に因り、終に國都に入るを議す。

通釋 そこで我が軍は二道から竝んで進んだ。清正は雲峯から進み、浮田秀家が其の後につき行長は密陽から進んで毛利秀元がその後につづいた。兵力は各五萬であつた。南原で落ち合ふことにした。韓の元帥權慄は雲峯に陣取つて居た。清正の軍勢を遠くから見守を棄てて逃げ走つた。我が諸將は島津義弘と加藤嘉明をして全州の援兵の來る路を絶たせ、そして軍勢を合せて南原に入り、手紙を楊元の所にやつて、戰の日取を約束した。楊元は城壘を高くし、堀を深め、そして有り丈の兵で防いだ。日本の諸將は手きびしく攻めること二日二晩、それから間もなく一旦兵を退いた。城中の兵が疲れて休んで居るのを見て、再び進み、兵卒を一面にかし、そして三面は堀を埋め、踏み越えて城壁に登つた。元は其の時帳の中に居た。驚きあわてて、裸素足で逃げ出した。元が率ゐて居た遼東の騎兵隊數千人も、出口を争つてかけて出た。伏兵が之を待ち伏せして、刀を奮つて馬の足を斷ち切つた。丁度其の時は月が照つて居た。明の騎兵に逃れることの出來た者は無かつた。又韓の將李福男等は皆討死した。我が軍は進んで全州に向つた。全州の民は、元來陳愚衷が兵を募つたり、食糧を求めたりす

ること依つて、随分苦しんで居た。南原が既に陥つたと聞いて、皆逃げ走つて終つた。明兵は其の逃げるのを邪魔して、韓人の爲めに却つて多くの者を傷つけられた。愚衷はとう／＼城を棄てて逃げた。丁度其の時麻貴が牛伯英等を遣はして、南原を援けさせた。併しもう間に合はなかつた。だから愚衷と其の兵を合せて公州に陣取つた。我が諸將は食糧を全州から得ることにして、遂に國都に入るといふ相談を進めた。

【語釋】 雲峯(全羅道) ○密陽(慶尙道) ○公州(忠清道)

韓王聞水陸軍皆敗、謂鳥嶺之守無益也、使李元翼引兵徑出忠清、以沮我軍鋒。復起李舜臣、統三道水軍。舜臣至錦島、與我將菅正陰、遇于碧波亭下。以大礮乘潮來攻。正陰敗死。舜臣因與明水軍將陳璘、軍古今島。以扼我水軍。而我陸軍一隊、以秀元爲將、黑田長政爲先鋒、進迫國都。九月、軍于全義館、擊明將解生子稷山。明將楊登山、牛伯英、來衝我陣。長政將後藤基次、栗山利安、揮槍拒之。殺傷相當。登山、伯英退與生合、濟川斷橋。我兵絕流而渡、擊走之。明軍復大至。長政將母里友信、原種良等力戰。秀元亦至、擊卻明軍。

【語釋】 韓王(水陸)の軍皆敗ると聞き、鳥嶺の守益なしと謂ふや、李元翼をして兵を引き徑に忠清に出で、以て我が

軍鋒を沮ましめ、復李舜臣を起して二道の水軍を統べしむ。舜臣、錦島に至り、我が將菅正陰と碧波亭の下に遇ふ。大礮を以て潮に乗じ來り攻む。正陰敗死す。舜臣因つて明の水軍の將陳璘と、古今島に軍し、以て我が水軍を扼す。而して我が陸軍の一隊は、秀元を以て將と爲し、黒田長政を先鋒と爲し、進んで國都に迫る。九月、全義館に軍し、明將解生子稷山に撃つ。明將楊登山・牛伯英、來つて我が陣を衝く。長政の將後藤基次・栗山利安、槍を揮つて之を拒ぐ。殺傷相當る。登山・伯英退いて生と合し、川を濟り橋を斷つ。我が兵流を絶ちて渡り、撃つて之を走らす。明軍復大に至る。長政の將母里友信・原種良等力戦す。秀元も亦至り、撃つて明軍を卻く。

韓王は、水陸の軍が皆敗れたと聞いて、それでは最早鳥嶺の守も無効だと思つたので、李元翼に兵をつけて眞直に忠清道に出て、我が軍の先鋒を遮らせ、李舜臣を再び任用して、三道の水軍を總べ括らせた。舜臣は錦島に来て、我が將の菅正陰と碧波亭の下で出會つた。大礮を放ちながら、潮時の流に乗つて攻めて來た。正陰は敗れて討死した。そこで舜臣は明の水軍の將陳璘と共に、古今島に陣を構へて、我が海軍を防ぎ止めた。そして我が陸軍の一隊は秀元を大將に戴き、黒田長政を先鋒として國都に向つて迫つた。九月、全義館に陣取り、明將の解生子稷山といふ所で攻めた。明の將楊登山や牛伯英が、やつて來て我が陣を突いた。すると長政の部下の將後藤基次・栗山利安は槍を揮つて、之を防いだ。彼等の殺傷相同じく、互角であつた。登山・伯英は退いて解生の軍と合し、川を渡つて、其の橋を落した。我が兵は流を横切つて渡り、撃つて敵を走らせた。その内に明軍が再び大擧して來た。長政の將、母里友信や原種良等が力を盡して戦つた。秀元も亦到着して、明軍を撃つて退却せしめた。

【語釋】 錦島(珍島ならんとす) ○碧波亭(珍島の東岸) ○古今島(全羅道の南岸) ○全義館・稷山(忠清道)

於是明軍在國都者不敢出我軍亦持重不進。天漸寒。十月、清正退守蔚山、行長退守順天。諸將連營與釜山相爲聲援。明乃遣李如梅來取谷城、遂攻毛利秀包于星州。不能取。秀包亦以兵少退守求禮。十一月、邢玠入韓、聚議都城、以爲和兵持重、若待秀吉親濟者、其志不在小。宜及今擊之。會明諸道募兵皆至。乃分爲三、李如梅將左軍、高策將中軍、李芳春解生將右軍。明三十三將與韓七將分屬三軍、以楊鎬、麻貴統之。糧餉火器皆極豐備。期以十二月進攻焉。我諸將聞之、益修城壘。清正巡視西生諸寨、而留裨將加藤清兵衛與毛利氏援卒俱修蔚山。

訓讀 是に於て明軍の國都に在るもの、敢て出でず。我が軍も亦持重して進まず。天漸く寒し。十月、清正退いて蔚山を守り、行長退いて順天を守る。諸將營を連ねて、釜山と聲援を相爲す。明乃ち李如梅を遣はし、來つて谷城を取り、遂に毛利秀包を星州に攻む。取ること能はず。秀包も亦兵少なきを以て、退いて求禮を守る。十一月、邢玠韓に入り、都城に聚議し、以爲へらく、和兵持重して、秀吉の親ら濟るを待つもの、若し。其の志小に在らず。宜しく今に及んで之を撃つべしと。會々明の諸道の募兵皆至る。乃ち分つて三と爲し、李如梅を左軍に將とし、高策を中軍に將とし、李芳春、解生を右軍に將とし、明の三十三將と、韓の七將とを三軍に分屬し、楊鎬、麻貴を以て之を統べしむ。糧餉火器皆豐備を極め、十二月を以て進み攻めんと期す。我が諸將之を聞き、益々

城壘を修む。清正西生の諸寨を巡視し、而して裨將加藤清兵衛を留め、毛利氏の援卒と俱に蔚山を修めしむ。
通釋 此の頃氣候は段々と寒くなつた。十月、清正は蔚山に後退して守り、行長は順天に退いて守つた。そして諸將は陣營を連ねて釜山と互ひに聲援した。明はそこで李如梅を寄越して、谷城を取り、そして遂に毛利秀包を星州で攻めた。併し取ることには出来なかつた。秀包も亦兵が少ないので退いて求禮を守つた。十一月に邢玠が韓に來て國都の城で、諸將と相會して相談を開き考へるには、日本兵は持重して秀吉の親ら朝鮮に渡るのを待つて居るやうだ。其の志は小さいものではない。今の内に之を撃つて終ふのがいゝといふことであつた。其の時丁度明の各地から集めた兵隊が皆到着した。そこで之を三つに分けて、李如梅を左軍の將、高策を中軍の將、李芳春と解生とを右軍の將と定め、又明の三十三人の將と韓の七人の將とを三軍に分けて従はせ、楊鎬と麻貴をして之を統べさせた。食糧や鐵砲の類も皆豊富に備へ付けを終り、十二月進軍して攻撃しようとして居た。我が諸將は之を聞いて、益々城壘を堅固にした。清正は西生に在る多くのとりでを見廻りに出かけ、副將の加藤清兵衛を留めて置いて、毛利の援兵と一緒に蔚山の城を修復せしめた。

語釋 谷城(全羅道)

明諸將議曰「秀吉諸將、清正最勇悍。先克清正、則餘從風解。乃聲向順天、以牽行長。而諸軍會慶州、留高策于彥陽、以絶釜山援路。而李如梅、解生等、皆萃于蔚山。蔚山、

土木未竣。其役卒駭。明軍至。入告清兵衛。清兵衛出戰。陷伏。大敗。入城。嬰守。淺野左京大夫率毛利氏將太田政信。宍戸元繼等。將往蔚山。監役。行至彦陽。與高策夾嶺。而舍。未相知也。比曉。我斥兵上嶺。爲明先鋒所獲。我軍乃覺。政信元繼說曰。衆寡懸絕。不若疾走入蔚山也。大夫曰。幸長提兵至此。未觀明人之旗而逃。何面目復見太閤哉。公等欲走。即走。吾當死於此矣。乃遣其將太田岡野龜田森島四人。率銃隊進。逆擊明先鋒。卻之。

訓讀 明の諸將議して曰く「秀吉の諸將、清正最も勇悍なり。先づ清正に克たば則ち餘は風に從つて解けん」と。乃ち順天に向ふと聲し、以て行長を牽き、而して諸軍慶州に會し、高策を彦陽に留め、以て釜山の援路を絶つ。而して李如梅・解生等皆蔚山に萃まる。蔚山の土木未だ竣らず。其の役卒明軍の至るに駭き、入つて清兵衛に告ぐ。清兵衛出で、戦ひ、伏に陥りて大に敗れ、城に入りて嬰守す。淺野左京大夫・毛利氏の將太田政信・宍戸元繼等を率ゐ、將に蔚山に往き役を監せんとす。行いて彦陽に至り、高策と嶺を夾んで舍し、未だ相知らず。曉くる比我が斥兵嶺に上り、明の先鋒の獲る所と爲る。我軍乃ち覺る。政信・元繼説いて曰く「衆寡懸絶、疾く走つて蔚山に入るに若かざる也」と。大夫曰く「幸長兵を提げて此に至り、未だ明人の旗を觀ずして逃る、何の面目あつて復た國に見えんや。公等走らんと欲せば即ち走れ。吾は當に此に死すべし」と。乃ち其の將太田・岡野・龜田・森島

島の四人を遣はし、銃隊を率ゐて進み、明の先鋒を逆へ撃つて之を卻く。

通釋 明の諸將は相談して曰ふには「秀吉の大將の内、清正が一番勇ましく強い。先づ清正に勝つたならば、あとの軍勢は風に從つて守を解いて逃げるだらう」と。そこで順天に向ふのだといひふらし、行長を牽制し、そして諸軍は慶州に集合し、高策を彦陽に留めて釜山よりの援路を絶ち切らせた。そして李如梅や解生等は皆蔚山に集まつた。然るに蔚山の土木工事はまだ完成しなかつた。其の人夫共が明軍の來たのに驚いて、城に入つて清兵衛に告げ知らせた。清兵衛は城を出て戦つたが、伏兵に引掛つて大敗北をし、城に入つて立て籠つた。淺野左京大夫(幸長)は毛利の將太田政信や宍戸元繼等を率ゐて蔚山に行つて工事を檢分しようとした。彦陽に着いて、高策と山を夾んで宿營したが、まだお互ひには知らないで居た。夜明け頃日本の物見の兵が嶺に上つて明の先鋒に捕へられた。そこで我が軍は初めて明兵が山の向側に居ることを覺つた。すると政信と元繼が説いて曰ふには「彼の大勢と我の小勢とまるで此處まで來てまだ明軍の旗も見ないで逃げたならば、どの面さげて太閤にお目にす」と。大夫は「余が兵を率ゐて此處まで來てまだ明軍の旗も見ないで逃げたならば、どの面さげて太閤にお目にかゝれるか。君等は逃げようと思ふならば、勝手に逃げるかい。自分はどうしても此處で討死をする覺悟だ」と。そこで其の部下の將太田・岡野・龜田・森島の四人をやつて、銃隊を引きつれて明の先鋒を迎へ撃たせ、之を退けた。

大夫在高阜。望見策軍踰嶺也。恐其戰沒。使人召還之。不肯奮擊。斃數百人而死之。獨龜田脫歸。獻所獲甲首。且曰。明兵之衆。望之無際。請君速退。大夫怒曰。吾豈聞衆

而退哉。自揚徽號。麾衆而進。將士觀之。爭赴明軍。大夫身被十餘創。猶進不已。龜田力諫。使二從士回其轡。而以刀鞘鞭馬。馬奔蔚山。策兵追躡。岡田某、福永某、返戰而死。清兵衛望見出城迎入。元繼爲明軍所隔。自間路入島山。島山、蔚山、別堡也。

訓讀

大夫高阜に在り。策の軍、嶺を踰ゆるを望見す。其の戰没を、れ、人をして之を召還せしむ。肯せず。奮撃數百人を斃して之に死す。獨り龜田脱れ歸り、獲る所の甲首を獻す。且つ曰く「明兵の衆、之を望むに際無し。請ふ君速に退け」と。大夫怒つて曰く「吾れ豈に衆を聞いて退かんや」と。自ら徽號を揚げて衆を靡きて進む。將士之を觀て、争うて明軍に赴く。大夫身十餘創を被る。猶ほ進んで已まず。龜田力諫す。二從士をして其の轡を回さしむ。而して刀鞘を以て馬に鞭つ。馬蔚山に奔る。策の兵追躡す。岡田某、福永某、返り戰つて死す。清兵衛望見して城を出で、迎へ入る。元繼明軍の隔つる所と爲り、間路より島山に入る。島山は蔚山の別堡なり。

左京大夫は高い岡の上に居た。高策の軍が嶺を越えるのを遠くから別居した。そして其の四人の將が戰死するのを心配して、人をやつて之を呼び返へさせた。併し承知しなかつた。奮ひ戰つて數百人を殺して、とうく其處で討死した。只一人龜田は脱れ歸つて、切り取つた首を獻上した。そして曰ふには「明の軍勢は、望み見た所、果てがない位澤山居ります。どうか早速逃げて下さい」と。大夫は怒つて曰ふのに「俺は敵勢が多いと聞いて逃げられようか、決して逃げないぞ」と。自ら旗印を押し立て、軍勢を揮つて進んだ。將士は之を見て争つて敵中へ突込んだ。大夫は身に十箇所餘の創を被つた。それでも猶ほ進んで止まなかつた。龜田は一生懸命

之を諫めた。二人の從者に大夫の馬の轡を引返へさせた。そして刀の鞘で馬を打つた。すると馬は蔚山の方角に飛び出した。高策の兵は之を追ひ掛けた。岡田某や福永某は引き返して戰つて討死した。清兵衛は之をのみ見て城から出て迎へ入れた。元繼は明軍に隔てられて、抜け路から島山に入った。島山は蔚山の外の小城である。

時楊鎬、李如梅等、已破蔚山、外郭。大夫代清兵衛率厲將士、嬰壁守之。明兵以大夫爲清正也、欲必獲之、攻撃甚急。大夫自放銃、無不命中。時開門突戰、殺傷過當。二城之間有川。李芳春解生泛兵艦、以絶之。城兵銃破其五艘、溺數千人。而敵勢不衰。麻貴茅國器、鼓衆攀壁、前者墜、後登。晝夜不歇。城兵欲告急於清正。清正時在機張。相去三日程。敵衆充塞道路。大夫曰「誰可往者」。近臣木村某奮請往。大夫壯之、予以善馬。已出門。明兵麇集。木村一騎馳突萬衆中。一日一夜、達機張。見清正告急。清正大驚、投袂而起。左右或止之曰「蔚山以孤城當大敵之衝、而我寡兵援之、終不能保。不若棄之也」。清正曰「彈正囑我曰「緩急幸援我兒。今餒之敵、何以立天下」。乃率見兵五百人、入負糧食、登舟赴援。與明候船戰江中、走之。清正自蒙銀兜盔、杖薙刀、立船

首指磨士卒。明韓諸軍指目莫敢近者。遂入蔚山。

訓讀 時に楊鎬・李如梅等、已に蔚山の外郭を破る。大夫清兵衛に代つて將士を率厲し、壁に嬰りて之を守る。明兵大夫を以て清正と爲すや、必ず之を獲んと欲し、攻撃甚だ急なり。大夫自ら銃を放ち、命中せざるは無し。時に門を開いて突戦ふ。殺傷過當なり。二城の間に川有り。李芳春、解生兵艦を泛べて以て之を絶つ。城兵銃して其の五艘を破り、數千人を溺らす。而して敵勢衰へず。麻喜・茅國器、衆を鼓し、壁を攀ち、前者は墜ち、後者は登る。晝夜歇まず。城兵急を清正に告げんと欲す。清正時に機張に在り。相去ること三日程にして、敵衆道路に充塞す。大夫曰く「誰か往く可き者ぞ」と。近臣木村某奮つて往かんと請ふ。大夫之を壯とし、予ふるに善馬を以てす。已に門を出づ。明兵麇集す。木村、一騎萬衆の中を馳突し、一日一夜にして、機張に達す。清正に見えて急を告ぐ。清正大に驚き、袂を投じて起つ。左右或は之を止めて曰く「蔚山は孤城を以て大敵の衝に當る。而して我が寡兵之を援くるも、終ひに保つ能はざらん。之を棄つるに若かざるなり」と。清正曰く「彈正我れに囑して曰く『緩急あらば幸ひに我が兒を援へ』と。今之を敵に假せば、何を以て天下に立たん」と。乃ち見兵五百人を率ゐて、人ごとに糧食を負ひ、舟に登りて赴き援け、明の候船と江中に戦ひ、之を走らす。清正自ら銀兜鍪を蒙り、薙刀を杖つき、船首に立ちて士卒を指揮す。明韓の諸軍指目して、敢て近づく者莫し。遂に蔚山に入る。

通釋 その時、楊鎬や李如梅等は既に蔚山の二の丸を破つた。大夫は清兵衛に代つて將士を率ゐ勵まし、城壁に立て籠り守つた。明の兵は大夫を清正だと思ひ、必ず之を獲たいと盛に攻撃した。大夫は自ら鐵砲を撃つたが命中しない丸はなかつた。時に門を開いて突撃した。殺傷した數は相當以上の數に上つた。蔚山と其の外城蔚山

との間には、川があつた。李芳春と解生とは兵艦を浮かべて、其の間を絶ち切つた。すると城兵は鐵砲で其の内の五艘を打ち沈め、數千人を水に溺れさせた。併し敵の勢は少しも衰へなかつた。麻喜や茅國器は衆を鼓舞して城壁にはび登り、前の者が江に落ちると、後の者が登るといふ有様であつた。それを晝も夜も歇めなかつた。城中の兵は急を清正に告げ度いと思つた。其の時清正は機張に居つた。機張までは相去ること三日を要する里程であつた。敵が行く道々に、いつばいに満ちふさがつて居た。大夫が曰ふのに「誰か行かれる者はあないか」と。近臣の木村某といふもの、奮ひ立つて自分が行き度いと申し出た。大夫はそれは誠に勇ましいと賞めて、善い馬を一頭與へた。やがて木村は門を出た。明兵は群り集つて來た。木村は只一騎で萬人の中を馳せ進み一日一晩で早くも機張に着いた。清正に面會して急を告げた。清正は大に驚いて、袂を振つて勢よく起ち上つた。左右の家來は之をとめて曰ふには「蔚山は孤城でありながら、大敵の打つて出る要路に當つて居ります。そして今我々の少ない兵力で之を援けても、結局は支へるは出来ません。之は見棄てた方が得策です」と。清正が曰ふのに「幸長の父長政が余に頼んで曰ふには『急な場合には何分とも我が倅を助けてやつて呉れ』と。今之を敵に見捨て、殺したとなると後日余はどうして天下に立つことが出来ようか」と。そこで有り合せの兵五百人を引きつれ、各人に食料を背負はせ、舟に乗つて助けに赴き、明の見張船と川の中で戦つて、之を退けた。清正は銀製のかぶとをかぶり、薙刀を杖について、舳に立つて士卒を指揮した。明韓の諸軍は指し見て居るだけで、近づかうとする者もなかつた。清正は遂に蔚山城に入つた。

語釋 二城(蔚山、)○木村某(母)。

鎬貴謂將士曰「清正定入城矣。猶檻虎而刺之也。明日合諸軍蟻附而上。清正令士卒投大石巨材擊卻之。即夜與數百騎襲明軍大獲而還。敵更起飛樓以火筒佛郎機百道竝攻。城壘震裂。清正與大夫堅守不屈。鎬貴知其不可力取。乃下令休戰。合圍十晝夜。斷我汲道。城兵飢渴皆嚙紙煎壁土刺馬飲其血。馬盡乃飲溺。夜出城外。搜明人戶取其所佩糗糧牛炙食之。天大雪。士卒戰瘡有墜指者。而清正意氣自若。益修守具。用銃及紙礮。日斃明兵數百千人。鎬貴夜設伏。而曉焚營。退走數里。以誘城兵。城兵欲追。清正不許。曰「彼舉火以退。退不設殿。不以夜而以曉。是將誘我而殲之也。久之。明伏稍稍出。終復圍之。浮田氏卒有亡在明軍者。呼語城上人曰「楊經理願媾和。欲與加藤公面議之。期城外百步相見。清正欲往。大夫曰「敵情不可測。公受太閤命爲一方重寄。勿輕出貽笑外國。雖然。不出示之怯也。度彼未識公面。僕請爲公代行。衆遂兩止之。故紓會期。以俟我援兵至。」

訓讀

鎬貴將士に謂つて曰く「清正定めて城に入る。猶ほ虎を檻して之を刺すがごとし」と。明日諸軍を合せて

蟻附して上る。清正士卒に令し、大石巨材を投じ、撃つて之を卻く。即夜、數百騎と明軍を襲ひ、大に獲て還る。敵更らに飛樓を起し、火筒佛郎機を以て百道竝び攻む。城壘震裂す。清正大夫と堅く守つて屈せず。鎬貴其の力取す可からざるを知り、乃ち令を下して戰を休め、合圍すること十晝夜、我が汲道を斷つ。城兵飢渴し、皆紙を嚙み、壁土を煎じ、馬を刺して其の血を飲む。馬盡く。乃ち溺を飲む。夜城外に出で、明人の戸を搜り、其の佩ぶる所の糗糧牛炙を取りて之を食ふ。天大に雪ふり、士卒戰瘡、指を墜す者あり。而るに清正意氣自若たり。益々守具を修め、銃及び紙礮を用ひ、日に明兵數百千人を斃す。鎬貴夜伏を設けて、曉に營を焚き、退き走ること數里、以て城兵を誘ふ。城兵追はんと欲す。清正許さずして曰く「彼火を擧げ以て退き、退くに殿を設けず。夜を以てせずして曉を以てす。是れ將に我れを誘ひて之を殲さんとするなり」と。之を久しうして明の伏稍稍出で、終に復之を圍む。浮田氏の卒亡げて明軍に在る者あり。呼んで城上の人に語つて曰く「楊經理媾和を願ふ。加藤公と之を面議せんと欲す。城外百歩を期し相見ん」と。清正往かんと欲す。大夫曰く「敵情測る可からず。公太閤の命を受け、一方の重寄爲り。輕しく出で、笑を外國に貽す勿れ。然りと雖も、出でざれば之に怯を示す。度るに彼れ未だ公の面を識らず。僕請ふ、公の爲めに代り行かん」と。衆遂に兩つながら之を止む。故らに會期を紓うし、以て我が援兵の至るを俟つ。

通釋 鎬貴や麻貴が其の將士に向つて曰ふには「清正は確實に城に入つた。それは宛かも虎を檻に入れて之を刺す様なものだ」と。翌日、諸軍を一緒に合せて、蟻のやうにべた一面に城壁を這ひ上つた。清正は士卒に命令して大石や大きな材木を投げさせ、之を退けた。その夜清正は又數百騎と共に明軍を襲つて、随分獲物を得て歸つた。敵は更に高い櫓を組み立て、小銃や西洋製の火砲で方々から竝んで攻め立てた。城壘は爲めに震へ裂け

た。清正は大夫と共に堅く守つて屈服することをしなかつた。楊鎬や麻貴も遂に力を以ては此の城を抜くことは出来ないと覺り、そこで命令して戦をやめ、夜晝十日の間、城を取り圍んで、我が籠城の兵の水を汲む道を斷つた。城の兵は腹が減り、咽喉が乾いたので、皆、紙を嚙んだり、壁土を煮て食べたり、又馬を刺し殺して其の血を飲んだりした。馬もやがてなくなつた。次には小便を飲んだ。夜は城の外へ出で明兵の死骸を探して、其の持つて居る乾飯を焼いた牛肉などを取つて食つた。折から大雪が降つたので、士卒は轍や霜焼を出して、指を落す者もあつた。清正はその心少しも動かなかつた。益々守り道具を整へ、鐵砲や紙筒で毎日明兵數千人宛を斃した。楊鎬・麻貴は夜、伏兵を置き、朝になつて陣屋を焼いて數里も逃げ走つて、城の兵をおびき出さうとした。城兵は之を追撃したいと思つた。清正は許さないうで曰ふには「彼は火を放つて退いたが、退くのに殿軍の備へがない。又夜中に逃げないで、朝になつてから逃げ出した。是はきつと我々をおびき出して、皆殺しにする算段だらう」と。暫くすると明の伏兵は段々に顯はれ出で来て、終に再び城を取り圍んだ。浮田氏の兵卒で明軍に逃げて行つた者があつた。城の上の人を呼んで曰ふには「明軍の大將楊經理は和睦を願つてゐます。加藤清正公と面會して相談したいと思つてゐます。城の外百歩の所でお目にかゝりませう」と。清正は行かうと思つた。すると大が曰ふのに「敵の様子は測り知られません。加藤公は太閤の命令を受けて一方の重任を引き受けて居られる。此の際軽く城を出で、萬一のことがあつて笑ひ草を外國に残すやうなことがあつてはなりません。併し又、誰も出て行かなかつたなら、敵に臆病を見せることになる。考へて見るに向ふではまだ加藤公の顔を知つて居りません。我が輩が代つて行き度いと思ふ」と。多くの人々は、遂にそのどちらをも引き止めた。そこで故意に面會の時期を長びかせて、援兵の來るのを待つて居た。

佛郎機(佛蘭西製) ○敵塚(ひも切れ) ○紙礮(紙で貼り放)

黒田孝高在梁山。使使告釜山曰、蔚山急矣。即陷諸城隨之。不可不赴援。諸將然之。豊臣秀秋・毛利秀元・黒田長政・加藤嘉明・森忠政・蜂須賀家政・藤堂高虎其子高良・脇坂安治等、將騎卒五萬、自彦陽・昌原分道赴援。而行長自海上會之。三年正月、秀秋等至彦陽、擊破高策、與昌原軍皆赴蔚山。行長益裝空艦蔽海而至。楊鎬聞我軍自三面至、挺身先遁。麻貴解生等乘夜解圍。長政使後藤基次晨出候軍。得一馬鞍于水涯。返報曰、是日本制。我兵已有騎渡者。不可後矣。長政即馳躡明軍。藤堂高良等揮槍繼之。清正與大夫乃開門合擊。敵衆崩駭。獨其將吳惟忠、芋國器、殿而同戰。吉川廣家奮擊走之。明軍大走、遺棄糧仗蔽野。

訓讀 黒田孝高梁山に在り。使をして釜山に告げしめて曰く、「蔚山急なり。即し陷らば諸城之に隨はん。赴き援げざるべからず」と。諸將之を然りとす。豊臣秀秋・毛利秀元・黒田長政・加藤嘉明・森忠政・蜂須賀家政・藤堂高虎其子高良・脇坂安治等、騎卒五萬に將として彦陽・昌原より道を分つて赴き援ふ。而して行長は海上より之に會す。三年正月、秀秋等彦陽に至り、撃つて高策を破り、昌原の軍と皆蔚山に赴く。行長益々空艦を裝し、海を蔽うて

至る。楊鎬我が軍三面より至ると聞き、身を挺して先づ遁る。麻貴・解生等、夜に乗じて圍を解く。長政、後藤基次をして晨に出で、軍を候はしむ。一馬鞍を水涯に得たり。返り報じて曰く「是れ日本の制なり。我が兵已に騎渡する者あり。後るべからず」と。長政即ち馳せて明軍を躡す。藤堂高良等槍を揮つて之に繼ぐ。清正大夫と乃ち門を開いて合撃す。敵衆崩駭す。獨り其の將吳惟忠・李國器、殿して回り戦ふ。吉川廣家奮撃して之を走らす。明軍大に走り、糧杖を遺棄して野を蔽へり。

通釋 黒田孝高は梁山に居た。使を釜山にやつて告げて云ふには「蔚山が危い。若し蔚山が落城するやうなことがあると、他の諸城も之に随つて次ぎ／＼に落ちるだらう。故に蔚山へ速かに援けに行かねばならぬ」と。諸將も之に賛成した。豊臣秀秋・毛利秀元・黒田長政・加藤嘉明・森忠政・蜂須賀家政・藤堂高虎其の子高良・脇坂安治等が五萬の騎兵に將となつて、彦陽と昌原とから道を別々にして援けに赴いた。そして行長は海上の方から之に一緒になつたのである。三年正月、秀秋等は彦陽に着き、高策を打ち破り、昌原の軍と共に蔚山へ向つた。行長は益々空船を空船でないやうに見せかけ、海にいつばいになつてやつて來た。楊鎬は日本軍が三方面から寄せて來ると聞いて、一人抜け出し最初に逃げ出した。麻貴・解生等は夜に乗じて圍を解いた。長政は後藤基次をして朝出て敵軍の様子を見させた。すると川岸で一足の馬杵を拾つた。歸つて來て報告して曰ふには「是れ日本風に出來て居ます。して見ると日本兵で、もう川を馬で渡つた者があるのである。遅れてはなりません」と。長政は直ちに馳せて明軍を追つた。藤堂高良等は槍を揮り廻しながら、これについた。清正と大夫は、そこで門を開いて共にともに攻め立てた。敵勢は崩れ駭いた。只其の將吳惟忠と李國器だけが、殿軍となつて引き返して戦つた。吉川廣家が奮ひ戦つて之を走らせた。明軍は散々に敗けて逃げ、糧食や兵器の捨てられたものが、野原を蔽うていつ

ばいになつた。

諸將之救蔚山也、明候我空虚、一軍襲梁山、爲黒田孝高擊卻之一軍襲釜山、浮田秀家使立花宗茂邀于般丹、燒而走之。明主得蔚山、敗聞、與其下議曰「是役也、謀之經年、傾海内力、加以全韓之兵、期於必克。今乃如此、罪當歸經理。乃罷楊鎬以萬世德代之、與鄧子龍・張芳監・芳威等、率楚兵往助邢玠。秀吉得蔚山、捷聞、賜手書於清正賞之、爲餽糧食。」

訓讀 諸將の蔚山を救ふや、明我が空虚を候ひ、一軍は梁山を襲ひ、黒田孝高の爲めに之を撃ち卻けらる。一軍は釜山を襲ひ、浮田秀家、立花宗茂をして般丹に邀へしめ、燒いて之を走らす。明主蔚山の敗聞を得、其の下と議して曰く「是の役や、之を謀ること年を経たり。海内の力を傾け、加ふるに全韓の兵を以てして必克を期す。今乃ち此の如し。罪、當に經理に歸すべし」と。乃ち楊鎬を罷め萬世徳を以て之に代へ、鄧子龍・張芳監・芳威等と、楚の兵を率ゐて往いて邢玠を助けしむ。秀吉蔚山の捷聞を得、手書を清正に賜ひて之を賞し、爲めに糧食を餽る。

通釋 諸將が蔚山を救ひに集中すると、明軍は一方が空いたのを見すまして、明の一軍は梁山を襲ひ、却つて黒田孝高に却けられた。一軍は釜山を襲つたが、浮田秀家が立花宗茂をやつて般丹で迎へさせ、燒打ちにして之

を追つ拂つた。明主は蔚山で敗北したと聞いて、部下の者と相談して曰ふには「此の戦はあしかけ二年にもなつた。國中の力を傾けた上に、尙ほ全韓の兵を足して、必ず勝つことを目的とした。それが今や斯くの如き態たらくである。この罪はどうしても經理に負はせねばならぬ」そこで楊鎬を免職にして萬世徳を之に代らせ、鄧子龍・張芳監・芳威等と共に楚の兵を率ゐて邢玠を助けにやつた。秀吉は蔚山の勝報を得て喜び、自筆の感狀を清正に與へて賞め稱へ、糧食を送つてやつた。

話(慶尙) 般丹(慶尙)

三月、秀吉携秀頼及夫人以下遊醍醐命前田玄以掌供帳務使豊盛勿有遺憾。四月、遣使諭諸將留秀秋行長清正及島津義弘黒田長政左京大夫等十餘將其餘盡罷歸其留者分爲四屯。秀秋守釜山而蔚山在其右清正守之順天在其左行長守之泗川在其前義弘守之四城兵凡十萬。明兵亦可十萬世徳與邢玠議令李如梅當義弘劉綎當行長麻貴當清正陳璘以水軍出其後。已而召如梅以董一元代之相持未戰。是月秀頼進從二位爲權中納言。五月秀吉有疾。六月外師罷者至。乃召見慰勞論其賞罰。

三月、秀吉、秀頼及び夫人以下を携へて醍醐に遊ぶ。前田玄以に命じて供帳を掌らしめ、務めて豊盛ならしめて遺憾あること勿らしむ。四月使を遣はして諸將に諭し、秀秋・行長・清正及び島津義弘・黒田長政・左京大夫等の十餘將を留め、其餘は盡く罷め歸らしむ。其の留まる者は、分ちて四屯と爲す。秀秋は釜山を守る。而して蔚山は其の右に在りて、清正之を守り、順天は其の左に在りて、行長之を守り、泗川は其の前に在りて、義弘之を守る。四城の兵凡そ十萬。明兵も亦十萬可り。世徳、邢玠と議し、李如梅をして義弘に當り、劉綎をして行長に當り、麻貴をして清正に當り、陳璘をして水軍を以て其の後に出でしむ。已にして如梅を召し、董一元を以て之に代へ相持して未だ戦はず。是の月、秀頼從二位に進み、權中納言と爲る。五月、秀吉疾有り。六月、外師の罷むる者至る。乃ち召し見て慰勞し、其の賞罰を論ず。

三月、秀吉は秀頼と夫人や其の以下の人々を伴れて醍醐へ遊びに行つた。前田玄以に命じて色々の支度を掌らせ、出来るだけ充分に立派に、そして何でも不足のないやうにさせた。四月、諸將の所へ使をやつて。秀秋、行長、清正及び島津義弘、黒田長政、左京大夫等の十餘りの大將を残り、其餘は全部歸らせた。残つた將は四つの屯營に分れた。秀秋は釜山を守つた。そして蔚山は其の右で清正が之を守り、順天は左で行長が守り、泗川は前にあつて義弘が之を守つた。四城の兵力は凡そ十萬であつた。明の兵力も亦十萬位であつた。世徳は邢玠と相談して、李如梅をして義弘に當らせ、劉綎をして行長に當らせ、麻貴をして清正に當らせ、そして陳璘には海軍を率ゐて其の後に出来るやうにさせた。それから間もなく如梅を呼び返して董一元に代らせ、お互ひに對陣するだけで、まだ戦にはならなかつた。是の月、秀頼は從二位に進み、權中納言に任ぜられた。五月、秀吉が病に罹つた。六月、外國から歸つて來ることになつてゐた將士が到着した。そこで呼び入れて其の勞を慰め、又

其等の將士の手柄や失敗を論議した。

酒川(慶尚道)

七月、秀吉病篤。召德川公諭之曰、「外國未だ服せず。而吾罹此疾。吾死則難作。非卿莫以定之。吾今日以天下托卿。卿爲我努力。秀頼幼弱、亦煩卿保護。至其成長、當立與不當立、一在卿之心。」德川公歔歔曰、「殿下百歳之後、孰不奉嗣君者。雖然、人心不測。殿下宜運其神算、以建萬世之安。家康不才、不敢當重任。」曰、「吾熟思之、莫若卿者。卿勿避也。」德川公固辭而退。秀吉遂召石田三成、増田長盛告之。二人諫曰、「殿下百戦取天下、而一日予之他人、是胡爲也。今天下猛將謀臣、無不被殿下恩者。其於輔嗣君何有。」

訓讀 七月、秀吉病篤し。德川公を召して之を諭して曰く、「外國未だ服せず。而して吾れ此の疾に罹る。吾れ死せば則ち難作らん。卿に非ざれば以て之を定むる莫し。吾れ今日、天下を以て卿に托す。卿、我が爲に努力せよ。秀頼幼弱、亦卿の保護を煩す。其の成長に至つて、當に立つべきと當に立つべからざるとは、一に卿の心に在り」と。德川公、歔歔して曰く、「殿下百歳の後、孰か嗣君を奉ぜざる者ぞ。然りと雖も人心測られず。殿下

宜しく其の神算を運して以て萬世の安きを建つべし。家康不才、敢て重任に當らず」と。曰く「吾れ之を熟思するに、卿に若く者莫し。卿避くる勿れ」と。德川公固辭して退く。秀吉遂に石田三成・増田長盛を召して之を告ぐ。二人諫めて曰く「殿下百戦して天下を取り、而して一日にして之を他人に予ふ。是れ胡爲るものぞや。今や天下の猛將謀臣、殿下の恩を被らざる者無し。其の嗣君を輔くるに於て何か有らん」と。

通釋 七月、秀吉の病氣は重くなつた。德川公を呼んで諭して曰ふには「外國はまだ服従しない。而るに余は此んな病氣に罹つた。自分が死んだならば、きつと騒動が持ち上るだらう。貴公でなければそれを鎮める者は居ない。自分は今天下を貴公に任す。貴公はどうか自分の爲めに努力してもらひ度い。秀頼は幼小で、之も亦貴公の保護を煩し度い。あれが大きくなつた時、天下の將軍になるか、ならぬかは一に貴公の心次第で、どうともよろしく取計つて下され」と。德川公は泣きしやくつて曰ふには「殿下がお歿になりました。誰が後嗣の君を戴かないものが御座います。きつと後嗣の秀頼公を奉ずるのではあるが、併し、人の心といふものは、分らぬものであります。殿下はよろしくその優れた賢い計書を運らして、萬世までも安泰になる基礎をお建てになるのがよろしい。家康は誠に才能のない者ですから、決して此の重い役目には當りませぬ」と。秀吉は曰ふのに「自分はよくよく考へて見るに、貴公より外に人はない。どうか辭退しないで呉れ」と。それでも德川公は固く斷つて引き下つた。秀吉は遂に石田三成・増田長盛を呼んで、此の話を告げ知らせた。二人は諫めて曰ふのに「殿下は諸方で戦つて、苦心して天下を取られました。それをたつた一日で難作なく、他人に與へようとなさる。是れは一體何んといふ仕儀で御座いますか。今天下の勇ましい大將や謀のうまい家來は、皆殿下の御恩を受けて居るので、其等の者共が、御世嗣の君を輔けるといふことは當然なこととあります」と。

於是定大老奉行奉行五人如故所置德川公及前田利家毛利輝元浮田秀家上杉景勝爲五大老以中村一氏生駒親正堀尾吉晴爲三中老小事決於奉行大事決於大老大老奉行或有不協則中老居間和解之使片桐且元小出秀正傳秀頼密囑二人曰吾起人奴至爲關白孰非國恩哉吾與明構兵禍結弗解吾深悔之彼聞吾死或大舉來報國朝自古未曾受外國侵辱及我時受焉吾深耻之是吾所以托國於家康至我家存亡未暇恤也雖然家康必不負我汝輩謹保護秀頼莫使生覺隙焉又使木村重成薄田兼相渡部尙副二人分親兵爲七隊以速水守久伊東長次青木一重眞野宗信中島氏種野野村吉安堀田正高爲隊長馬標旌旗盡傳之秀頼使母衣騎郡良列卒將津川左近掌之

訓讀 是に於て、大老奉行を定む。奉行五人は故置く所の如し。德川公及び前田利家・毛利輝元・浮田秀家・上杉景勝を五大老と爲し、中村一氏・生駒親正・堀尾吉晴を以て三中老と爲し、小事は奉行に決し、大事は大老に決す。大老奉行或は協はざる有らば、則ち中老・間に居て之を和解せよと。片桐且元・小出秀正をして秀頼に傳たらしめ、密に二人に囑して曰く「吾れ人奴より起つて、關白と爲るに至る。孰か國恩に非ざらんや。吾れ明と兵

を構へ、禍結んで解けず。吾れ深く之を悔ゆ。彼れ吾が死するを聞かば、或は大舉して來り報いん。國朝古より未だ曾て外國の侵辱を受けず。我が時に及んで受くるは吾れ深く之を恥づ。是れ吾れ國を家康に托する所以なり。我が家の存亡に至つては、未だ恤ふるに暇あらざるなり。然りと雖も、家康は必ず我に負かじ。汝が輩、謹んで秀頼を保護し、覺隙を生ぜしむる莫れ」と。又木村重成・薄田兼相・渡邊尙をして二人に副たらしむ。親兵を分つて七隊と爲し、速水守久・伊東長次・青木一重・眞野宗信・中島氏種・野野村吉安・堀田正高を以て隊長と爲し、馬標、旌旗は盡く之を秀頼に傳へ、母衣騎郡良列・卒將津川左近をして之を掌らしむ。

通釋 そこで大老や奉行の職を定め、奉行五人は前に置いたと同じやうにし、德川公及び前田利家・毛利輝元・浮田秀家・上杉景勝を五大老とし、中村一氏・生駒親正・堀尾吉晴を三中老とし、小さい事は奉行が決裁し、天下の大事は大老が取りきめることにした。若し大老と奉行とで意見が合はない場合は中老が其の仲に居て、仲裁するのである。片桐且元と小出秀正とは秀頼のお守役となし、秀吉が秘に二人に頼んで曰ふには「自分は下男から身を起して、關白となつたのだ。皆國の恩でないものはない。自分は明と戦争をして、戦争は未だに結んで解けない。これは深く後悔に堪へない所である。明國は自分が死んだと聞いたなら、或は大據押し寄せて返報するかも知れない。わが日本は古來まだ一度たりとも外國に侵され辱しめられたことはないのだ。自分の時になつてそのやうな事があつては、自分は深く恥とするのだ。さればこそ自分は天下を以て家康に任せようとしたわけなのである。自分の家が存続するか亡びるかといふやうなことは、決して心配してゐない。併し家康はきつと自分に背くやうなことはないと思ふ。お前方も謹んで秀頼を護り、仲たがひなど生じないやうに注意せよ」と。又木村重成・薄田兼相・渡邊尙の三人を、二人のお守の補助役とした。お側付の兵を七隊に分けて、速水守久・伊東長次・青木一

重、直野宗信、中島氏種、野野村吉安、堀田正高を隊長と定め、馬じるしや旗の類は皆秀頼に譲り渡し、母衣騎の郡良列と足柄大將の津川左近とに之を掌らせた。

母衣騎(矢を防ぐものを背に負ふ勇猛なる騎士)

八月、盡會大老奉行以下爲誓。誓曰「虛心協謀、務輔嗣子、勿樹私黨、勿忘公義、勿變更、勿漏泄、勿不告而結婚、勿不告而交質。嗣子六歲未能親政、前田保之於大坂、而德川視事於伏見、封邑行罰、皆竣嗣子之長。命淺野彈正石田三成曰「汝赴朝鮮、收我兵、不能收則遣家康。家康有不可往則遣利家。二人遣一雖有百萬敵、不能尾也。」十三日、疾大篤將、暝已而張目曰「勿使我十萬兵爲海外鬼。言畢而薨。年六十三。群臣秘喪、使前田玄以密葬之于阿彌陀峯。九月三日、德川公與諸侯盟、無貳於嗣君。遂使淺野石田以遣命赴肥前、密召在韓諸將。」

訓讀 八月、盡く大老奉行以下を會し誓をなす。誓に曰く「心を虚し、して謀を協せ、務めて嗣子を輔け、私黨を樹つること勿れ。公義を忘る、勿れ。變更する勿れ。漏泄する勿れ。告げずして婚を結ぶ勿れ。告げずして質を交ふる勿れ。嗣子六歳、未だ政を親らすること能はず。前田は之を大坂に保し、而して德川は事を

伏見に視、邑を封じ罰を行ふこと、皆嗣子の長するを候て」と。淺野彈正・石田三成に命じて曰く「汝、朝鮮に赴き我が兵を收めよ。收むる能はざれば則ち家康を遣はせ。家康往くべからざる有れば則ち利家を遣はせ。二人一を遣はせば、百萬の敵有りと雖も尾すること能はざるなり」と。十三日、疾大に篤し。將に暝せんとす。已にして目を張つて曰く「我が十萬の兵をして海外の鬼と爲らしむる勿れ」と。言畢つて薨す。年六十三なり。群臣、喪を秘し、前田玄以をして密に之を阿彌陀峯に葬らしむ。九月三日、德川公諸侯と、嗣君に貳無きを盟ひ、遂に淺野・石田をして、遣命を以て肥前に赴き、密に在韓の諸將を召さしむ。

通釋 八月、全部大老奉行以下の家來を集めて誓をさせた。其の誓の言葉に曰ふには、心を虚しくし、力を協せて謀をなし、務めはげんで嗣子を助け、勝手に黨を組んではならぬ。公の義理を忘れるな。従來の式例を更めるな。機密に漏らすな。お上に告げずに縁を結ぶな。お上に告げずに人質を交換するな。嗣子は六歳でまだ親しく政事をとられない。前田は大坂で之を守り立て、そして德川は、伏見で政事を取り、土地を興へたり罰を行ふことは、皆嗣子の成長するのを待つて、それから後に行ふやうにせよ」と。淺野彈正と石田三成とに命じて曰ふには、汝等朝鮮に行き、我が兵を引上げさせよ。引上げることが出来ないならば家康をやれ。若し家康が萬一行かれないならば利家をやれ。二人の内どちらか一人をやつたら、百萬の大軍があつても、後を追つかけることは出来ないぞ」と。十三日には病氣が非常に重くなつた。最早目をとちて息を引くのかと見えた。暫くして目を見張つて、曰ふには「我が十萬の兵を外國で殺してはならぬぞ」と。さう言ひ終つて薨じた。年は六十三歳であつた。家來は皆々喪をかくし、前田玄以をして秘に阿彌陀峰に葬らせた。九月三日、德川公は諸侯と共に世嗣に二心のないことを誓ひ合ひ、遂に淺野・石田をして遣言にもとづいて肥前に行かせ、秘に朝鮮にある諸將を召し

返すやうにさせた。

諸將之與明軍相持也、明兵益至、邢玠萬世德促諸軍進攻、劉綎患順天帶山海不可近、則思沈惟敬所為、欲誘而取之、遣間使來告行長曰、先鋒嚮與我國盟矣、因清正誑惑關白、復致有今日、今兩國兵老、吾欲親與先鋒會、以成前盟也、行長不信、瞰縱單騎候於道、則信之、將出赴會、而我兵降在縱部者、為泄其謀、行長驚還、縱恚而來攻、行長擊卻之。

訓讀 諸將の明軍と相持するや、明兵益々至る。邢玠萬世德、諸軍を促して進み攻む。劉綎、順天の山海を帯びて近づく可からざるを患へ、則ち沈惟敬の爲す所を思ひ、誘つて之を取らんと欲す。間使を遣はし來り行長に告げしめて曰く、「先鋒嚮に我が國と盟ふ。清正關白を誑惑するに因り、復今日有るを致す。今兩國の兵老る。吾れ親ら先鋒と會し以て前盟を成さんと欲するなり」と。行長信ぜず。縱の單騎、道に候ふを瞰て則ち之を信じ、將に出で、會に赴かんとす。而して我が兵の降つて縱の部に在る者、爲めに其の謀を泄す。行長驚き還る。縱恚つて來り攻む。行長擊つて之を卻く。

通釋 諸將は明軍と對陣して居たが、明の兵隊は益々やつて來た。邢玠や萬世德は諸軍を督促して、進み攻めた。劉綎は順天が山と海を控へてゐて近づくことの出來ないのを心配したので、沈惟敬が以前にやつた手管を思

ひ出し、同じやうにおびき出して之を取らうと考へた。そこで秘密の使を寄越して行長に告げて曰ふには「先鋒の貴下は前に我が國と盟つて和睦をなされやうとした。たゞ清正が關白を欺し惑はしたので、又々今日のやうな次第となつた。然し今は兩國の兵は共に疲れてゐる。自分は貴下と親しく面會して、前の盟ひを實行し度いと思ふ」と。行長は信用しなかつた。併し縱が一人で馬に打ち乗つて道に出て待つて居るのを見て、初めて之を信用し、城から出て會ひに行かうとした。日本兵で降參して縱の部下となつて居る者が危いと思つたので、行長のために其の計畫をばらした。行長は驚いて引き返した。縱は腹を立て、押しかけて來て攻めた。行長は戰つて之を退けた。

語釋 沈惟敬所爲(和睦を申し込み、會盟に託して我が) ○泄其謀(明人の詐謀を日本へ知らせた)

清正亦竣蔚山役、糧多兵勇、人一戰。九月、麻貴至溫井、懲前敗、堅壁不敢出。清正屢出戰、擊走貴兵。立花宗茂在釜山、自請以五百人往救清正。值明五千人于元濱、乘曉霧薄擊克之。遂追北。或以衆寡不敵止之。宗茂曰、敵馬足亂、可追。不追視我寡也。追擊復克之。既舍、逸明囚、設五伏以待。曰、吾乃視寡而誘之也。夜半明兵來襲、伏起復克之。明日未至蔚山、數十里、與清正夾擊麻貴、大克之。

訓讀 清正も亦蔚山の役を竣へ、糧多く兵勇に、人一戰を思ふ。九月、麻貴、溫井に至る。前敗に懲りて、

壁を堅くして敢て出でず。清正屢々出で、戦ひ、撃つて貴の兵を走らす。立花宗茂、釜山に在り。自ら請うて、五百人を以て往いて清正を救ふ。明の五千人に元潰に値ふ。曉霧に乗じ薄撃して之に克ち、遂に北ぐるを追ふ。或人、衆寡敵せざるを以て之を止む。宗茂曰く「敵の馬足亂る。追ふ可し。追はざれば、我が寡きを視すなり」と。追撃して復之に克つ。既に舍し、明の囚を逸し、五伏を設け以て待つ。曰く「吾れ乃ち寡を視して之を誘ふなり」と。夜半明兵來り襲ふ。伏起つて復之に克つ。明日未だ蔚山に至らざる數十里にして、清正と夾んで麻貴を撃ち、大に之に克つ。

通釋 清正も亦蔚山の工事を竣へ、食糧も多く、兵士も勇氣に溢れて、人々皆戦を待ち望んで居た。九月、麻貴が濶川に來た。前の敗戦に懲りて、城壁を堅固にして、決して出で、戦はうとはしなかつた。それで清正の方から度々出て行つて戦ひ、攻め撃つて麻貴の兵を走らせた。立花宗茂はこの時釜山に居た。自分から願ひ出て五百人の兵を率ゐて清正を救ひに來た。元潰といふ處で明の五千の兵と出會つた。朝霧がかつて居て、先がよく見えないのを利用して、すつと近寄つて攻撃して之に打ち勝つた。遂に逃げるのを追はうとした。すると或人が、向ふは多く、こちらは少いから、とても相手にならないと言つて引き止めた。宗茂は曰ふのに「敵の隊伍は亂れて居る、追撃して再び勝つた。若し追撃しないならば、其の事が却つてこちらの少ない兵力を示すことになるのだ」と。追撃して再び勝つた。既に宿舎に着いてからは、明の捕へられた者どもを放してやり、五個所に伏兵を置いて待つて居た。そして言ふには「自分は此の様に、兵力の少ないことを見せて、敵を誘ふのだ」と。果して夜中頃に明の兵が襲來した。伏兵が起つて又々之に打ち勝つた。翌日、蔚山へはまだ數十里もある地點で、清正と共に麻貴の軍を夾み撃ちにして大勝利を博した。

語釋 温井・元潰(遼州) ○前敗(蔚山の)

是時義弘及子忠恆在新寨、與董一元夾晉江而軍。茅國器聞島津氏與豐臣氏爲宿仇、以爲可間也。乃作檄數秀吉罪、遣辯士以搖義弘。義弘叱而卻之。國器又說一元曰「義弘築望津、東陽、泗川、永春、昆陽、金海、固城、新寨、八壘、勢如長蛇。望津、其首也。擊其首、餘易制耳。」一元然之。會明捕虜郭國安在望津。送欵於一元、約爲內應。舉火爲信。至期、國器引兵臨江。我兵亦出寨臨江。已而寨中火起。吾兵顧而救之。明兵乃渡、陷望津。忠恆在新寨、欲赴援。義弘曰「未可。」望津兵退守泗川。而一元已分兵襲永春、昆陽、燒其積聚。悉軍渡江。遂乘夜襲泗川。我守將出戰、斬明驍將李寧、盧得功、潰圍走新寨。忠恆復請赴援。義弘曰「未可。」一元已取數壘。而島津氏不出。意甚輕之。進燒東陽、倉、火晝夜不滅。遂向新寨。國器止之、勸先攻金海、固城、以奪其羽翼。不聽。

訓讀 是の時義弘及び子忠恆、新寨に在り、董一元と、晉江を夾んで軍す。茅國器、島津氏の豐臣氏と宿仇たるを聞き、以て間すべしと爲す。乃ち檄を作つて秀吉の罪を數め、辯士を遣はして以て義弘を搖す。義弘叱して

之を卻く。國器、又一元に説いて曰く「義弘、望津、東陽、泗川、永春、昆陽、金海、固城、新寨の八壘を築く。勢長蛇の如し。望津は其の首なり。其の首を撃たば餘は制し易きのみ」と。一元之を然りとす。會々明の捕虜、郭國安、望津に在り。欸を一元に送り、約して内應を爲し、火を擧げて信と爲す。期に至つて國器兵を引いて江に臨む。我が兵も亦寨を出で、江に臨む。已にして寨中火起る。吾が兵顧みて之を救ふ。明の兵乃ち渡り、望津を陥る。忠恆新寨に在り、赴き援けんと欲す。義弘曰く「未だ可ならず」と。望津の兵退いて泗川を守る。而して一元、已に兵を分ちて、永春・昆陽を襲ひ、其の積聚を焼き、軍を悉して江を渡り、遂に夜に乗じて泗川を襲ふ。我が守將出で、戦ひ、明の驍將李寧・盧得功を斬り、圍を潰して新寨に走る。忠恆復赴き援けんと請ふ。義弘曰く「未だ可ならず」と。一元已に數壘を取る。而して島津氏出でず、意甚だ之を輕んじ、進んで東陽の倉を燒く。火、晝夜滅せず。遂に新寨に向ふ。國器之を止め、先づ金海・固城を攻め以て其の羽翼を奪はんことを勸む。聽かず。

通釋 此の時、義弘と其の子忠恆は新寨に居て、董一元と晉江を夾んで陣取つてゐた。辛國器は、島津が豊臣に對して舊い怨があるを聞いて、間を割くことが出来ると思ひ込んだ。そこで廻し文を作つて秀吉の罪を書き並べ、辯舌のうまい者を寄越して、義弘の心を搖かさうとした。義弘は吐り飛ばして之を受附けなかつた。國器は又一元に説いて曰ふには「義弘は望津・東陽・泗川・永春・昏陽・金海・新寨などの八つのとりでを造らへた。其の様子は大蛇の様である。その内で望津は一番大事な首にあたる所だ。それを撃つたならば、あとは制御し易い」と。一元もこの説に賛成した。すると丁度明の捕虜の郭國安といふ者が望津に居た。彼は一元に内通して裏切を約束し、火を擧げて合圖としようと言つた。約束の時期になると、國器は兵を率ゐて川のほとりに出た。我が兵も亦とりでを出て江水の邊に出た。すると間もなく、こりでの中で火があがつた。我が兵はふり返つて之を消さうと

した。其の内に明兵は川を渡つて望津は破れて終つた。忠恆は新寨に居て、援けに行き度いと思つたが義弘が曰ふのに「まだいけない」と。望津の兵は退いて泗川を守つた。其の間に一元は兵を分けて永春と昆陽を襲ひ、其處にあつた軍需品を焼き拂ひ、軍を一緒に合せて川を越え、遂に夜を利用して泗川を攻めた。城を守つて居た我が將は城を出て戦ひ、明の強い大将李寧や盧得功を斬り殺し、敵の圍を突き破つて新寨へ走り込んだ。忠恆は再び援けに行き度いと願つた。義弘は「まだいけない」と言つて許さない。一元はもう數個所のとりでを落した。而して島津氏はまだ戦を交へない。そこで心に大に之を輕蔑し、進んで東陽の倉を燒いた。其の時の火は晝夜燃え續けてゐた。遂に一元は新寨に向つた。國器は之をとめて、先づ金海と固城を攻めて新寨の羽翼に當るものを取れと勸めた。併し聞き入れなかつた。

新寨・晉江(慶尙)

十月朔、一元合兵、以國器及葉邦榮彭信古爲先鋒、以藍芳威爲後軍、攻新寨、自卯至巳、以木砲摧大門及城牆、薄塹拔柵、城兵殊死戰、會砲炸烟焰四迸、明陣亂、義弘目忠恆曰「可以出矣」忠恆唯而起、與數千騎關門直衝明陣、明陣皆披靡、而國器邦榮、以萬人橫入于城、義弘豫勒五千人迎擊走之、芳威望見先走、明軍遂大潰、義弘忠恆追奔逐北、斬首三萬餘級、明兵爭走相擠、伏尸二百餘里、我軍以亡糧、不復窮

追^{セウ}至^{ツツ}望^ニ津^ニ乃^ル還^{シテ}而^{シテ}秀^ニ吉^ノ之^ヲ討^ス適^ニ至^ル諸^ノ將^ヲ潛^ニ相^ニ告^シ言^シ稍^ム稍^ム治^ム歸^シ裝^ヲ而^{シテ}明^ノ都^ノ御^ノ史^ノ在^ル吳^ニ者^ヲ諜^リ知^リ秀^ノ吉^ノ沒^セ報^ヲ告^ス明^ノ主^ニ明^ノ主^ニ大^ニ喜^ビ舉^ゲ朝^ヲ相^ニ賀^ス於^テ是^ニ趣^シ邢^ノ玠^等躡^リ我^ノ軍^ヲ郭^ノ國^ノ安^亦走^ツ告^グ之^ヲ明^ノ群^ノ帥^ニ群^ノ帥^ニ創^リ新^ノ寨^ノ之^ヲ敗^ニ不^レ敢^テ進^ム

訓 十月朔、一元兵を合せて國器及び葉邦榮・彭信古を以て先鋒と爲し、藍芳威を以て後軍と爲し、新寨を攻め、卯より巳に至り、木砲を以て大門及び城牆を摧き、壘に薄り柵を抜く。城兵殊死して戦ふ。會々砲炸け烟焰、四に迸る。明の陣亂る。義弘、忠恆に目して曰く「以て出づべし」と。忠恆、唯して起ち、數千騎と門を闢いて直に明の陣を衝く。明の陣皆披靡す。而して國器・邦榮、萬人を以て横に城に入る。義弘、豫め五千人を勅して、迎へ撃つて之を走らす。芳威、望見して先づ走る。明軍遂に大に潰ゆ。義弘、忠恆、奔るを追ひ北ぐるを逐ひ、斬首三萬餘級。明兵争ひ走り相擠し伏尸二百餘里。我が軍糧じきを以て復窮追せず。追うて望津に至つて乃ち還る。而して秀吉の討適に至る。諸將潛に相告言し、稍稍歸裝を治む。而して明の都御史の吳に在る者、諜して秀吉の没せしを知り明主に報告す。明主大に喜び舉朝相賀す。是に於て、邢玠等を趣し、我が軍を躡せしむ。郭國安も亦走つて之を明の群帥に告ぐ。群帥新寨の敗に創りて、敢て進まず。

通 十月一日一元兵は兵を皆合せて、國器や葉邦榮・彭信古を先鋒部隊とし、藍芳威を後備隊として新寨に攻め寄せ、午前の六時から十時までの間、木砲を以て大門や垣根を打ち摧き、堀に間近く攻め寄つて逆茂木を抜き取つた。城の兵は死を決して戦つた。折しも明軍の大砲が裂け破れて、煙や焰が四方に飛び出した。明軍の陣形が

亂れた。義弘はすぐに忠恆に目くばせをして曰ふには「今こそ打つて出る時だ」と。忠恆は合點して身を躍らし、數千騎と共に門を押し開いて真直に明の陣地へ突き進んだ。明の陣は忽ちに皆道を披いて靡き伏した。然るに國器と邦榮とは一萬の兵をつれて極合から城に押入らうとした。義弘は前々から五千の兵をまとめて置いて、之を迎へ撃つて退けた。芳威は遠くから此等の様子を見て、先づ逃げ出した。明軍はとうとう滅茶くくに破られて終つた。義弘と忠恆は逃げて行く敵兵を追つかけて、首を斬ること二萬以上であつた。明兵は先を争つて逃げ走り、お互ひに押し合つて、地に伏した死骸は二百里餘りも續いた。併し我が軍は糧食が乏しかつたので、此の上追ひ詰めることは止めた。望津まで追つかけて、歸つたのである。其時丁度秀吉の死んだ知らせが着いた。諸將は内々に相知らせ、そろく歸り支度を取掛つた。そして又明の都御史で吳に居た者が、問者を放つて秀吉の死んだのを嗅ぎ付け、明主に知らせた。明主は非常に喜び、朝廷の人々は残らずお互ひに祝ひ合つた。そこで邢玠等を督促して、我が軍を追撃させた。捕虜の郭國安も亦走つて秀吉の死去の事を明の大將連に知らせた。大將連は新寨の敗北に懲りて、進出しようとしなかつた。

語釋 木砲(木で作つた大砲)

當^リ是^ノ時^ニ我^ガ邦^ヲ訛^リ言^ス明^ノ大^ニ舉^ゲ扼^ル我^ノ兵^ノ歸^ル路^ヲ德^ノ川^ノ前^ノ田^ノ二^ノ老^ノ皆^ニ欲^ス親^ラ往^ル衆^ノ議^ヲ止^ム之^ヲ使^シ藤^ノ堂^ノ高^ノ虎^ノ代^ニ之^ヲ來^リ至^リ行^ク臺^ニ得^テ新^ノ寨^ノ捷^ノ書^ヲ乃^チ止^ム而^{シテ}釜^ノ山^ノ軍^ニ已^ニ從^テ秀^ノ秋^ニ還^ル對^シ馬^ニ清^ノ正^ノ義^ノ弘^次收^メ兵^ヲ還^ル行^ク長^亦欲^ス還^ル而^{シテ}劉^ノ綖^復來^テ圍^ム之^ヲ清^正與^テ義^ノ弘^返擊^チ拔^キ行^ク長^皆上^ル舟^ニ陳^ノ璘^鄧子^龍

李舜臣・陳蠶・馬文煥・陶明宰等、以兵艦數千艘、要之海中。清正已去。義弘圍且卻、至加德島。明兵四集於行長。行長厲士卒止戰。會明人失火器、反中其船。我兵因奮擊、塵其兵、斬子龍。舜臣來救、亦射殺之。進圍璘。幾獲之、而蠶・文煥繼至、銃炮交發、盡焚我船。行長上一島、奪敵寨、據之。明兵艦環守焉。行長乘夜獨遁、歸於義弘。義弘返、載其餘衆、與蠶・明宰戰、擒明宰而還。皆至加德。劉綎以生兵來攻。義弘行長擊卻之。明軍不敢復追躡。我軍盡達對馬。

訓讀 是の時に當り、我が邦訛言す、明大舉して我が兵の歸路を扼すと。徳川・前田の二老、皆親ら往かんと欲す。衆議之を止む。藤堂高虎をして之に代らしむ。來つて行臺に至り、新寨の捷書を得て、乃ち止む。而して釜山の軍已に秀秋に従つて對馬に還る。清正・義弘、以て兵を收めて還る。行長も亦還らんと欲す。而して劉綎復來つて之を圍む。清正・義弘と返り撃ち、行長を抜き皆舟に上る。陳璘・鄧子龍・李舜臣・陳蠶・馬文煥・陶明宰等、兵艦數千艘を以て之を海中に要す。清正已に去る。義弘圍ひ且つ卻き、加德島に至る。明兵行長に四集す。行長士卒を厲して止り戰ふ。會、明人火器を失し、反つて其船に中る。我が兵、因つて奮撃して其の兵を塵にし、子龍を斬る。舜臣來り救ふ。亦射て之を殺し、進んで璘を圍む。幾ど之を獲んとして、蠶・文煥繼ぎ至り、銃炮交々發し、盡く我が船を焚く。行長上一島に上り、敵寨を奪つて之に據る。明の兵艦環守す。行長夜に乘じて獨り遁れ、

義弘に歸す。義弘返り、其餘衆を載せ、蠶・明宰と戦ひ、明宰を擒にして還り、皆加德に至る。劉綎、生兵を以て來り攻む。義弘・行長撃つて之を卻く。明軍敢て復追躡せず。我が軍盡く對馬に達す。

通釋 此の當時、我が國內では間違つた噂を立てた。それは明が大兵を擧げて、我が日本兵の歸り路を押へてゐるといふのであつた。徳川・前田の二大老は、皆自分で親ら助けに行かうと思つた。多勢の者は之を止めさせる意見であつた。藤堂高虎をして代つて行かせた。高虎は假本營に到着すると、新寨で島津が勝つたといふ報知を得て、國內の噂は誤傳だと知つたので、そのまま渡海を止めた。そして釜山の軍は既に秀秋に従つて對馬へ歸り着いた。次いで清正と義弘が兵を收めて歸途についた。行長も亦歸らうと思つて居た。すると劉綎は再びやつて來て行長を取り圍んだ。清正は義弘と共に引き返して艇を撃ち、行長を救ひ出して、一同皆、船に乗つた。すると鄧子龍・李舜臣・陳蠶・馬文煥・陶明宰の面々が兵艦數千艘を浮べて、之を海中に待ち受けて居た。清正はもう去つた後であつた。義弘は戦ひながら段々退いて加德島に着いた。そこで明兵は取り残された行長に四方から撃つて掛つた。行長は士卒を元氣づけて止まつて戦つた。偶々明兵が火器の扱ひ方を間違つて却つて自分の船に丸が中つた。我が兵はそれに因つて奮ひ戦ひ、其の兵を皆殺しにして、子龍を斬つた。舜臣が救ひに駆け付けた。之も射殺し、進んで璘を取り圍んだ。もう少しのことで之を生捕らうとしたが、蠶や文煥が引續いて來て鐵砲や大砲を次々と打つて、すつかり我が船を焼いて終つた。行長はとある島に上り、敵の寨を占領して、此處に立て籠つた。明の兵艦は之を取り巻いて守つて居た。行長は夜を利用して單身逃げ出し、義弘の所へ來た。義弘は引き返して、行長の殘した兵士を船に載せ、蠶・明宰等と戦ひ明宰を生捕つて引き上げ、一同加德島に着いた。劉綎が新手の兵を率ゐて攻めて來た。義弘と行長は之を撃ち退けた。明軍はもう追ふこともしなかつた。我が軍は全部

對島に到着した、

語釋 一島(南海)

十一月、諸將整軍至那古耶。兩奉行迎之、宣秀吉遺命。諸將皆泣。三成曰、「公等詣伏見、當各之國。來秋會同、以茗讌相招。」清正曰、「諸君好爲茗讌、我守孤城、七年矣。勞悴讒存、母茗母酒、當炊稗粥答之耳。」三成嘆之。先是、行長德清正救順天也、欲釋憾焉。清正曰、「吾亦欲之矣。如子善治部、何自是相讎益深。於是諸將相率詣伏見、謁秀賴。諸老慰勞之、令罷之。國以嗣君猶幼、國家多難、不敢自逸。埃明年去。明年、大老奉行論征韓功、賜義弘以公田、在薩摩者四萬石。清正行長以下、得賞有差。」

訓讀 十一月、諸將、軍を整へて那古耶に至る。兩奉行之を迎へ、秀吉の遺命を宣ふ。諸將皆泣く。三成曰く、「公等伏見に詣り、當に各々國に之くべし。來秋會同し、茗讌を以て相招かん」と。清正曰く、「諸君好んで茗讌を爲す。我れ孤城を守ること七年、勞悴總に存す。茗母く酒母し。當に稗粥を炊いで之に答ふべきのみ」と。三成之を嘆む。是より先き、行長、清正の順天を救ふを徳とするや、憾を釋かんと欲す。清正曰く、「吾も亦之を欲す。子、治部に善きを如何」と。是より相讎とすること益々深し。是に於て諸將相率ひて伏見に詣り、秀賴に謁す。諸老之を慰勞し、罷めて國に之かしむ。嗣君猶幼く、國家多難なるを以て敢て自ら逸せず、明年を俟つて去る。

明年大老奉行、征韓の功を論じ、義弘に賜ふに公田の薩摩に在る者四萬石を以てす。清正行長以下賞を得る差あり。

通釋 十一月、諸將は軍容を立派に整へて那古耶に着いた。淺野・石田の兩奉行は之を迎へて、秀吉の遺言を述べた。諸將は皆泣いて悲しんだ。暫くして三成が曰ふのに「貴公等は先づ伏見に行き、それから各自、御自分の國へ戻るやうにし給へ。來年の秋には皆集つて茶の湯の會を催して、相互に招待し合ふことにしよう」と。清正が曰ふのに「諸君は茶の湯の會が好きだ。自分は蔚山の孤城を守ること正に七年であつた。今は疲れやつれて、やつと生き永らへて居るのだ。お茶も無い、又酒も無い。まあ稗のお粥でも炊いて御返禮をしよう」と。三成は此の言葉を聞いて心の内に怨み悪んだ。是より前に、行長は、清正が順天を救つて呉れたのを有り難く思ひ、遺恨を捨て、仲良くしようと考えた。併し清正は曰ふのに「自分もさうありたいと思つては居る。併し君は三成と惡意だから駄目だ」と言つた。これからお互ひに讎とすること益々深まつて行つた。是に於いて、諸將は連れ立つて、伏見に來り、秀賴に面會した。大老・中老の諸公は色々勞を慰め、それが濟むと引き上げて、皆、自らの領分へ行かせることにした。併し諸將は世嗣の君がまだ幼く、又國內が物騒がしかつたので、強ひて自分の休息を求めようとはしないで、翌年を待つて立ち去ることにした。翌年になると、大老や奉行は征韓諸將の手柄を評議し、義弘には公田の内薩摩に在る分、四萬石を與へた。清正・行長以下賞を賜はるること各々差等があつた。

語釋 公田(お上の田地)

日本外史新釋 卷十七

德川氏前記

豐臣氏下

慶長四年正月十日、前田利家奉^{シテ}秀賴、徙^リ大坂、抱坐^ニ正廳。德川公以下、牧伯將吏來^{ツテ}謁^ス之。德川公還^{ツテ}居伏見、第^ニ視^ル事。五奉行更^{ハシテ}遣^{ハシ}兵守^ル城。皆如^ク秀吉遺命。而德川氏威權獨^リ熾。利家謂^ヒ其侮^レ己、乃忿^{シテ}恚^ス。欲^シ罷^メ就^メ國。細川忠興爲^リ利家戚屬、引^{イテ}遺命^ヲ諫^シ止^ス之。是月二十一日、大老奉行、連署^{シテ}誚^メ德川公曰、足下、行事多^シ可疑^フ者。背^キ太閤遺令、與^ニ伊達、福島、蜂須賀、三家、私^ニ結^ブ婚姻。是^レ欲^ス何^カ爲^ス也。宜^{シク}解^キ政^ヲ就^メ國。又^テ誚^ル三家。三家不服。三家與^ニ黑田、淺野、池田、藤堂、細川、京極、有馬、金森、山岡、諸將、皆^レ嫉^ミ石田三成、爭^{ツテ}附^キ德川氏、仇^ニ視^ス

他、侯伯。三中老議曰「遺命所謂居間和解者、在於此。」二月、乃請大老奉行尋盟于伏見。

訓讀 慶長四年正月十日、前田利家、秀頼を奉じて大坂に徙り、抱いて正廳に坐す。徳川公以下の牧伯・將吏來つて之に謁す。徳川公還つて伏見の第に居つて事を視る。五奉行更兵を遣はして城を守る。皆秀吉の遺命の如くす。而して徳川氏の威權獨り熾なり。利家其己を侮ると謂ひ、乃ち忿恚して、罷めて國に就かんと欲す。細川忠興、利家の戚屬たり。遺命を引いて之を諫止す。是の月二十一日、大老・奉行、連署して徳川公を詣めて曰く「足下の行事疑ふべきもの多し。太閤の遺令に背き、伊達・福島・蜂須賀の三家と、私に婚姻を結ぶ。是れ何をか爲さんと欲する。宜しく政を解き國に就くべし」と。又三家を詰る。三家服せず。三家、黒田・淺野・池田・藤堂・細川・京極・有馬・金森・山岡の諸將と、皆石田三成を嫉み、争つて徳川氏に付き、他の侯伯を仇視す。三中老、議して曰く「遺命に所謂、間に居つて和解せよとは此に在り」と。二月、乃ち大老・奉行に請うて、盟を伏見に尋む。

通釋 慶長四年正月十日、前田利家は秀頼を奉じて大坂に移り、之を抱きかへて大書院に坐した。徳川公以下の大名諸役人が入つて来てお目通りをした。徳川公は伏見の邸に戻つて政事を見た。五奉行は順番に兵を出して伏見城を守つた。すべて秀吉の遺命通りにした。所が徳川氏の威權は特に盛となつた。利家は家康が自分を侮つてゐると想像して腹を立て、後見の役を止めて本國に歸らうとした。細川忠興は利家の縁家であつた。秀吉の遺命を引いて之を諫め止めた。この月の二十一日に、大老・奉行が連名で徳川氏を責めて曰ふには「貴公の行動には疑はしい所が澤山ある。太閤の遺命に反して勝手にこつそり伊達・福島・蜂須賀の三家と縁組をした。是は何ういふ積りであるか。早速政權を引き渡して歸さるゝが宜しい」と。又三家をも責め問うた。三家はそれに服しなかつた。この三家は、黒田・淺野・池田・藤堂・細川・京極・有馬・金森・山岡の諸將と共に、皆石田三成を憎んで、我れ勝ちに徳川氏に付き、他の大名達を仇敵視してゐた。三中老が相談して曰ふには「御遺言に、間に立つて仲裁せよとあるのは、このことだ」と。そこで二月、大老と奉行に、伏見で再び盟を温めるやうに頼んだ。

語釋 正廳(表座敷、大座敷といふ意味から、正式に政治を取る場所を指す。當時の大書院。)

利家有疾。加藤清正與細川忠興、淺野左京大夫、勸利家與疾赴伏見。三月、徳川公亦往大坂。利家病甚、扶而起、泣囑之曰「吾將旦夕入地。願公盡心以輔嗣君。」徳川公曰「諾。」利家次子利政、欲刺徳川公。爲其兄利長所止。三成等會議于小西行長宅。曰「内府專橫、蔑視嗣君。諸老所共憤也。不可不速除之。」行長因建襲擊之策。前田玄以素通款徳川氏。故發異議沮之。三成又欲以火器襲之。伏見第延細川忠興告謀。忠興復沮止之。走告徳川氏。教之徙居于向島。行長曰「諸公明文墨而瞞兵機。乃爲豎

子所誑。大谷吉隆聞諸奉行之謀。謂增田長盛曰。吾視諸公所爲。不務利嗣君。而專害内府。内府苟貳於嗣君。宜族其罪。著而討之。天下誰有棄此歸彼者哉。今自我開。彼則有辭。是不獨自禍。乃禍嗣君也。長盛以告三成。三成弗肯。

訓讀

利家、疾有り。加藤清正、細川忠興・淺野左京大夫と、利家に勸め、疾を興して伏見に赴かしむ。三月、徳川公も亦大坂に往く。利家病甚し。扶けられて起き、泣いて之に囑して曰く「吾れ將に旦夕地に入らんとす。願はくは公、心を盡し以て嗣君を輔けよ」と。徳川公曰く「諾」と。利家の次子利政、徳川公を刺さんと欲す。其の兄利長の止むる所と爲る。三成等、小西行長の宅に會議して曰く「内府專横、嗣君を蔑視す。諸老の共に憤る所なり。速に之を除かざるべからず」と。行長、因つて襲撃の策を建つ。前田玄以素より歎を徳川氏に通す。故に異議を發して之を沮む。三成又火器を以て之を伏見の第に襲はんと欲す。細川忠興を延いて謀を告ぐ。忠興復之を沮止し、走つて徳川氏に告げ、之をして向島に徙り居らしむ。行長曰く「諸公、文墨に明にして兵機に暗し。乃ち豎子の誑す所と爲る」と。大谷吉隆、諸奉行の謀を聞き、増田長盛に謂つて曰く「吾れ諸公の爲す所を視るに、嗣君を利するを務めずして、専ら内府を害す。内府苟も嗣君に貳あらば、宜しく其の罪の著はるるを俟つて之を討つべし。天下誰か此を棄て、彼に歸する者あらんや。今、我より讐を開かば、彼れ則ち辭あらん。是れ獨り自ら禍するのみならず、乃ち嗣君に禍するなり」と。長盛以て三成に告ぐ。三成肯んぜず。利家は丁度其の時病氣であつた。加藤清正は、細川忠興・淺野左京大夫と共に利家に勸め、疾をおして

興で伏見に行かせた。三月、徳川公も大坂に向出した。利家は病氣が重態に陥つた。人に扶けられて起き上り、涙を流して家康に頼んで曰ふには「私はもう今日明日に息を引き取ると思ふ。貴公どうぞ一心に世繼の君を助けて下されよ」と。家康は「承知致した」と曰つた。利家の次男の利政が徳川公を刺さうとした。併し兄の利長に止められた。三成等は小西行長の家で會議をして曰ふには「内府はわが儘勝手世繼の君を無いがしるにしてゐる。諸大老は皆腹を立てゝゐるのだ。早くやつつけて終はねばならぬ」と。行長はそれで家康を急ぎ攻め殺す策をたてた。所が前田玄以は以前から徳川氏に内應してゐた。異議を出して邪魔立てをした。三成は又火繩銃で伏見の邸を不意討したと思つた。細川忠興を近づけて謀を話した。忠興もやはりそれをさへきりとめて、直ぐ様それを徳川氏に知らせ、向島に移るやうにさせた。行長が曰ふには「諸公は文事には達してゐられるが、どうも軍の機略に通じない。叩つて奴家康に欺されてゐるのだ」と。大谷吉隆は諸奉行の謀を聞き、増田長盛に向つて曰ふには「私は諸公の爲され方を見ると、世繼の君のお爲めになるやうにしないで、内府をとつちめよう」と許りしてゐる。一體内府が若君に二心を抱いてゐるといふなら、その罪の證據が明かに見えて來た時、討つが宜しい。さうなれば、正しいこちらを棄て、誰が徳川方に屬くなど、天下のどこにあらう。今こちらから仲違ひをしかけたなら、向ふには(無實の罪といふ)言ひ草が出来る。それでは諸君御自分方の損になる許りでなく、却つて世繼の君に禍を及ぼすことになる」と。長盛はそれを三成に話した。三成はその言ふことをきかなかつた。

語釋 内府(内大臣) ○向島(大坂)

文祿之役、三成・長盛・吉隆在朝鮮。聞淺野・黑田來就議軍事。兩人方圍碁、不顧三成等。三成等怒而出。兩人收局、問侍者曰、「三奉行何不來。」侍者告故。乃使人呼返之。三成等不肯。爲惡言而去。終惡兩人於秀吉。兩人之子深銜之。於是與加藤清正・加藤嘉明・福島正則・池田輝政・細川忠興、連署罪狀三成、請誅之。德川公不許。乃如大坂、請於利家。利家疾篤。三成方視之。七將不得達。乃各自治兵、欲擊殺之。未發也。

訓讀 文祿の役に、三成・長盛・吉隆朝鮮に在り。淺野・黑田來ると聞き、就いて軍事を議せんとす。兩人方に碁を圍んで三成等を顧みず。三成等怒つて出づ。兩人局を收め、侍者に問うて曰く、「三奉行何ぞ來らざる」と。侍者故を告ぐ。乃ち人をして之を呼び返さしむ。三成等肯んぜず。惡言を爲して去り、終に兩人を秀吉に惡す。兩人之子深く之を銜む。是に於て、加藤清正・加藤嘉明・福島正則・池田輝政・細川忠興と、連署して三成を罪狀し、之を誅せんと請ふ。徳川公許さず。乃ち大坂に如き利家に請ふ。利家、疾篤し。三成方に之を視る。七將達するを得ず。乃ち各自自ら兵を治めて之を擊殺せんと欲す。未だ發せず。

通釋 文祿の役で、三成・長盛・吉隆は朝鮮に居た。淺野と黒田が來たと聞いて、軍事の相談にその宿所に行つた。所が二人は丁度碁を打つてゐて、三成達を構はなかつた。三成達は腹を立て、歸つて終つた。所で二人が碁盤を仕舞ひ、侍者に「三奉行はどうして來ないのか」ときいた。侍者が事の次第を話した。人をやつて呼び返させた。三成らは承知しなかつた。惡口を吐いて歸り、終には二人を秀吉に惡く言つた。そこでこの二人の伴(淺野幸長・黒田長政)までそれを怨んでゐた。この時になつて、加藤清正・加藤嘉明・福島正則・池田輝政・細川忠興と連名し、三成の罪狀を並べ立て、誅殺のことを大老に願ひ出た。徳川公はそれを許さなかつた。そこで大坂に行つて利家に頼んだ。利家は病氣が重態であつた。丁度三成が來て看病してゐた。それで七將はたうとう達ふことが出來なかつた。そこで銘々に軍隊を整へて三成を攻め殺さうとした。併しまだ兵を起すに至らなかつた。

閏月三日、利家疾革、奮呼曰、「天下洵洵、吾不目嗣君成立而死。死不瞑矣。」遂卒。衆推其長子利長代之。列四大老之下。七將曰、「大納言既沒、三成必出。」欲要擊之。或走告三成。毛利・浮田・島津・上杉・佐竹、五家皆善於三成。佐竹義宣自伏見馳至、弔前田氏。因見三成于浮田氏。曰、「寧自歸於内府。」攜詣徳川公。徳川公納之。七將聞之、憤惋。追至伏見。或說徳川公勿除三成。徳川公大悟。遂諭七將弭兵。七將不得已聽之。又諭三成解政權、就封澤山。七將欲要擊之。見徳川氏兵護送乃止。上杉景勝與三成通謀。約埃明歲東西舉兵、以討徳川氏。四月、太閤廟成。詔賜號豐國明神。

訓讀 閏月三日、利家、疾革なり。奮呼して曰く「天下洵洵たり。吾れ嗣君の成立を目せずして死す。死するも瞑せず」と。遂に卒す。衆、其の長子利長を推して之に代らしめ、四大老の下に列す。七將曰く「大納言既に没す。三成必ず出でん」と。之を要撃せんと欲す。或ひと走つて三成に告ぐ。毛利・浮田・島津・上杉・佐竹の五家、皆三成に善し。佐竹義宣、伏見より馳せ至り、前田氏を弔し、因つて三成を浮田氏に見て曰く「寧ろ自ら内府に歸せよ」と。携へて徳川公に詣る。徳川公之を納る。七將之を聞いて憤慨し、追うて伏見に至る。或ひと徳川公に説いて三成を除く勿らしむ。徳川公大に悟り、遂に七將に諭して兵を弭めしむ。七將已むを得ずして之を聽く。又三成に諭して政權を解き、封に澤山に就かしむ。七將之を要撃せんと欲す。徳川氏の兵の護送するを見て乃ち止む。上杉景勝、三成と謀を通じ、明歳を俟ちて、東西兵を擧げ、以て徳川氏を討たんと約す。四月太閤の廟成る。詔して、號を豊國明神と賜ふ。

通釋 閏月三日、利家の病氣が危篤になつた。利家は一生懸命に聲を出して曰ふには「天下はどよめき騒いでゐる。己は世繼の君の生ひ立ちを見ないで死んで行く。死んでも死に切れない」と。たうとう亡くなつた。皆はその長男の利長を推薦して父に代らせ、四大老の末に列せしめた。七將が曰ふには「大納言が最早死んで終つた。三成も必定出て来るだらう」と。そして待ち伏せして討ち取らうとした。或る人が走つて三成に知らせた。毛利・浮田・島津・上杉・佐竹の五家は、前から皆三成と仲が好かつた。佐竹義宣は伏見から駆けつけて前田氏に悔を述べ、それから浮田氏の邸で三成に會つて曰ふには「一つその内府の所に逃げ込め」と。そこで三成をつれて徳川公の所へ行つた。徳川公はそれを受け入れた。七將はそれをきいて口惜しがり、伏見まで追つかけて行つた。或る人が徳川公に、三成を殺させぬやうに言つた。徳川公は「自分が漁父の利を占める爲めに三成の存在

が必要であることに)はたと氣が付き、たうとう七將に諭して軍を止めさせた。七將は仕方なく承知した。徳川公はまた三成を諭して奉行の政權に關係することをやめ、澤山の領地に歸らせた。七將は又それを待ち伏せして討たうとした。徳川氏の軍隊が護送して行くのを見て、止めた。上杉景勝は三成と共謀し、明年になつたら、東西から兵をあげて徳川氏を討たうと約束した。四月、太閤の廟が落成した。詔を下して豊國明神と名を賜つた。自秀頼徙大坂、伏見城無主。五月、黒田長政、堀尾吉晴等、請徳川公入城。如太閤故事。六月、毛利・浮田以下外征、諸將皆謁歸。七月、前田・上杉・佐竹三家亦之國。徳川氏久不觀秀頼。頗有物議。淺野片桐等數、促之辭以疾。八月、乃往、遂留居西城。西城時爲秀頼嫡母淺野氏所居。於是淺野氏遜於京師。有流言、淺野彈正・大野治長・土方雄久、援前田氏以圖徳川氏。十月、放治長于下野、雄久于常陸、寅彈正于武藏、府中下令北伐前田氏。細川忠興爲謝之。徳川氏徵前田利長母爲質。十一月、徙之江戸。増田長盛・長束正家争之曰「遺令勿不告而交質。盍與諸老議」。弗肯。利長泣而奉命。是歲、徳川公加封細川忠興、堀尾吉晴各五萬石。

訓讀 秀頼大坂に徙りしより、伏見城に主なし。五月、黒田長政・堀尾吉晴等、徳川公の城に入つて太閤の故

事の如くせんことを請ふ。六月、毛利・浮田以下外征の諸將皆調歸す。七月、前田・上杉・佐竹の三家も亦國に之く。徳川氏久しく秀頼に觀せず。頗る物議あり。淺野・片桐等數々之を促す。辭するに疾を以てす。八月、乃ち往き、遂に留つて西城に居る。西城は時に秀頼の嫡母淺野氏の居る所たり。是に於て淺野氏京師に遜る。流言あり、淺野彈正・大野治長・土方雄久・前田氏を援けて以て徳川氏を圖ると。十月、治長を下野に雄久を常陸に放ち、彈正を武藏の府中に置き、令を下して北前田氏を伐つ。細川忠興、爲めに之を謝す。徳川氏、前田利長の母を徴して質と爲す。十一月、之を江戸に徙す。増田長盛・長束正家之を争うて曰く「遺令に、告げずして質を交ふる勿れと。蓋ぞ諸老と議せざる」と。肯んせず。利長泣いて令を奉ず。是の歳、徳川公、封を細川忠興・堀尾吉晴に加ふること各々五萬石なり。

通釋 秀頼が大坂城に移つてから、伏見城には主人がなかつた。五月、黒田長政・堀尾吉晴等が、徳川公が、太閤時代のしきたりの様に伏見城に居ることを請うた。六月、毛利・浮田以下、朝鮮征伐に行つた諸將が、皆秀頼に拜謁しに歸國をした。七月、前田・上杉・佐竹の三家も本國に返つた。徳川氏は長らく秀頼に參觀しなかつた。それが大層評判になつた。淺野・片桐等が度々催促をした。所が病氣だと言ひ立て、斷つた。八月になると出かけて来て、そのまゝ、西の丸に留つてゐた。西の丸は當時、秀頼の嫡母淺野氏の居つた所である。徳川公が留つてゐるので、淺野氏は京都に隱居をした。この時分、流言があつて、淺野彈正・大野治長・土方雄久の三人が前田氏に加擔して徳川氏を滅ぼさうとしてゐるといふことであつた。十月、治長を下野に、雄久を常陸に追放し、彈正は武藏の府中に置き、前田氏を北伐する命令を下した。細川忠興が前田氏の爲めに詫びをした。徳川氏は前田利長の母を呼びよせて人質とし、十一月にそれを江戸に移した。増田長盛と長束正家が抗議をして曰ふには

「太閤の御遺言に、無斷で人質をやり取りしてはならぬとある。何故諸大老と相談をされないのか」と。徳川公は聞き入れようとしなかつた。利長は泣いて命に従つた。是の歳、徳川公は細川忠興と堀尾吉晴に夫々五萬石を加増した。

語釋 嫡母(庶子より父の正妻を指していふ) ○府中(この時淺野氏の領地)

五年春、徳川公戒上杉景勝西上。答曰「我受太閤遺旨、鎮守東陲。何受内府令也。乃數其背盟十罪。徳川公大怒、議東伐上杉氏。夏、以其義女妻黒田長政、留兵於伏見。而自將諸軍東下。三成欲起兵乘其後。會大谷吉隆自其邑敦賀會師。三成使人要之、告以其謀。吉隆極言其非計。三成不肯。吉隆乃訣去、低回久之曰「吾與治部共仕太閤、舊相好也。今知其事不克棄之非義。乃還。三成大喜、與長束正家皆赴大坂。見増田長盛定議。秋、遂移書遠近曰「内府有罪。嗣君命討之。苟念太閤恩誼者、宜來戮力。毛利輝元以下、侯伯來會者四十餘人。時東西諸侯妻子皆在大坂。三成收之城中、使輝元・長盛守大坂。浮田秀家・小早川秀秋・島津義弘等將四萬人攻伏見城。小野木重勝等將二萬人攻田邊城。毛利秀元與長束正家・僧惠瓊將三萬人攻阿濃

津京極高次等將二萬人徇北陸

五年春、徳川公、上杉景勝に西上を戒む。答へて曰く「我れ太閤の遺旨を受け、東陲を鎮守す。何ぞ内府の令を受けんや」と。乃ち其の盟に背く十罪を數む。徳川公大に怒り、東上杉氏を伐たんと議す。夏、其の義女を以て黒田長政に妻はせ、兵を伏見に留め、而して自ら諸軍に將として東下す。三成兵を起して其の後に乘せんと欲す。會々大谷吉隆、其の邑敦賀より師に會す。三成人をして之を要せしめ、告ぐるに其の謀を以てす。吉隆其の非計を極言す。三成肯んせず。吉隆乃ち訣し去り、低回すること久しくして曰く「吾れ治部と共に太閤に仕ふ。舊相好し。今、其の事克たざるを知つて、之を棄つるは義に非ず」と。乃ち還る。三成大に喜び、長束正家と皆大坂に赴き、増田長盛を見て議を定む。秋、遂に書を遠近に移して曰く「内府罪有り。嗣君命じて之を討たしむ。苟も太閤の恩誼を念ふ者は、宜しく來つて力を戮すべし」と。毛利輝元以下の侯伯、來り會する者四十餘人。時に東西諸侯の妻子、皆大坂に在り。三成、之を城中に收め、輝元・長盛をして大坂を守らしむ。浮田秀家・小早川秀秋・島津義弘等、四萬人に將として伏見城を攻め、小野木重勝等二萬人に將として田邊城を攻め、毛利秀元、長束正家・僧惠瓊と、三萬人に將として阿濃津を攻め、京極高次等二萬人に將として北陸を徇へしむ。

五年春、徳川公は上杉景勝に西上するやうに注意した。すると景勝が答へて曰ふには「余は太閤の遺旨を受けて東邊を鎮護してある。内府の命令などを聞いてたまるか」と。そこで家康が盟に背いた十ヶ條の罪を責めた。徳川公は非常に腹を立て上杉氏を東伐しようとして議した。夏、その義女を黒田長政に嫁付け、伏見に軍隊を

殘しておいて、自身諸軍を率ゐて東下した。三成は兵を起して其の留守につけ込まうとした。丁度その時大谷隆が領地の敦賀から徳川氏の軍に加勢する爲め出て來た。三成は人をやつて彼を待ちうけ、自分の謀を話させた。吉隆は言を極めてその計の拙いことを説いた。併し三成は承知しなかつた。そこで吉隆は別れて出たが、やや暫し行きつ戻りつした後、曰ふのに「俺は治部と一緒に太閤へ仕へた。元からの仲善しだ。今事の成功せぬのが分つてゐるからといつて彼を棄てるのは道でない」と。そこで立ち戻つて來た。三成は非常に喜び、長束正家と皆で大阪に行き、増田長盛に會つて相談を定めた。秋、いよく遠近の諸侯に手紙を廻して曰ふには「内府は罪を犯してゐる故、お世繼の君が彼を討つやうに命ぜられた。苟且にも太閤の御恩誼を忘れぬものは、早速出て來て協力さるゝが宜しい」と。毛利輝元以下の大名の集り來たもの四十餘人。當時東西の諸大名の妻子は皆大阪に居つた。三成はそれらを城中に捕へ、輝元と長盛をして大阪を守らせた。浮田秀家・小早川秀秋・島津義弘等は四萬人を率ゐて伏見城を攻め、小野木重勝等は二萬人の將となつて田邊城を攻め、毛利秀元は長束正家・僧惠瓊と共に三萬人を率ゐて阿濃津を攻め、京極高次等は二萬人を率ゐて北陸を威服させることになつた。

田邊(後)

吉隆在敦賀。招北莊・大正寺・小松・三城下之。前田利長與弟利政、爲徳川氏攻拔。大正寺遂欲攻北莊。北莊乞援於敦賀。吉隆乃自將赴援。或曰堀尾氏兵守府中而在。我後不先取之。則進退皆難。吉隆曰北莊陷。則小松孤立矣。至若府中。則不必取也。

亦不可取也。即可取也、不可不分兵守之。分則兵寡、以寡對衆、是爲難耳。且彼必不敢要我矣。是我使敵守城也。我既卻北兵、以存諸城、則彼不攻而下矣。即夜五更、馳至北莊。利長、姊夫中川宗伴在京師。將赴北陸。吉隆要而執之、令爲書、給利長曰、「内府西上將士多叛之、大坂兵逆擊之美濃、走之、遂發舟師、將取加賀。公宜早爲之備。」利長得書、疑懼、引兵卻。府中果遂降於吉隆。會高次等至、合兵復大正寺、遂定越前、置守而南。

訓讀 吉隆敦賀に在り。北莊・大正寺・小松の三城を招いて之を下す。前田利長、弟利政と、徳川氏の爲に攻めて大正寺を抜き、遂に北莊を攻めんと欲す。北莊、援を敦賀に乞ふ。吉隆乃ち自ら將として赴き援く。或ひと曰く「堀尾氏の兵、府中を守つて我が後に在り。先づ之を取らずんば、則ち進退皆難からん」と。吉隆曰く「北莊陥らば、則ち小松孤立す。府中の若きに至つては、則ち必ずしも取らざるなり。亦取るべからざるなり。即し取るべくば、兵を分つて之を守らざるべからず。分てば則ち兵寡し。寡を以て衆に對す、是れ難しと爲すのみ。且つ彼れ必ず敢て我を要せず。是れ我れ敵をして城を守らしむるなり。我れ既に北兵を卻けて以て諸城を存すれば、則ち彼れ攻めずして下らん」と。即夜五更、馳せて北莊に至る。利長の姊夫中川宗伴京師に在り。將に北陸に赴かんとなす。吉隆要して之を執へ、書を爲り利長を給かしめて曰く「内府西上將士多く之に叛き、大坂の

兵、之を美濃に遊へ撃つて之を走らす。遂に舟師を發し、將に加賀を取らんとす。公、宜しく早く之が備を爲すべし」と。利長、書を得て疑懼し、兵を引いて卻く。府中果して遂に吉隆に降る。會高次等至り、兵を合せて大正寺に復り、遂に越前を定め、守を置いて南す。

通釋 吉隆は敦賀に居つて、北莊・大正寺・小松の三城を誘つて降服せしめた。前田利長は弟利政と共に、徳川氏の爲めに大正寺を攻め落し、その足で北莊を攻めようと思つた。北莊は敦賀に援助を求めた。そこで吉隆は自身軍隊を率ゐて援けに行つた。或る人が彼に曰ふには「堀尾氏の兵が府中を守つて我が背後にゐます。先きにこつちを取らなければ進むにも退くにも困ることになります」と。吉隆が曰ふには「北莊が落城したら小松が孤立して終ふから放つておけぬ。府中など取る必要はない。亦取ることも出来まい。もし取り得るとしても兵を分けてそれを守らねばならぬ。兵を分ければ味方が少くなる。小勢で多勢に對することゝなる。だから戦がしにくくなる。それに府中の兵はきつと我が軍を待ち伏せして撃つことはせぬだらう。かうなると、我が軍は、敵に城を預けて守らせておくやうなものだ。我が軍が北陸兵を追ひはらつて諸城を無事に保つてゐるなら、府中などは攻めずとも降参して来る」と。その晩午前四時頃に馬をとばせて北莊に行つた。利長の姊の夫中川宗伴は京都に居つた。丁度北陸に行かうとしてゐた。吉隆は待ち伏せしてつかまへ、次の書面を書かせて利長を欺かせて曰ふには「内府が西上して来た。その將士は多數彼にそむき大坂の兵が美濃まで出かけて關東軍を討ち退けた。遂に大阪方は舟軍を出して加賀を占領しようとしてゐる。貴方は早くその準備を爲されるがよい」と。利長はその手紙を読み疑ひおそれて退却した。すると府中は案の定吉隆に降服した。そこへ丁度高次等もやつて来たので、兵を合せて大正寺に歸り、つひに越前を平定し、守兵を置いて南に向つた。

語釋 大正寺(賀) ○小松(狭) ○府中(前)

吉隆教三成招織田秀信。秀信以岐阜降。於是三成導諸將至大垣。秀家等拔伏見來會焉。德川公至下野。聞變不爲驚。然以諸將質在大坂。頗疑之。使人問其去就。諸將皆奮欲擊三成。乃誓曰。公苟不渝太閤約。善視嗣君。則僕等力戰必梟治部。諸將乃先發。首攻岐阜。下之。三成與島津義弘援之。不及。東軍陣赤坂。秀家欲夜襲之。三成弗聽。秀元拔阿濃津。來陣南宮山。秀秋來陣松尾山。

訓讀 吉隆、三成をして織田秀信を招かしむ。秀信岐阜を以て降る。是に於て、三成諸將を導いて大垣に至る。秀家等伏見を抜いて來り會す。德川公下野に至り、變を聞いて爲めに驚かず。然れども諸將の質の大坂に在るを以て頗る之を疑ひ、人をして其の去就を問はしむ。諸將皆奮つて三成を撃たんと欲す。乃ち誓つて曰く「公、苟も太閤の約を渝へず、善く嗣君を視ば、則ち僕等力戦して必ず治部を梟せん」と。諸將乃ち先づ發し、首に岐阜を攻めて之を下す。三成、島津義弘と之を援く。及ばず。東軍、赤坂に陣す。秀家夜之を襲はんと欲す。三成弗聽かず。秀元、阿濃津を抜き、來つて南宮山に陣す。秀秋來つて松尾山に陣す。

通釋 吉隆は三成に織田秀信を招かせた。秀信は岐阜を以て降参した。そこで三成は諸將の先導をして大垣まで行つた。秀家等は伏見を陥れて、そこへ集つた。德川公は下野まで行つた時、變事を聞いたが別に驚きもしなかつた。併し、諸將の質が大坂に居るので、餘程彼等の心事を疑ひ、他人をしてその去就を聞かせた。所が諸將は皆元氣よく、三成を撃たうと賛成した。そこで一同約束して曰ふは「もし公にして太閤の命を變へず、善く世嗣の君の世話をされるといふならば、我々は奮闘してきつと治部を梟首にして見せます」と。そこで諸將は先發し、最初岐阜を攻めて陥れた。三成は島津義弘と共に援けに行つた。併し間に合はなかつた。東軍は赤坂に陣取つてゐた。秀家がそれを夜襲しようとした。併し三成がきかなかつた。秀元は阿濃津を陥れ、南宮山まで來て陣取つた。秀秋は松尾山に來て陣取つた。

語釋 赤坂・南宮山・松尾山(濃)

初秀頼與生母淀君居大坂。而嫡母淺野氏稱北廳。居京師。庶母京極氏稱松城君。居大津。北廳之兄曰木下家定。家定子爲秀秋。及兵起。北廳使人戒秀秋曰。内府不利。秀頼則力拒之。非然則勿負之。秀秋遂送款於江戶。松城君之弟爲京極高次。高次受封大津。與德川氏嗣子並娶淀君之妹。亦送款江戶。及岐阜陷。吉隆召北陸諸將會大垣。高次後發。馳歸大津。舉兵應德川氏。立花宗茂筑紫廣門赴大垣。比至石部。聞之。返陣。勢多會。毛利秀包等來自大坂。則合兵攻高次。淀君遣二女。使諭松城

君及高次夫妻不肯。宗茂等攻奪其郭。而城未下也。

訓讀 初め秀頼、生母淀君と大坂に居り、而して嫡母淺野氏、北廳と稱して京師に居り、庶母京極氏、松城君と稱して大津に居る。北廳の兄を木下家定と曰ひ、家定の子を秀秋と爲す。兵起るに及び、北廳人をして秀秋を戒めしめて曰く「内府、秀頼に不利ならば、則ち力めて之を拒げ。然るに非ずば則ち之に負く勿れ」と。秀秋、遂に歎を江戸に送る。松城君の弟を京極高次と爲す。高次、封を大津に受け、徳川氏の嗣子と竝に淀君の妹を娶る。亦歎を江戸に送る。岐阜陥るに及び、吉隆、北陸の諸將を召して大垣に會せしむ。高次後れて發し、馳せて大津に歸り、兵を擧げて徳川氏に應ず。立花宗茂・筑紫廣門大垣に赴き、石部に至る比る、之を聞き、返つて勢多に陣す。會々毛利秀包等大坂より來る。則ち兵を合せて高次を攻む。淀君二女を遣はして、松城君及び高次夫妻に諭さしむ。肯んぜず。宗茂等、攻めて其郭を奪ふ。而して城未だ下らざるなり。

通釋 初め秀頼は生母の淀君と大坂に居り嫡母の淺野氏は北廳と稱して京都に居り、庶母の京極氏は松城君といつて大津にゐた。北廳の兄を木下家定と曰ひ、家定の子が秀秋である。此の度の兵亂が起つたに就て、北廳は人をやつて兄の子の秀秋に注意を與へて曰ふには「内府が秀頼に對して不利を致すやうならば、力を盡して防ぐがよい。さうでない場合には内府に背くやうなことをなさるな」と。秀秋はその言によつて、遂に江戸に内應した。松城君の弟で京極高次である。高次は大津に領地を持ち、徳川氏の嗣子(秀忠)と同じく、共に淀君の妹を娶つてゐた。これも亦江戸に内通してゐた。岐阜が陥ると、大谷吉隆は北陸の諸將を大垣に集合させた。高次は後れて出發したが、大津に馳せ歸つて、全軍をつれて徳川氏に應じた。立花宗茂と筑紫廣門は大

坂に行かうとして、石部につく頃、高次が徳川に味方したことを聞いて勢多に戻つて陣取つた。丁度其の時、秀包等が大坂から來た。それで兵を合せて高次を攻めた。淀君は二人の婦人をやつて、松城君と、高次夫婦を諭させた。併し承知しなかつた。宗茂等は攻めて、城の外郭を占領した。けれども城はまだ落ちなかつた。

語釋 庶母(父の妾を) ○石部(近江) ○二女(考藏主、女)

徳川公分兵爲二、自將一軍由海道、使其嗣子秀忠將一軍由山道、命彈正少弼之。關西從風而靡、爭先送歎。山道之軍進至小室、招真田昌幸。初昌幸赴會津、至大伏而大坂檄至。長子信幸曰「吾受關東殊遇、請東矣。西軍即敗吾爲父弟乞命。」幸村曰「太閤舊誼不可背也。寧西而死、不東而生。」昌幸曰「欲東者東、欲西者西。而吾與西者也。」乃遣信幸之江戸、而自與幸村、以兵三千歸上田。東軍三萬陣于小室。信幸從在其軍、以書招其父弟不肯。居四日、東軍來攻上田。城帶川。昌幸壅其上流、伏兵險阻、出戰伴走。東軍爭追、陷伏而亂。乃決其壅、水大至。東軍不能繼。幸村以突騎蹙之、遂大敗其軍、使不得進者三日。其海道軍、亦遲回數日。以其久不至、乃獨進陣于赤阪。秀家與三成計、亦設伏而挑戰、敗其前軍而退。

訓讀 徳川公兵を分ちて二と爲し、自ら一軍に將として海道由りし、其嗣子秀忠をして一軍に將として山道由りせしめ、彈正少弼に命じて之を助けしむ。關西、風に從つて靡き、先を争つて歎を送る。山道の軍進んで小室に至り、眞田昌幸を招く。初め昌幸、會津に赴き、犬伏に至つて、大坂の檄至る。長子信幸曰く「吾れ關東の殊遇を受く。請ふ東せん。西軍即し敗るれば、吾れ父弟の爲に命を乞はん」と。幸村曰く、「大關の舊誼、背くべからざるなり。寧ろ西して死すとも、東して生きじ」と。昌幸曰く「東せんと欲するものは東せよ。西せんと欲するものは西せよ。而して吾は西に興する者なり」と。乃ち信幸を遣はして江戸に之かきしめ、而して自ら幸村と兵三千を以て上田に歸る。東軍三萬小室に陣す。信幸從つて其軍に在り。書を以て其父弟を招く。肯せず。居ること四日、東軍來つて上田を攻む。城、川を帶ぶ。昌幸其上流を壅ぎ、兵を險阻に伏せ、出で戦つて伴り走る。東軍争ひ追ひ、伏に陥つて亂る。乃ち其壅を決す。水大に至り東軍繼ぐ能はず。幸村、突騎を以て之に蹙り、遂に大に其軍を敗り、進むを得ざらしむるもの三日。其海道の軍之を疾ち亦退回すること數日。其久しく至らざるを以て、乃ち獨り進んで赤阪に陣す。秀家、三成と計り、亦伏を設けて、戦を挑み、其前軍を敗つて退く。

通釋 徳川公は兵を分けて二隊とし、自身その一隊を率ゐて東海道から進み、嗣子の秀忠に他の一隊を率ゐさせて中山道を進ませ、彈正少弼に命じてそれを助けさせた。關以西の諸大名は勢に壓されて一齊に關東軍に靡き、我れ勝ちに好を通じた。山道の軍は小室まで進み至り、眞田昌幸を招いた。これより前、昌幸は會津に向ふ途中、犬伏まで來ると大坂からの三成の檄文を手にした。長男の信幸が曰ふには「私は關東の特別な待遇を受けてゐます。私は關東に味方しませう。もし西軍が敗れたら、私はお父さんと弟の爲め命乞ひを致しませう」と。

幸村が曰ふには「大關の古い恩義に背いてはならぬ。たとひ既に味方して死なうとも、東に附いて生き長らへ度くはない」と。昌幸が曰ふには「東に附き度い者は東に附け。西に附き度いものは西に附け。だが私は西に味方する者ぢや」と。そこで信幸を江戸に行かせ、そして自分は幸村と一緒に、三千の兵をつれて上田に歸つた。東軍三萬人が小室に陣取つてゐた。信幸は從つてその軍中にゐた。手紙をやつて父と弟とを招いた。二人は勿論承知しなかつた。上田に來て四日経つた。東軍(中山道軍)が上田を攻めて來た。城はまはりに川が流れてゐた。昌幸はその上流をふさぎ、險阻な所に伏兵をおいて、城から出て戦ひ、わざと敗けて逃げた。東軍は矢鏢に追ひかけ、伏兵に陥つて亂れた。そこでその壅を切り放つた。水はどつと流れて、東軍は軍隊を續けることが出来なくなつた。幸村は襲撃騎をつれて追ひつめ、遂に大に其の軍を破りて、三日の間といふもの、進むことの出來ぬやうにした。海道の軍は、それを待つてゐて又五六日も愚圖ついで遅くなつた。何時まで経つてもやつて來ないので、單獨に進んで赤阪に陣取つた。秀家は三成と相談し、又伏兵をおいて戦をしかけ、その前衛を打ち破つて退却した。

語釋 小室(信) ○犬伏(野) ○海道軍(即ち家康)

於是諸將大議決戰。秀家、吉隆欲固守大垣、以田邊、大津、兵島、津義、弘欲夜襲赤阪。三成恃其衆皆不聽。欲出戰于關原、夜赴南宮、請秀元夾擊東軍。秀元素通欸東軍、伴諾之。三成遂赴松尾、獎厲秀秋。秀秋已與東軍約爲內應、亦伴諾之。吉隆疑秀

秋有異、以其兵陣松尾山下。吉隆有惡疾、以綃蔽面、輕服坐轎、戒其左右曰、「及敗速斬我頭。」且日、兩軍大戰關原。自辰至未、東軍數卻、而秀元秀秋皆觀望不戰。東兵窪島某馳白德川公曰、「秀秋似背約、請更爲計。」德川公驚曰、「我悔爲小兒所賣。」使窪島向松尾山發礮促之。

訓讀 是に於て、諸將大に戰を決せんと議す。秀家・吉隆、固く大垣を守つて以て田邊・大津の兵を俟たんと欲す。島津義弘、夜赤坂を襲はんと欲す。三成其の衆を恃んで皆聽かず。關原に出で戰はんと欲し、夜、南宮に起き、秀元に東軍を夾撃せんと請ふ。秀元素より歎を東軍に通ず。伴つて之を諾す。三成遂に松尾に赴き、秀秋を獎勵す。秀秋已に東軍と内應を爲さんと約す。亦伴つて之を諾す。吉隆、秀秋の異なるを疑ひ、其兵を以て松尾山の下に陣す。吉隆惡疾有り。綃を以て面を蔽ひ、輕服にて轎に坐し、其左右を戒めて曰く、「敗に及ばば、速に我が頭を斬れ」と。且日、兩軍大に關原に戰ふ。辰より未に至る。東軍數々卻く。而るに秀元・秀秋、皆觀望して戰はず。東兵窪島某馳せて德川公に白して曰く、「秀秋約に背くに似たり。請ふ更に計を爲せ」と。德川公驚いて曰く、「我れ小兒の賣る所と爲るを悔ゆ」と。窪島をして、松尾山に向ひ礮を發して之を促さしむ。**通釋** そこで諸將は大に決戰の計を相談した。秀家と吉隆は大垣を固守して、田邊・大津の兵の來るのを待たうと主張した。島津義弘は赤坂を夜襲しようとして主張した。併し三成は多勢を恃んでどの説にも承知しなかつた。關原に出で戰はうといふ希望を懷き、夜、南宮に行き、秀元に東軍を夾み撃ちにする様に頼んだ。所が秀元

は前から東軍に内通してゐた。僞つて承諾した。三成はそれから松尾にも行つて秀秋を激勵した。秀秋もすでに東軍に内應の約束がしてあつた。これも亦僞つて承諾した。吉隆は秀秋が異心を抱いてゐるらしいことを疑つて、自分の軍隊を松尾山の下に陣した。吉隆は癡病だつた。うす絹を顔にかけ、甲冑をつけずに身輕にして駕籠に坐り、左右の侍臣に戒めて曰ふには「戦が破れたら直ぐ俺の首を斬れ」と。その翌朝、兩軍は關原で激戦した。午前八時から午後二時まで續いた。そして東軍は度々退却した。而るに秀元・秀秋は皆形勢を眺めて戰はなかつた。東兵の窪島某は馬をとばせて德川公に知らせして曰ふには「秀秋は約束に背く様に見えます。どうか計畫を變更さるゝやう」と。德川公は驚いて曰ふには「己は小僧に欺されて残念だ」と。窪島をして秀秋の陣のある松尾山に向つて大砲を放つて催促させた。

黒田長政亦使人責秀秋。秀秋乃以兵八千、銃手六百、下山擊吉隆。吉隆怒呼曰、「豎子背恩忘義、不可舍也。」以六百入直衝其麾下。戶田重政平塚爲廣、助吉隆大破秀秋。斬東軍監使奥平貞治。而脇坂、朽木、小川、赤座等皆應秀秋。與東將藤堂高虎、織田長孝等三面逼之。重政爲廣皆戰死。吉隆隊將湯淺五介退告之。吉隆曰、「吾可以死矣。勿使敵傳吾元。」遂自殺。五介劉之、使侍臣某藏之泥中。而駢冒高虎陣死。吉隆二子、吉胤、吉之、姪賴、皆力戰。返見空轎、相泣欲死。從者諫之。乃走欲守敦賀。

走る。其將長河内某之に死す。秀秋、義弘に薄る。義弘、撃つて之を走らせて曰く「吾れ敗ると雖も肯て卻き走らす」と。殘兵五百を以て東軍に薄つて南す。東軍爲めに動く。東將、井伊直政等追躡す。又撃つて之を走らす。敵衆尾して止まず。阿多盛淳、義弘に代つて死す。義弘、間を得て鱒尾嶺を踰えて去る。

通釋 東軍は秀秋の内應で、調子に乗つて一齊に進んだ。西軍は遂に大敗した。秀家は怒つて秀秋と勝負を決しようとした。明石守重が諫めて曰ふには「貴方は總司令官である。何でその様な詰らぬ人間の眞似をされるか」と。秀秋が曰ふには「余は不屈者と思ふのは秀秋許りではないのだ。輝元は自分で出て來ない。秀元もどつち付かすの態度である。萬事は知れてゐる。余は一死もつて太閤に報ゆるのみである」と。守重が曰ふには「たとひ諸將が残らず叛いても、貴方だけは是非領地に立てこもつて世繼の君を輔佐されねばなりません。犬死したとて致し方ありません」と。そこで秀家も逃げることにした。その將の長河内某がその際に討死した。秀秋は義弘に攻めよせた。義弘は彼を追ひ退けて曰ふには「己はたとひ敗け様とも、退却なんぞはしないぞ」と。殘兵五百をつれて、東軍に肉薄して南に進んだ。東軍はその爲めに動搖した。東將井伊直政等が後をつけた。又撃ち退けた。敵の軍勢は後をつけて止めない。阿多盛淳が義弘の身代りになつて死んだ。義弘はその際に鱒尾嶺を起えて逃げ去つた。

語釋 鱒尾嶺(江近)

三成走匿伊吹山、散從者曰「吾欲自大坂航赴薩摩以計再舉也。汝等宜伏匿以待」。時三成遂採拾充饑行四日、患泄。至石橋村、就所知農夫某、某舍匿之。或者戒某曰「聞子匿治部、今田中吉政在井口、索之甚急、事露、子必逮禍矣。農夫曰「無之」。三成隔障聞之、謂農夫曰「吾終不可脫。汝盍出告農夫使之遁走」。三成曰「吾病矣、不能寸歩」。恐累汝。汝第速自首。農夫乃之井口告吉政。吉政遣卒捕之。

訓讀 三成走つて伊吹山に匿れ、從者を散じて曰く「吾れ大坂より航し、薩摩に赴いて以て再舉を計らんと欲するなり。汝等、宜しく伏匿して以て時を待つべし」と。三成、遂に採拾して饑に充て、行くこと四日、泄を患ふ。石橋村に至り、知る所の農夫某に就く。某之を舍匿す。或者某を戒めて曰く「聞く子、治部を匿すと。今、田中吉政、井口に在つて之を索むること甚だ急なり。事露はるれば、子必ず禍に逮はん」と。農夫曰く「之なし」と。三成障を隔て、之を聞き、農夫に謂つて曰く「吾れ終に脱るべからず。汝盍ぞ出で、告げざる」と。農夫之をして遁れ走らしむ。三成曰く「吾れ病む。寸歩する能はず。恐らくは汝を累さん。汝、第だ速に自首せよ」と。農夫乃ち井口に之いて吉政に告ぐ。吉政、卒を遣はして之を捕ふ。

通釋 三成は逃走して伊吹山に隠れ、從者を解散して曰ふには「自分は大阪から舟に乗り、薩摩に行つて再舉を計らうと思つてゐる。お前達はどこにでも隠れて時を待つてゐてくれよ」と。三成は遂に食物もなくなり、木の實などを拾つて饑を凌ぎ、歩き行くこと四日にして下痢に罹つた。石橋村にまで行つて、知合の農夫某の家に頼つた。某は三成をかくまつた。或者者がその農夫に戒めて曰ふには「聞けばお前は治部をかくまつてゐるといふ話だ。今田中吉政が井口にゐて、三成を非常にやかましく探してゐる。もし露顯したら、きつとお前にも禍

が降りかゝつて来るだらう」と。農夫は「そんな覺えはない」と答へた。三成は襖越しにその話を聞き、農夫に向つて曰ふには「余はどの道逃げ終せることは出来ないのだ。お前は どうして知らせに行かないのだ」と。農夫は三成を落さうとした。三成が曰ふには「余は病氣だ。一寸も歩くことは出来ぬ、ぐづくしてゐると、お前に累を及ぼすことになる。お前は直ぐ自首して出るやうに」と。そこで農夫は井口に行つて吉政に知らせた。吉政は兵卒をやつて捕へさせた。

語釋 石橋村・井口(近江)

初三成之握權也、吉政事之甚恭。三成既被捕、呼吉政如故曰、「吾欲報先君知遇、與上杉・毛利等俱舉事、一敗至此、命也。願得速自殺。」吉政請之德川氏、乃命醫治其疾。其父晴成・兄重成・子重家・姪朝成、皆在澤山、自殺。長東正家走保水口。東兵來逼、誘出之、迫使自殺。僧惠瓊亦被捕、皆囚于東營。諸將帥爭折辱三成。獨淺野左京大夫視之憫然、脫其短襖衣之曰、「子雖我仇也、同爲豐臣氏臣、吾不忍乘其困、加以無禮。」德川氏聞之、心敬憚、大夫義弘之南走、經伊賀・大和、行破土兵而至大坂、欲與輝元、長盛俱城守。二人不答、乃取其質、航歸薩摩。

初め三成の權を握るや、吉政之に事ふること甚だ恭し。三成既に捕へられ、吉政を呼ぶこと故の如し。曰く「吾れ先君の知遇に報いんと欲し、上杉・毛利等と俱に事を擧げて一敗此に至る。命なり。願はくは速に自殺するを得ん」と。吉政之を德川氏に請ふ。乃ち醫に命じて其の疾を治せしむ。其の父晴成・兄重成・子重家・姪朝成、皆澤山に在つて、自殺す。長東正家走つて水口を保つ。東兵來り逼り之を誘出し、迫つて自殺せしむ。僧惠瓊も亦捕へらる。皆東營に囚ふ。諸將帥争つて三成を折辱す。獨り淺野左京大夫之を視て憫然たり。其の短襖を脱ぎ之に衣せて曰く「子は我が仇なりと雖も、同じく豐臣氏の臣たり。吾れ其の困に乗じて加ふるに無禮を以てするに忍びず」と。德川氏之を聞き、心に大夫を敬憚せり。義弘の南走するや、伊賀・大和を經、行々士兵を破つて大坂に至り、輝元・長盛と俱に城守せんと欲す。二人答へず。乃ち其の質を取り、航して薩摩に歸る。

通釋 初め三成が政權を握つた時に、吉政は之に仕へるに感戴を極めてゐた。三成は捕へられてからも、元の通りに吉政を目下の者の様に呼んだ。そして曰ふには「余は先殿(太閤)の理解ある待遇に報いようと思つて、上杉・毛利等と一緒に事を擧げて、一度に敗軍してこんな始末になつた。出来ることなら早く自殺させて貰ひ度いものだ」と。吉政がその旨を德川氏に頼んだ。そこで醫者に命じて三成の病氣を癒させた。彼の父晴成・兄重成・子重家・姪の朝成は皆領地の澤山にゐて自殺した。長東正家は走つて水口を守つた。東兵が追ひ迫つて來ておびき出し、更に追ひつめて自殺させた。僧惠慶も亦捕へられた。皆東軍の陣屋に囚へておいた。諸將帥は我もくくと三成を凌辱した。唯だ一人淺野左京大夫のみは彼を見つめて憫に思つた。その陣羽織を脱いで三成に着せて曰ふには「君は私の仇だが、共に豐臣氏の家來である。私はその落ち目につけ込んで、無禮を加へるには忍

びない」と。徳川氏はそれを聞いて、心中に大夫を敬ひ憚つた。義弘が南に落ち延びた時、伊賀・大和を通り、途々士兵を破つて大阪につき、輝元・長盛と共に城を守らうとした。併し二人は返答しなかつた。そこで城中の人質を取り戻して、舟に乗つて薩摩に歸つた。

先是、田邊・大津皆下。立花宗茂引兵、東至草津、聞敗、還入京師、使人謂木下家定曰、「貴息之事不可言也。子猶右嗣君、則請共守大坂。」家定曰、「子先往、乃閉門自守。」宗茂遂至大坂、使謂輝元曰、「公苟城守、願扞一面。」輝元曰、「議而後答。」宗茂罵曰、「今日復何議。」乃欲歸其國。將士曰、「公所以酬豐臣氏足矣。」因勸降徳川氏。乃送降焉、亦航歸柳川。

訓讀 是より先き、田邊・大津皆下る。立花宗茂、兵を引いて東草津に至り、敗を聞き、還つて京師に入り、人をして木下家定に謂はしめて曰く「貴息の事言ふ可からざるなり。子、猶ほ嗣君を右けば、則ち請ふ共に大坂を守らん」と。家定曰く「子先づ往け」と。乃ち門を閉ぢて自ら守る。宗茂遂に大坂に至り、輝元に謂はしめて曰く「公苟も城守せば、願はくは一面を扞がんと」と。輝元曰く「議して後答へん」と。宗茂罵つて曰く「今日復何をか議せん」と。乃ち其國に歸らんと欲す。將士曰く「公の豊臣氏に酬ゆる所以は足れり」と。因つて徳川氏に降るを勸む。乃ち降を送り、亦航して柳川に歸る。

通釋 これ以前に田邊も大津も皆降参した。立花宗茂は兵を率ゐて東の草津まで行つたが、西軍の敗戦を聞いて京都に戻り、人をやつて木下家定に曰はせるには「御子息(秀秋)のこと何とも話にならぬ。けれども貴公がやはり秀頼公をお助けになるならば、一つ御一緒に大阪を守りませう」と。家定が曰ふには「貴公先きに行かれよ」と。そこで門を閉めて自分の家を守つてゐた。宗茂は遂に大阪まで行つて、輝元に使をやつて曰ふには「貴殿がもしも城を守られるならば、拙者にどうか一方を防がせて貰ひ度い」と。輝元がいふのに「相談してからお答へしよう」と。宗茂は罵つて曰ふには「今になつて何の相談がある」と。そこで自分の本國に歸らうと思つた。その將士が曰ふには「殿が豊臣氏に對する恩報は最早十分で御座います」と。因つて徳川氏に降参することをすゝめた。そこで降参の使ひを出して舟に乗つて柳川に歸つた。

語釋 貴息之事(家定の子の秀秋が徳川に内應した事) ○柳川(後筑)

秀家經近江、爲士兵所困、獨從二人竄土窟中。聞捕者至、欲自殺。從者止之、請其寶刀、出告東軍。以秀家既死、獻刀爲證。秀家至大坂、聞其國已覆沒、竟走薩摩。其妻前田氏、利長妹也。大歸加賀。後數年、利長問得其實、告之江戶。乃責前告者、告者請死。釋之。島津忠恒請宥秀家死。流八丈島。前田利政據能登、九鬼嘉隆據志摩、並抗東軍。利政除籍、嘉隆自殺。

訓讀 秀家近江を經、士兵の困しむる所と爲り、獨り二人を從へて土窟中に竄る。捕者至ると聞き自殺せんと欲す。從者之を止め、其の寶刀を請ひ、出で、東軍に告ぐるに秀家既に死するを以てし、刀を獻じて證と爲す。秀家大坂に至り、其の國已に覆没すと聞き、竟に薩摩に走る。其の妻前田氏は利長の妹なり。加賀に大歸す。後數年、利長問うて其の實を得、之を江戸に告ぐ。乃ち前の告ぐる者を責む。告ぐる者死を請ふ。之を釋す。島津忠恒、秀家の死を宥さんと請ふ。八丈島に流す。前田利政能登に據り、九鬼嘉隆志摩に據り、竝に東軍に抗す。利政は籍を除かれ、嘉隆は自殺す。

通釋 秀家は近江を通り、大兵に攻め苦しめられ、二人の家來だけつれて岩屋の中に隠れてゐた。捕手が來たのを聞いて自殺しようとした。從者はそれを押し止め、その寶刀を貰ひ受け、岩屋を出て東軍の者に、秀家は最早死にましたと申し出で、その寶刀を差出して證據とした。秀家は大阪に逃れ歸り、自分の領國備前が最早東軍の手に渡つたと聞いて、遂に薩摩に走つた。その妻の前田氏は利長の妹である。不縁になつて加賀へ戻つてゐた。數年経つてから、利長が問ひ訊して事實(秀家は生きて薩摩に逃げたといふ)が分つたので、早速江戸に知らせた。江戸方では、前に秀家の死を知らせた從者を責めた。併し許してやつた。島津忠恒は秀家の死を赦免するやうに願ひ出た。その故に八丈島に流した。前田利政は能登に立てこもり、九鬼嘉隆は志摩に據り、皆東軍に抵抗した。結局利政は諸侯の名籍を削られ、嘉隆は自殺した。

是、役也、小西行長首應三成。三成以其更事倚賴之。行長爲人自殖而薄士。士不樂爲之用也。及敗陣亂不可禁。乃走至糟川。逢僧林藏主者曰「吾攝津守也。吾德女矣。」
 僧曰「公盍自刃。行長曰「吾奉耶蘇教。不可自刃。」僧乃執而告之。是歲冬、與三成・惠瓊皆斬于京師。加藤清正初知三成必舉事、止德川氏東行不聽。乃歸其國。逢大坂檄至曰「是佞豎託幼主以濟其私也。乃發兵攻小西氏城邑盡并之。會黑田孝高攻略近國。因合兵降筑紫廣門等。遂臨薩摩。島津義久已降德川氏。森勝信其弟勝永、出小倉走匿土佐。上杉景勝與伊達政宗最上義光戰而勝之。佐竹義宣觀望不出。及聞上國敗、皆降德川氏。」

訓讀 是の役や、小西行長、首として三成に應ず。三成、其事に更るを以て之に倚賴す。行長人と爲り自殖して士に薄くす。士、之が用を爲すを樂しません。敗に及び陣亂れて禁すべからず。乃ち走つて糟川に至る。僧林藏主なる者に逢うて曰く「吾は攝津守なり。吾れ女に徳せん」と。僧曰く「公盍ぞ自刃せざる」と。行長曰く「吾れ耶蘇教を奉ず。自刃すべからず」と。僧乃ち執へて之を告ぐ。是の歳冬、三成・惠瓊と皆京師に斬らる。加藤清正初め三成必ず事を擧ぐるを知り、徳川氏の東行を止む。聽かず。乃ち其國に歸る。大坂の檄至るに逢つて曰く「是れ佞豎、幼主に託して以て其私を濟すなり」と。乃ち兵を發し、小西氏の城邑を攻めて盡く之を并す。會く黑田孝高、近國を攻略す。因つて兵を合せて筑紫廣門等を降し、遂に薩摩に臨む。島津義久已に徳川氏に降る。森勝信、其弟勝永、小倉を出で、走つて土佐に匿る。上杉景勝は伊達政宗・最上義光と戦つて之に勝つ。佐竹

義宣は觀望して出でず。上國の敗を聞くに及び、皆徳川氏に降る。

通釋 關ヶ原の戦役で、小西行長は第一に三成に加擔した。三成は、行長が軍事に經驗がある爲めに、彼を頼みにしてゐた。然るに行長は性來利己主義で部下に冷淡であつた。部下は彼の爲めに快く働く氣がなかつた。戦も敗れると、その陣の足並が亂れて何んとしても止めることができなかった。そこで糟川に逃げ延びた。僧の林藏主といふ者に出逢つて曰ふには、余は攝津守だ。お前に施しをしてやらう」と。僧が曰ふには「貴方はなぜ自殺せられないのか」と。行長が曰ふには「余は耶穌教を宗旨にしてゐる。だから自殺することは出来ぬ」と。そこで僧は彼を捕へて知らせた。この年の冬、三成・惠瓊と一緒に京都で斬られた。加藤清正は初めから三成が必ず事を起すのを知り、徳川氏の東に向ふのを止めた。併し承知しなかつた。そこで領國に歸つた。大阪から三成の檄文が来たのを見て曰ふには「これは口達者な小僧が年若な主人に事よせて野心を遂げようとするのだ」と。そこで兵を發して小西氏の城邑で肥後にあるものを攻めて、全部占領して終つた。丁度其の時、黒田孝高が近國を攻め平らげてゐたので、兵を合せて筑紫廣門等を攻め降し、そのまゝ薩摩に迫つた。その時島津義久は最早徳川氏に降つてゐた。森勝信とその弟の勝永は小倉を出て土佐に逃げ隠れた。上杉景勝は伊達政宗・最上義光と戦つて之に勝つた。佐竹義直は形勢を觀望して出て來なかつた。上方に於ける味方の敗北を聞いて、皆徳川氏に降參した。

語釋 糟川(近江) ○佞豎(三成を)

先是徳川氏既捷、將入京師。諸將先進、至大津。福島正則議曰「吾輩知三成、舉事非

郎君意、故右内府討之。今三成既敗矣。内府或遂謀不利於郎君、則吾以死拒之。淺野・加藤等皆然之。乃入京師。徳川公至大津、置關于日岡、以其臣伊奈圖書守之。正則使使大津、爲關吏所辱。使者復命而自殺。正則怒、以其首贈井伊直政。直政驚、斬關卒數人、謝之。正則愈怒、曰「百卒不直一士、必得圖書頭。如不見許、吾將爲我所欲爲也。」圖書聞之、自殺。既而徳川公入大坂、不問秀頼。遂大行慶讓、削毛利輝元之六國、放増田長盛于高野。眞田昌幸與子幸村亦遁高野。以秀秋功最大、封浮田氏。故地尋病狂死。國除。其父家定削邑、兄勝俊、利房皆奪封。兄延俊獨邑于豊後。

訓讀 是より先き、徳川氏既に捷ち、將に京師に入らんとす。諸將先づ進み大津に至る。福島正則議して曰く「吾が輩知る、三成の事を擧ぐるは郎君の意に非るを、故に内府を右けて之を討つ。今三成、既に敗る。内府或は遂に郎君に不利を謀らば、則ち吾れ死を以て之を拒がん」と。淺野・加藤等皆之を然りとす。乃ち京師に入る。徳川公大津に至り、關を日岡に置き、其臣伊奈圖書を以て之を守らしむ。正則、使を大津に使はし、關吏の辱しむる所と爲る。使者復命して自殺す。正則怒り、其首を以て井伊直政に贈る。直政驚き、關卒數人を斬つて之を謝す。正則愈々怒つて曰く「百卒は一士に直らず。必ず圖書の頭を得ん。如し許されずば、吾れ將に我が爲さん

と欲する所を爲さんとす」と。圖書之を聞いて自殺す。既にして徳川公大坂に入り、秀頼を問はず。遂に大に慶讓を行ひ、毛利輝元の六國を削り、増田長盛を高野に放つ。眞田昌幸、子幸村と亦高野に遁る。秀秋の功最も大なるを以て、浮田氏の故地に封ず。尋いで狂を病んで死し國除かる。其父家定、邑を削られ、兄勝俊・利房皆封を奪はる。兄延俊獨り豊後に邑す。

通釋 これより以前、徳川氏は關ヶ原に勝つて京都に入らうとした。諸將が先づ大津まで来た。福島正則は相談して曰ふには「吾が輩はよく知つてゐるが、三成が事を起したのは若君の御意志ぢやないのだ。だから俺は内府に加擔して討つたのだ。併し今三成はもう負けて終つた。この上内府が若君に爲めにならぬことをし出したら、俺は死を賭して邪魔をする積りだ」と。淺野・加藤等は皆それに賛成した。そこで京都に入つた。徳川公は大津まで来て、日岡に關所を置き、家來の伊奈圖書に守らせた。正則は使を大津にやつた所が、その使は關所の役人に侮辱された。使者は歸つて使命を報告した上で自殺を遂げた。正則は立腹してその首を井伊直政に贈つた。直政は驚いて、關所の番卒五六人を斬つて詫びをした。正則は益々怒つて曰ふには「百人の足輕も一人の武士の値打はない。是非共伊奈圖書の首を申し受け度い。もしそれが許されなければ、吾が輩はしたいと思ふことを實行するが、どうか」と。圖書はそれを聞いて自殺をした。さうかうする内に、徳川公は大坂に入つたが、秀頼に一言の挨拶もせず、大に賞罰を行ひ、毛利輝元の六國を滅らし増田長盛を高野に追放した。眞田昌幸は子の幸村と共に之れ亦高野に逃れた。秀秋の功は最も大きいので、浮田氏の元の領地に封じた。その後、秀秋は氣が狂つて死に、其の領地は取り上げられた。その父の家定は領地を滅らされ、兄の勝俊・利房は皆領地を奪はれた。兄延俊だけが豊後に領地を持つてゐた。

日岡(城山) ○六國(安藝、石見、出雲) ○浮田氏故地(美作)

當り是時、徳川公威權益熾。七道將士皆會江戶、留其孥爲質。而秀頼獨食攝津・河内・和泉、六十餘萬石。初片桐且元・小出秀正、憂諸奉行舉事、而不能制也。東西之軍未接、二人亟發使者、赴關東分疏其意。諸奉行要之、使攻阿濃津。使者亦恐嫌怯避、終從之。徳川公怒。秀正退居岸和田。尋病卒。且元獨傳盡心輔導、未嘗離左右。

訓讀 是の時に當り、徳川公威權益熾なり。七道の將士皆江戶に會し、其孥を留めて質と爲す。而して秀頼獨り攝津・河内・和泉の六十餘萬石を食む。初め片桐且元・小出秀正、諸奉行の事を憂ひて制する能はず。東西の軍未だ接せざるや、二人亟に使者を發して關東に赴き、其意を分疏せしむ。諸奉行之を要して阿濃津を攻めしむ。使者も亦、怯避を嫌はるゝを恐れ、終に之に従ふ。徳川公怒る。秀正退いて岸和田に居る。尋いて病んで卒す。且元獨り傳たり。心を盡して輔導し、未だ嘗て左右を離れず。

通釋 此の當時、徳川公の威望權力は益々盛になつた。全國七道の將士は皆江戶に集まり、その妻子を江戶に留め置いて人質にした。そして秀頼のみは攝津・河内・和泉の六十餘萬石を領してゐるに過ぎなかつた。初め片桐且元と小出秀正は諸奉行が事を起すのを心配したが、止めることは出来なかつた。東西の軍がまだ接觸する迄に至らない頃、この兩人は急いで使者を關東に立て、自分達の眞意を言譯をさせた。所が諸奉行がそれを待ち

受けて阿濃津を攻めさせた。使者も憶病で逃げると疑はれるのを恐れて、その言付に従つた。徳川公は(その爲めに且元・秀正の眞意を知らないで)腹を立てゝゐた。秀正は岸和田に退隠してゐた。次いで病死した。且元だけが留守役となつてゐた。心を盡して世話をやき、決して秀頼の傍を離れることをしなかつた。

語釋 未接(關原の前) ○阿濃津(勢伊) ○岸和田(和泉)

八年三月、徳川公爲大將軍。四月、秀頼陸内大臣、叙從一位。七月、將軍以其孫女妻秀頼。命且元迎之。令大坂加且元封萬石。且元以嗣君幼、辭不受。尋如江戶。將軍面諭勿辭封。十年四月、秀頼遷右大臣。將軍讓其嗣子秀忠。五月、前將軍在京師。諷北廳使秀頼來見。淀君母子相依、不欲分離。又恐其有變、固辭不遣。

訓讀 八年三月、徳川公大將軍と爲る。四月、秀頼内大臣に陞り、從一位に叙せらる。七月、將軍其の孫女を以て秀頼に妻はす。且元に命じて之を迎へしめ、大坂をして且元に封萬石を加へしむ。且元、嗣君幼きを以て辭して、受けず。尋いて江戸に如く。將軍面のあたり封を辭する勿れと諭す。十年四月、秀頼右大臣に遷さる。將軍、職を其の嗣子秀忠に讓る。五月、前將軍京師に在り。北廳に諷して、秀頼をして來見せしむ。淀君母子相依り、分離を欲せず。又其の變あらんを恐れ、固辭して遣らす。

その孫娘(秀忠の娘千姫)を秀頼に嫁付けた。且元に江戸まで迎へに來させた。大坂方に、言ひつけて且元に萬石を加増させようとした。且元は秀頼君がまだ幼少なので斷つてお受けしなかつた。それから間もなく江戸に行つた。將軍は面と向つて、加封を辭退せぬやうにと諭した。十年四月、秀頼は右大臣に貶された。將軍は跡取りの秀忠に職を讓つて隠居した。五月、前將軍は帝都に居つた。秀頼の嫡母北廳にそれとなく話して秀頼に會ひに來させようとした。併し淀君は母子互に深く頼り合つてゐて、暫らくも離れ度がらなかつた。又變事の起るのを心配して、固く斷つて秀頼を京都にやらなかつた。

十三年二月、秀頼患痘。福島正則自安藝馳至、日夜看護。先是、正則謂結城秀康曰、「公太閤養子。於大坂、郎君爲兄弟。將軍百歲後、公善遇郎君。老奴亦當竭力周旋。」秀康疑其有異志、絕之。初、秀吉造金馬數十一馬、當銀金千枚。藏之大坂城中、以備軍須。十五年、秀頼以東旨再興方廣寺、以繼先志。以且元監役、所費鉅萬、多鎔金馬一充費。

訓讀 十三年二月、秀頼痘を患ふ。福島正則安藝より馳せ至り、日夜看護す。是より先き、正則、結城秀康に謂つて曰く、「公は大閤の養子。大坂の郎君に於て兄弟たり。將軍百歲の後、公善く郎君を遇せよ。老奴も亦、當に力を竭して周旋すべし」と。秀康其異志あるを疑つて之と絶つ。初め秀吉、金馬數十を造る。一馬は銀金千枚

に當る。之を大坂城中に藏して以て軍須に備ふ。十五年、秀頼、東旨を以て再び方廣寺を興し、以て先志を繼ぐ。目元を以て役を監せしむ。費す所鉅萬、多く金馬を鎔して費に充つ。

通釋 十三年二月、秀頼は瘡瘡を患つた。福島正則は安藝から驅けつけて来て、夜書看護をした。それより前に、正則は結城秀康に向つて曰ふには「貴方は太閤殿下の御養子です。大阪の若君とは御兄弟である。將軍(家康)亡き後は、善く若君の御世話をお願ひ申します。老奴も一生懸命に瞻入り至らずで御座らう」と。秀康は正則が家康に對して陰謀のあることを疑つて手を切つて終つた。以前秀吉は金の馬を數十を造つた。その一頭が大判金千枚に相當した。それを大坂城中にしまつて軍用金の準備としてゐた。十五年、秀頼は關東方の希望により、父の志を繼いで方廣寺を再興することになつた。目元に工事の監督をさせた。費用は數萬兩もかゝつたが、その大部分は例の金の馬を鎔して間に合せた。

語釋 金馬(黄金の分) ○銀金(いたがね、おほば) ○繼先志(太閤が東大寺に擬して作り、慶長二年の地震にて破壊した。それ以來大成しなかつたのを太閤の志を繼いで後之を成さしめたのである。)

是時、關東工役數起。福島・加藤・淺野・池田の諸家、毎助其役。清正赴江戶、多率士卒、又必過省秀頼。因置邸於大坂、如故。凡邦俗男子必剃其鬚髯。而清正長髯自喜。前將軍使一親將以其私謂之曰「以予觀於公、有可去者三。長髯一也。大坂邸二也。東行從兵三也。清正曰「吾戎服著銅面、有髯、以爲之藉、則肅然無有搖撼之患。撤大坂邸、

是棄太閤舊誼、不以兵自從、緩急不及、事皆不可去也。」

訓讀 是の時、關東の工役數々起る。福島・加藤・淺野・池田の諸家、毎に其役を助く。清正江戶に赴くに、多く士卒を率ゐ、又必ず過つて秀頼を省す。因つて邸を大坂に置くこと故の如し。凡そ邦俗、男子は必ず其鬚髯を剃る。而るに清正長髯自ら喜ぶ。前將軍、一親將をして、其私を以て之に謂はしめて曰く「予を以て公を觀るに去る可き者三あり。長髯一なり。大坂の邸二なり。東行に兵を從ふ三なり」と。清正曰く「吾れ戎服して銅面を著く、髯あつて以て之が藉と爲せば、則ち肅然として搖撼の患あるなし。大坂の邸を撤するは是れ太閤の舊誼を棄つるなり。兵を以て自ら從へざれば、緩急事に及ばず。皆去る可からざるなり」と。

通釋 此の時、關東方の工事が頻繁に起つた。福島・加藤・淺野・池田の諸家はいつもその工事に合力してゐた。清正は江戶に行く時は多數の兵を連れ、又必ず大阪の秀頼の許へ立ち寄つて見舞をした。その爲め、相變らず大阪に邸を置いてゐた。又一般に當時の風として男子は定つてあごひげ、頬ひげを剃るのであつた。清正は長い頬ひげを蓄へて喜んでゐた。前將軍家康はある慈意な大將に言ひつけて、其大將の意見として清正に曰はせるには「貴方に對する私の意見を申述べると、あなたには廢むべきものが三件あります。長髯が一つです。大阪の邸が一つです。江戶に行く時軍隊を伴ふのが一つです」と。清正が曰ふには「私は武裝する時銅の面覆ひを着ける。頬ひげを下敷きにするのとびつたりしてぐらく揺れることが御座らぬ。大阪の邸を取りこはすことは太閤殿下の古い御恩誼を棄てることになる。軍隊をつれてゐなければ急場の間に合ひ兼ねます。そんな譯で折角だ

十六年三月、前將軍在京師。使織田長益來諭召見秀賴。淀君不肯。北廳使清正及淺野左京大夫促之。二將因啓曰「臣輩以死守。郎君必無慮矣。且元亦自京師馳還。苦諫之。淀君乃遣秀賴。二十八日、溯淀入京師。二將以弓銃夾岸而北。福島正則稱疾守大坂。前將軍使其二子義直、賴宣迎之東寺。二將以下二十一人、徒步護輿入二條城。」

訓讀 十六年三月、前將軍京師に在り。織田長益をして、來諭して秀賴を召見せしむ。淀君肯んぜず。北廳清正及び淺野左京大夫をして之を促さしむ。二將因つて啓して曰く「臣が輩、死を以て郎君を守る。必ず慮無し」と。且元も亦京師より馳せ還り、之を苦諫す。淀君乃ち秀賴を遣はず。二十八日、淀を遡つて京師に入る。二將、弓銃を以て岸を夾んで北す。福島正則、疾と稱して大坂を守る。前將軍其二子義直、賴宣をして之を東寺に迎へしむ。二將以下二十一人、徒步して輿を護し、二條城に入る。

通釋 十六年三月、前將軍は京都にゐた。織田長益をして大阪に行つて話をつけ、秀賴を呼びつけさせようとしました。淀君が承知しなかつた。北廳は、清正と淺野左京大夫をしてそれを催促させた。そこで二將は淀君に申し上げて曰ふには「私共が死を賭して若君を守護します。必ず御心配は御座いませぬ」と。且元も京都から馳せ歸り、淀君に誘へ直す様に痛く諫めた。そこで淀君はやつと秀賴を京都にやつた。二十八日、淀川を上つて京都に入つた。清正と淺野の二將は弓銃砲を用意して兩岸からその舟を夾んで北に向つた。福島正則は病氣だと言ひ立て、伴に立たずに大阪を守つた。前將軍は二人の子供の義直と賴宣に、秀賴を東寺に出迎へさせた。前記の二將以下二十一人の者が、徒歩で輿を護つて二條城に入つた。

語釋 義直(後に尾張侯) ○賴宣(後に紀伊侯)

前將軍出迎之門、相見于正殿。前將軍南郷坐、關東將士及諸侯伯、擁衛左右。秀賴北郷坐、二將在。其後、秀賴贈前將軍以名刀二口、駿馬一匹、黃金三百枚及錦緞若干。其公族將領皆有所遺。前將軍答以二刀、三鷹、十馬、饗畢。清正曰「淀君遲歸。請辭矣。」前將軍使其女婿池田輝政賜酒於二將。既罷、扶秀賴出、謁北廳、拜豐國廟、視方廣寺役、自伏見上舟。清正獻酒賀焉。歸其邸、出短刀于懷、泣曰「吾今日、聊報太閤之恩矣。」四月、義直、賴宣來大坂。報秀賴北上也。秀賴迎而饗之。

訓讀 前將軍出で、之を門に迎へ、正殿に相見る。前將軍南郷して坐し、關東の將士及び諸侯伯、左右を擁衛す。秀賴北郷して坐し、二將其後に在り。秀賴前將軍に贈るに、名刀二口・駿馬一匹・黃金三百枚及び錦緞若干を以てす。其公族・將領に皆遺る所あり。前將軍答ふるに二刀・三鷹・十馬を以てす。饗畢る。清正曰く「淀君歸

を遅つ。請ふ辭せん」と。前將軍其女婿池田輝政をして酒を二將に賜らしむ。既にして罷む。秀頼を扶けて出で、北廳に謁し、豊國廟を拜し、方廣寺の役を視、伏見より舟に上る。清正酒を獻じて賀す。其邸に歸り、短刀を懷より出し、泣いて曰く「吾れ今日、聊か大閤の恩に報ず」と。四月、義直・頼宣大坂に来る。秀頼の北上に報ゆるなり。秀頼迎へて之を饗す。

通釋 前將軍は門まで出迎へて、大書院で會見をした。前將軍は南向きに坐り、關東方の將士並びに諸大名はその左右を圍んで衛つた。秀頼は北向に坐り、二將が背後に控へた。秀頼は前將軍に、名刀二口、駿馬一頭、黄金三百枚及び錦と緞子若干を贈つた。又其一門の武將達にも何れも土産物があつた。前將軍はその返禮として刀二口、鷹三羽、馬十頭をおくつた。饗宴が済んだ。清正が曰ふのに「淀君が歸りを待たれて居ります。お暇を戴き度う御座います」と。前將軍は婿の池田輝政に言ひ付けて、二將に酒を與へさせた。それが済むと秀頼を介添して、邸を立ち出で、北廳にお目通りをし、豊國廟に參詣し方廣寺の工事を視察し、伏見から舟に乗つた。清正は酒を獻じて無事を祝つた。自分の邸に歸ると、懷から短刀を取り出し、涙を流して曰ふには「俺は今日大閤殿下の御恩を少し許り報じた」と。四月義直と頼宣が大坂に来た。これは秀頼の來訪に報ゆる爲めである。秀頼は迎ひ入れて饗應をした。

語釋 南郷坐、北郷坐(南面は天子の位にて、北面は臣下の位なれ)

六月、清正病卒。清正嘗謂人曰「前田利家、志儒學、招吾及浮田秀家、淺野幸長。語次、論語の託孤寄命の章を擧ぐ。我れ爾の時其何の謂なるを知らず。乃者讀んで之を思ひ、略曉る所あり。今の世に當り、此の語を念はざる者は、恐らくは不義に陥らん」と。清正既に卒す。淺野父子、相繼ぎ病んで卒す。

訓讀 六月、清正病んで卒す。清正嘗て人に謂つて曰く「前田利家、志儒學に、志し、吾れ及び浮田秀家、淺野幸長を招く。語次、論語の託孤寄命の章を擧ぐ。我れ爾の時其何の謂なるを知らず。乃者讀んで之を思ひ、略曉る所あり。今の世に當り、此の語を念はざる者は、恐らくは不義に陥らん」と。清正既に卒す。淺野父子、相繼ぎ病んで卒す。

通釋 六月、清正は病死した。清正は以前人に向つて曰ふには「前田利家は晩年になつて儒學に心を向けてゐたが、自分と浮田秀家・淺野幸長を招いたことがある。その時の話の序に、論語の「以て六尺の孤を託すべく、以て百里の命を寄すべし」の章を引いて示した。自分はその時は何ういふ理由が分らなかつた。此の頃、論語を讀んで考へると、大體分つた様な氣がする。今のやうな時世に此の文句を念頭に置かぬ者は、多分不義の道に陥るであらう」と。その清正も死んで終つた。淺野父子も續いて病死した。

語釋 託孤寄命(論語、泰伯篇に「可_レ以_レ託_レ六尺之孤、可_レ以_レ寄_レ百里之命、臨_レ大節、而不可_レ奪也、君子人歟、君子人也」とある。朱子の註に「其の才は以て幼君を輔け、國政を攝すべし。其の節は死生の際に至つて奪ふべからず、君子といふべし」とある。)

十八年、秀頼以東旨、加片桐且元、大野治長、祿各五千石。且元與木村重成、薄田兼相及七隊長、以遺命保護秀頼、服事關東甚謹。而治長者、淀君乳母子也。織田長益者、淀君季父也。皆見親信、寢與且元相軋。十九年正月、彗星見東方。二月、大坂、天主

閣烟起。衆趨救則無矣。使韓人李文長筮之。遇艮之益。曰「尋兵失疆、喪其貞良、敗我殺鄉。再筮遇臨之坎。曰「人面鬼口、長舌如斧、斲破瑚璉、殷商絕後。秀賴大懼、命巫禳之。」

訓讀 十八年、秀頼東旨を以て、片桐且元・大野治長に、祿各々五千石を加ふ。且元、木村重成・薄田兼相及び七隊長と、遺命を以て秀頼を保護し、關東に服事すること甚だ謹む。而して治長は淀君の乳母の子なり。織田長益は、淀君の季父なり。皆親信せられ、濶く且元と相軋る。十九年正月、彗星東方に見ゆ。二月、大阪の天主閣に烟起る。衆趨り救へば則ち無し。韓人李文長をして之を筮せしむ。艮の益に之くに遇ふ。曰く「兵を尋めて疆を失ひ、其貞良を喪ひ、我を殺郷に敗る」と。再筮するに、臨の坎に之くに遇ふ。曰く「人面鬼口、長舌斧の如く、瑚璉を斲破し、殷商後を絶つ」と。秀頼大に懼れ、巫に命じて之を禳はしむ。

通釋 十八年、秀頼は關東の内命で、片桐且元と大野治長とに夫々祿高五千石を加増した。且元は木村重成、薄田兼相及び七隊長と共に、太閤の遺命によつて秀頼を保護し、關東に對しては非常に注意深く、その意に逆らはずらんことを心懸けてゐた。そしてこの治長は淀君の乳母の子であつた。織田長益は淀君の末の叔父であつた。何れも淀君から信用せられ、親まれてゐたが且元との關係は段々圓滑でなくなつた。十九年正月、彗星が東の空に見えた。二月、大阪の天主閣から烟があつた。皆走つて消しに行くと何も無かつた。韓人の李文長に占はせて見た。艮の卦が益の卦に行くといふのであつた。易の文句に「兵を用ひて領地を失ひ、忠良

な臣下を失ひ、秦が殺に於て晉に敗れたやうなることになると。又占つて見ると、今度は臨の卦が坎の卦に行くといふのであつた。易の文句に「人面をしてはあるが鬼の口で、その長舌は斧の如く自在である。宗廟の祭器を破壊して、殷國が亡んで祀を絶つたやうになる」と。秀頼は非常に恐ろしくなつて、みこに之を禳ひ除かせた。

語釋 七隊長(連水守久、伊東長次、青木一重、眞野宗) ○遇艮之益(益) 艮。初爻、第三爻、第五爻の三爻が變化してゐる。だから兼山といふ。動かざる山の如しといふ象である。大阪城が靜としてゐれば間違ひはないことを示す。益は風雷益といつて、風と雷とが吹いたり鳴つたりして、段々それが増して行くことを現はしてゐる。大阪方が風ならば關東方は雷となつて、互ひに大雷風の騷ぎを生ずるを示してゐる。つまり動かさないものが動いてゐる。○尋兵失疆云々(此は漢焦贛の易林によつて判斷するのである。敗義郷とは左傳昭公三十三年大波瀾を來すことを示してゐるのである。○尋兵失疆云々(年に、秦の穆公が蹇叔の諫めを用ひず孟明視、西乞術、白乙丙の三人を遣はし鄭を伐ち、晉の爲めに彼で手酷く破られたことが記されてゐる。このやうに豐) ○遇臨之坎(臨) 臨。二、三、四、五、上から下に臨む卦である。習坎は坎官水と申して、坎が重なるから習坎といふのである。坎は陷で險である。これは險難が重なり來ることを示す。○人面鬼口云々(これも表はしてゐる。豐臣は初め群諸侯に高處から臨んでゐるが、それが難に赴くといふことを示してゐるのである。○人面鬼口云々(これも據つたのである。人面鬼口で、差し出口で、それは斧がものを破るがやうに事を破る恐ろしい挨拶。以上は淀君にあてゝいふのである。瑚璉は宗廟の祭に黍稷を盛る器で、それを破壊するとは豐臣氏の祀を斷たしめるといふこと。そしてそれは殷商の國が斷絶したやうに豐臣氏を亡して終ふといふこと。)

四月、方廣寺成。乃鑄洪鐘。命東福寺僧清韓銘之。五月、遣片桐且元赴駿河、告成請慶。前將軍曰「右府爲願主。宜親往慶之。」因命其親臣本多正純、以女爲且元婦。慰勞遣歸。且元大喜復命。卜八月三日、公卿以下皆會。縱四方民觀儀。將發行會。前將軍覽鐘銘稿。大怒。曰「銘有國家安康之句。是截我名也。序有大小釋迦迭爲主伴之語。」

是欲代我也。秀頼何意、乃敢誚我。

訓讀 四月、方廣寺成る。乃ち洪鐘を鑄る。東福寺の僧清韓に命じて之に銘せしむ。五月、片桐且元を遣はして駿河に赴き、成を告げて慶を請はしむ。前將軍曰く「右府、願主たり。宜しく親ら往いて之を慶すべし」と。因つて其の親臣本多正純に命じ、女を以て且元の婦と爲し、慰勞して遣歸す。且元、大に喜び復命す。八月三日を卜して公卿以下皆賀す。四方の民を縦して儀を觀しむ。將に行を發せんとす。會、前將軍、鐘銘の稿を覽て大に怒る。曰く「銘に、國家安康の句あり。是れ我が名を載るなり、序に大小の釋迦、迭に主伴と爲るの語あり。是れ我に代らんと欲するなり。秀頼何の意ぞ、乃ち敢て我を誚ふ」と。

通釋 四月、方廣寺が落成した。大釣鐘を鑄た。東福寺の僧の清韓に命じて銘文を作らせた。五月、片桐且元を駿河にやつて、落成を報告し供養せられんことを請うた。前將軍が曰ふには「右府(秀頼)が願主だ。御自分で出向いて供養されるが宜しい」と。そこで譜代の家來の本多正純に命じてその娘を且元の倅の嫁にさせ、勞つて歸してやつた。且元は非常に喜び、歸つて前將軍の言葉を報告した。八月三日を選んで、公卿以下皆集つた。又遠近の民に自由に儀式を見物しても宜いことにした。そしてこれから秀頼の行列が大坂を出發しようとするといふ時になつた。丁度其の頃前將軍が鐘の銘の草稿を見て非常に怒つた。曰ふには「銘に『國家安康』の文句がある。これは自分の名を斷ち切つたのである。又銘の序文に『大小の釋迦迭に主伴と爲る』といふ句がある。これは秀頼が自分に代つて天下を支配しようといふ下心である。秀頼は如何なる量見なれば、かく自分を呪ふのであるか」と。

註釋 鐘銘稿(鐘の銘はその鐘の功徳を稱ふる意味を韻文にて表はした文辭。この鐘銘には左の文句がある。洛陽東鐘、金部通稱、我空鐘八、聲經、百八聲忙、夜福畫誦、夕燈晨香、五界開空、遠寺知湘、東迎素月、西送斜陽、玉筍墮地、豐山降霜、告怪於漢、敬苦於唐、靈、異惟夥、功用無量、所庶幾者、國家安康、四海施化、萬歲傳芳、君臣豐榮、子孫殷昌、佛門柱礎、法社金湯、英檀之德、山高水長。) ○大小釋迦迭爲主伴(もとは葉上大釋迦、葉中小釋迦、互爲主伴といひ、) 大小の佛弟子が互に主従となることを言ふ。

德川氏、京尹板倉勝重馳使告之。且元停其慶會。且元大驚曰：是非右府所知也。託之清韓。偶然及此耳。臣不學，成即附工。罪無所逃。今大儀垂成，萬衆已聚。而遽停之，恐驚民耳目。伏願且畢禮，尋毀滅銘文。然後臣甘心伏誅，毋悔也。勝重不肯曰：是成詛也。遂停儀。物情騷然。且元召問清韓。清韓不服。乃使清韓赴駿河，陳謝而自與其弟元重、大野治長、繼赴之。前將軍執清韓，命板倉重昌如京師，令五山僧註疏銘文。僧多證其詛。且元至，鞠子驛，留不敢入。九月，有命遣歸治長，而獨召且元，詰責之。且元陳謝甚力。

訓讀 德川氏の京尹板倉勝重、使を馳せて之を且元に告げ、其慶會を停む。且元大に驚いて曰く「是れ右府の知る所に非ざるなり。之を清韓に託し、偶然此に及ぶのみ。臣不學、成つて即ち工に附す。罪逃るゝ所なし。今、大儀成るに垂んとし、萬衆已に聚る。而して遽に之を停めば、恐らくは民の耳目を驚かさん。伏して願はく

は、且く禮を畢へ、尋いで銘文を毀滅し、然る後臣甘心して誅に伏す悔母きなり」と。勝重肯んぜずして曰く「是れ詛を成すなり」と。遂に儀を停む。物情靡然たり。且元召して清韓に問ふ。清韓服せず。乃ち清韓をして、駿河に赴いて陳謝せしめ、而して自ら其の弟元重・大野治長と繼いで之に赴く。前將軍清韓を執へ、板倉重昌に命じて京師に如かしめ、五山の僧をして銘文を註疏せしむ。僧多く其の詛を證す。且元鞠子驛に至り、留つて敢て入らず。九月、命あり。治長を遣歸し而して獨り且元を召して之を詰責す。且元陳謝甚だ力む。

通釋 徳川氏の京都代官(京都所司代)板倉勝重が使を飛ばせて、その旨を且元に知らせ、その供養の會を中止させた。且元は非常に驚いて曰ふには「これは右府秀頼公の御存知なさらぬことです。清韓に頼んで作らせて思ひがけなくこんな始末になつたのです。私は學問を知らぬ爲め、銘文が出来るとすぐ鑄させたのです。この責任を私は逃れることは出来ません。が只今大儀式は準備が全部出来上つて、大勢の人が最早集まつてをります。今突然式を中止したならば、恐らく人民達の耳目を驚かすことになりませう。お願ひでございます兎も角も儀式を終へさせて下さい。式が済んだら直ぐに銘文を削り取つて終ひます。その後には私は満足して誅に伏しまし、聊かも悔ゆる所は有りませんと。勝重は承知しないで曰ふには「それでは呪をなし遂げることになりません」と。遂に儀式を中止した。世間の様子は何となく物騒がしかつた。且元は清韓を呼んで問うた。清韓は自分の意見を申し立て、服しなかつた。且元は、清韓に駿河に行つて詔びをさせ、自分も、弟の元重や大野治長と續いて駿河に行つた。前將軍は清韓を押し込め、板倉重昌に命じて京都に行かせて五山の學僧に銘文に註釋をさせた。僧は多くは前將軍の意に媚びて、銘文中に呪の意味あることを證據立てた。且元は鞠子驛まで行つたが、そこに逗留して駿河には遠慮して入らうとしなかつた。九月、命命が出て治長を歸し、且元だけを呼びつけて、詰り問うた。且元は分疏やらお詫びやら一生懸命でやつた。

語釋 五山(天龍・相國・建仁) ○註疏(註も疏も本文の間に挿んで本文の意味を解釋したるものなるも、疏は) ○鞠子(河駿)

淀君聞且元等不得見遣其乳母大藏與尼正永赴謝二女欲專辨銘辭急習其句讀且誦且行至則召入溫言慰藉不復及銘辭使往江戶省夫人淺井氏二女大喜出意外既還駿河與且元皆告歸許之二女請答書曰既面諭之矣乃皆辭上途有命獨止且元使本多正純僧天海言之曰將軍意終不可解右府何以爲信表其無他且元曰願受教二人不答且元曰請赴江戶取將軍旨二人入白焉曰將軍意亦與我同耳汝宜歸而熟籌之且元遂辭去馳及二女於土山驛

訓讀 淀君、且元等見るを得ずと聞き、其乳母大藏と尼正永とを遣はして赴き謝せしむ。二女専ら銘辭を辨ぜんと欲し、急に其句讀を習ひ且つ誦し且つ行く。至れば則ち召し入れ、溫言慰藉し、復銘辭に及ばず。江戶に往いて、夫人淺井氏を省せしむ。二女大に喜んで意外に出づ。既に駿河に還り、且元と皆歸を告ぐ。之を許す。二女答書を請ふ。曰く「既に之を面諭せり」と。乃ち皆辭して途に上る。命あり、獨り且元を止め、本多正純・僧天海をして之に言はしめて曰く「將軍の意終に解く可からず。右府何を以て信と爲して、其他なきを表する」

と。且元曰く「願はくは教を受けん」と。二人答へず。且元曰く「請ふ江戸に赴いて將軍の旨を取らん」と。二人入つて白す。曰く「將軍の意も亦我と同じきのみ。汝宜しく歸つて之を熟籌すべし」と。且元遂に辭し去り。馳せて二女に土山驛に及ぶ。

通釋 淀君は且元等が前將軍に會ふことが出來ずにあると聞いて、自分の乳母の大藏と尼の正永とを遣はして詫びさせた。この二人の婦人は銘の文句を辯解しようといふ考で一杯なので、急にその句讀を稽古し、行く途々も暗記をしながら旅をした。駿府につくと直ぐ様召し入れて、物柔らかに勞り慰めて銘の文句のことは少しも觸れなかつた。江戸に行つて奥方淺井氏を見舞はせた。二人は大喜びで案外な思ひをした。その中に駿府に歸つて来て、且元と共に皆で暇乞ひをした。前將軍は之を許した。二人は返事の手紙を戴きたいと請うた。すると前將軍は曰ふのに「最早や直かに會つて話したわけだから、別段文は要るまい」と。それで皆暇乞ひして出發した。所が命令が出て、且元だけは止めて置かせ、本多正純と僧の天海をして言はせるのに「將軍(秀忠)の御心がどうしても解けない。右府殿は何を證據にされて、異心の無いことを表はすお積りか」と。且元が曰ふには「どうぞお教へを願ひ度い」と。二人は返事をしなかつた。且元が曰ふには「では江戸に行つて將軍の御考を承り度う存する」と。二人が引つ込んでその由を申上げた。すると「將軍の考も私と同じだから別に行く必要はない。お前はまあ大阪に歸つて、よくよく考へて見るが宜からう」といふ言葉であつた。且元はそこで遂に駿府を辭し去り、馬を急がせて、土山驛で二人の婦人に追ひ付いた。

語釋 大藏(大野治長) ○正永(渡邊胤) ○夫人淺井氏(淺井氏は淀君の妹) ○將軍意亦與我同耳(前に「將軍意終不可解」とあつたは勿論秀忠といふことを暗に言つてゐる。それ) ○土山驛(近)

二女乃悉語之以前將軍懇諭狀曰「國事莫復慮者。且元曰「吾所聞則大異諸前將軍逼我以右府表信吾揣其意蓋有三策焉。淀君東與妹氏同居上策也。右府往依婦翁中策也。避大坂徙他下策也。三策行一庶幾無事。二女不言退而相言曰「前將軍豈至於此。是市正欲賣我君也。密馳書告大坂曰「且元形跡可疑。且元不之知也。使二女先還而自入京師與板倉勝重議事。淀君聞二女報憤恚曰「吾雖太閤妾也。於右府爲生母。何屈辱關東哉。寧與右府枕城而死。乃欲誅且元。遂舉兵治長長益力贊之。

訓讀 二女乃悉語之以前將軍懇諭の狀を以てして曰く「國事復慮るに足るもの莫し」と。且元曰く「吾が聞く所は則ち大に諸に異なり。前將軍我に逼るに、右府の信を表するを以てす。吾れ其意を揣るに、蓋し三策あり。淀君東して妹氏と同じく居るは上策なり。右府往いて婦翁に依るは中策なり。大坂を避けて他に徙るは下策なり。三策一を行はば、庶幾はくは事無からん」と。二女言はず。退いて相言つて曰く「前將軍豈に此に至らんや。是れ市正我が君を賣らんと欲するなり」と。密に書を馳せて大坂に告げて曰く「且元の形跡疑ふ可し」と。且元之を知らざるなり。二女をして先づ還らしめ、而して自ら京師に入り、板倉勝重と事を議す。淀君

二女の報を聞き、憤恚して曰く「吾れ大闇の妾なりと雖も、右府に於ては生母たり。何ぞ關東に屈辱せんや。寧ろ右府と城を枕にして死せん」と。乃ち且元を誅し遂に兵を擧げんと欲す。治長・長益力めて之を贊す。

通釋 二人の女はそこで且元に、前將軍が懇ろに諭された次第を詳しく話して曰ふには「國家の事はもつ心配は要りませぬ」と。且元が曰ふには「私の聞いた所は大變それと違つてゐます。前將軍は私に右府様が是非共證據を差出すやうにと迫られました。私はその意味を考へ申すに、三つの策が有る様に思ひます。淀君様が關東に行かれて妹御の秀忠夫人と一緒に暮されるのが一番上策です。右府様が行つて舅秀忠殿の所に居られるのは中の策です。大阪を避けて他所に移るのは下の策です。尤もこの中のどれか一つを實行すれば多分無事に相濟むことと思ひます」と。二人の女はそれには返事をしなかつた。兩婦人はそこを退つてから問ひ合ふのに「あんなに自分達に親切にして下された前將軍がどうしてそんな難題を吹き掛けることがありませうか。是れは市正殿が我が君を徳川氏に賣る積りに違ひない」と。人知れず急書を大阪にやつてその旨を知らせて曰ふには「且元の行動には疑はしい所があります」と。且元はそんなこと、は少しも知らなかつた。この二人は先きに大阪に歸らせ、自分は京都に入つて、所司代の板倉勝重と相談をした。淀君は二人の知らせを聞いて非常に立腹して曰ふには「私は太閤殿下の妾ではあるけれど、右府殿に對しては生母である。關東などに恥か、されてよいものか。いつそ右府殿と一緒に城を枕にして死んだ方がよい」と。そこで且元を誅して、いよく事を擧げようとした。治長と長益は熱心にそれに賛成した。

語釋 妹氏(上にある) 〇婦翁(秀頼の父、秀頼の夫人、千姫は) 〇市正(且)

已而且元至、謁秀頼、陳三策。秀頼稟之。淀君使入諭。且元曰「後日、面議至期、且元朝服將出會、其臣小島某自外來告曰「淀君信讒言、猜公有貳於關東也、欲伏兵要之、遂舉大事。且元大息曰「噫、年少輩誑誤我君、自速亡滅耳。治長傳內旨、召之甚急。且元遂稱疾不出。治長知謀泄、懼曰「彼素掌管鑰、諸城內有無、即起兵奪城、不可悔也。不若先發誅之。乃令七隊長赴攻之。七隊長皆不肯曰「市正忠勇無比、誅之是絶嗣君手足也。於是、一城大擾。兵士聚片桐氏者三百餘人。治長患之、欲離間其兄弟、諭元重攻且元。元重答曰「家兄誠懷攜貳、吾將大義滅親、不必煩公等。公等忌害忠臣、又使人推刃於同氣、未能奉令也。」

訓讀 已にして且元至り、秀頼に謁して三策を陳ぶ。秀頼之を淀君に稟す。淀君入をして且元に諭さしめて曰く「後日を俟つて面議せん」と。期に至り、且元朝服して將に出でんとす。會、其臣小島某外より來り告げて曰く「淀君讒言を信じ、公の關東に貳ありと猜ひ、兵を伏せて之を要し、遂に大事を擧げんと欲す」と。且元大息して曰く「噫、年少輩我が君を誑誤し、自ら亡滅を速くのみ」と。治長内旨を傳へ、之を召すこと甚だ急なり。且元遂に疾と稱して出でず。治長謀泄れしを知り、恒懼して曰く「彼れ素より管鑰を掌り、城内の有無を諳んず。

即し兵を起して城を奪は、悔ゆ可からざる。先づ發して之を誅するに若かず」と。乃ち七隊長をして之を起き攻めしむ。七隊長皆肯んせずして曰く「市正忠勇無比。之を誅するは、是れ嗣君の手足を絶つなり」と。是に於て、一城大に擾る。兵士片桐氏に聚る者三百餘人。治長之を患ひ、其の兄弟を離間せんと欲し、元重を諭して目元を攻めしむ。元重答へて曰く「家兄誠に擣貳を懐かば吾れ將に大義親を滅せんとす。必ずしも公等を煩はさず。公等忠臣を忌害し、又人をして刃を同氣に推さしむ。未だ令を奉ずる能はざるなり」と。

通釋 その内に目元も到着して秀頼に目通りをして三つの策を述べた。秀頼はそれを淀君に申し上げた。淀君は人をやつて目元に諭させるには「何れ後日になつて面談しよう」と。その定めの日になつて目元が禮服を着けて出かけようとした。丁度其處へ家來の小島某が外から歸つて来て知らせて曰ふには「淀君様は讒言をお取上げになり、殿が關東に二心を抱いてゐると疑つてゐられます。それで伏兵をして殿を待ちかまへ、殿を襲つて、その勢で大事を起さうとしてゐられます」と。目元は大息して曰ふのに「あ、若い者共が我が君を欺き誤り奉つて、我れと我が自ら滅亡を急ぐのだ」と。治長は淀君の内命を傳へて、非常に嚴しく彼を召した。目元は病氣だと言つて遂に出なかつた。治長は謀の發覺したのを知り、痛く恐怖の念に驅られて曰ふには「彼は元々鍵を預つてゐて、城内の案内をよく知つてゐる。もし彼が兵を起して城を奪はれたら後悔しても追つつかぬ。何より先きに彼を誅して終ふが宜い」と。そこで七隊長に目元を攻めさせようとした。所が七隊長は何れも承知せずして曰ふには「市正は忠勇無比なき大將である。彼を殺すのは世繼の君の手足を絶つに等しい」と。さういふわけで城中は大變な騒ぎになつた。兵士の中で片桐の方へ集まる者が三百餘人になつた。治長は大に心配し、その兄弟を仲違ひさせ様と思つて、弟の元重に目元を攻めさせた。元重が答へて曰ふには「家の兄貴が本當に謀殺心

を抱いたなら、私はその時こそ大義の上から、骨肉の親を滅することも辭さない。何も貴公等のお指圖を待ちません。一體貴公等は忠臣を目的にして兄弟に刃を向けさせようとしてゐるのだ。到底御命令に従ふことは出来ぬ」と。

秀頼、近臣今木某、潛來説且元曰、内城八門、公管其六。今夜潛兵奪城、逐治長兄弟、而請命於關東。關東猶不釋、則翼我君舉兵耳。願公速斷之。且元顰顙曰、吾特欲待讒人來攻、而自殺也。苟如公所言、則長被反名矣。因令部下曰、卽及於戰、勿使矢嚮内城。明日七隊長諭且元、納質弭兵、退就其邑。且元從之。十月朔、與治長交質、盡獻城門管鑰、致事而去。七隊長送至大和川上、還質訣飲。且元曰、吾苦心運籌、欲利豐臣氏。吾上策而見聽、吾則請地築第于江戸之郊、故宏其規模、以延數年。我君未壯、而前將軍大耋、吾策不亦善乎。區區之心、未遑盡明。乃卒至於此。因相鄉泣哭、願望而別。且元遂歸其邑茨城、遠近騷擾。

訓讀 秀頼の近臣今木某、潛に來り且元に説いて曰く「内城八門、公其六を管す。今夜、兵を潛めて城を奪ひ、治長兄弟を逐つて、命を關東に請へ。關東猶ほ釋さずば、則ち我が君を翼けて兵を擧げんのみ。願はくは公

速に之を斷ぜよ」と。且元、聲願して曰く「吾れ特讒人の來り攻むるを待つて自殺せんと欲するなり。苟も公の言ふ所の如くば、則ち長く反名を被らん」と。因つて部下に令して曰く「即し戦に及ぶも、矢をして内城に響はしむる勿れ」と。明日七隊長且元に諭し、質を納れ兵を弭め、退いて其の邑に就かしむ。且元之に従ふ。十月朔治長と質を交へ、盡く城門の管鑰を獻じ、事を致して去る。七隊長送つて大和川の上に至り、質を還して訣飲す。且元曰く「吾れ心を苦しめて籌を運し、豊臣氏を利せんと欲す。吾が上策にして聽かるれば、吾れ則ち地を請ひ第を江戸の郊に築き、故に其の規模を宏にして以て數年を延べん。我が君は未だ壯ならず。而して前將軍は大に盡す。吾が策亦善からずや。區區の心、未だ盡く明すに違あらず。乃ち卒に此に至る」と。因つて相郷ひて泣哭し、願望して別る。且元遂に其の邑茨城に歸る。遠近騷擾す。

通釋 秀頼の近臣の今木某が、こつそりと且元の所に来て話すには「本丸の八門の中、六門は貴公が取締つて居られます。今夜そつと兵を率ゐて城を奪ひ取り、治長兄弟を追ひ拂ひ、關東に命令をお仰きなさい。それでも關東が許さなかつたなら、我が君を助けて兵を擧げたら宜いのです。どうぞ直ぐ様御決斷下さい」と。且元は不機嫌に顔をしかめて曰ふには「私は只、奸佞の徒が攻めて來るのを待つて自殺を遂げようと思つてゐるのだ。假りにも貴公の言はるゝやうなことをすれば、何時の世までも謀叛人の名を受けることになる」と。そこで部下に命じて曰ふには「もし戦が起つても、本丸に矢を向けてはならぬ」と。翌日、七隊長は且元に向つて、人質を差し出し兵を解散し、その領地に退き去る様に諭した。且元はそれに従つた。十月一日、治長と人質を交へ、城門の鑰を全部差し出し、事務をすつかり引き繼いで去つた。七隊長は大和川の邊まで送つて行き、人質を戻して別れの酒盛をした。且元が曰ふには「自分は非常に苦心をし計略を運らし、豊臣家に利益有らしめようとした。私

の上策が關東に承諾されたら、私は馳ひ出て江戸の郊外に土地を買つて邸を建て、わざと家の規模を大きくして、工事に數年もかゝるやうにする積りだつた。我が君はまだ壯年(三十歳)にも達せられてゐない。前將軍はもう非常に年を取つてゐる。私の策を善いとは思はれぬか。色々と言らぬことも考へたが、すつかり打明ける暇も無い中に、とう／＼こんなことになつてしまつた」と。そこで向き合つて涙を下し、ふり返り／＼別れて行つた。且元はかくして自分の領地茨城に歸つたが、遠近の者共はその爲めに大分ざわつた。

語釋 蓋(八十を歳といふ意) ○不亦善乎(表面東行といふことにして、大要な工事建築で手間取らせ、愚圖々々してゐる内に家康がある。) 蓋(八十を歳といふ意) ○不亦善乎(表面東行といふことにして、大要な工事建築で手間取らせ、愚圖々々してゐる内に家康がある。)

前將軍遂下令天下共攻大坂。秀頼會諸將議拒守。先是、七隊長更候駿河。治長等疑之、頗收其兵。隊長皆怨望。於是、不出參其議。速水守久和解之。乃出。治長建議曰「宜急舉事。天下比年苦土木、舉皆思亂。至西諸侯、概皆浴先君恩澤。誰不來援者。遂買城下及界浦漕粟、及火藥、移檄四方。關原敗後、潛匿所在者、若諸國獲罪亡命者、爭先來聚。眞田幸村、自高野、長曾我部盛親、自京師、後藤基次、自南都、森勝永、自土佐、其餘內藤政勝、小倉行春、明石守重、御宿政友、塙直次、仙石宗也、岡部則綱、山川

賢信・長岡興秋・北川宣勝等數百人。治長以竹範・鎔・金馬、以募兵。飢寒之士僞姓名、應募。旬日得五萬。而有士將士無一人應者。

訓讀 前將軍遂に命を天下に下し、共に大阪を攻む。秀頼諸將を會して拒守を議す。是より先き、七隊長更と駿河に候す。治長等之を疑ひ、頗る其の兵を收む。隊長皆怨望す。是に於て、出で、其の議に參せず。速水守久之を和解す。乃ち出づ。治長建議して曰く、「宜しく急に事を擧ぐべし。天下比年、土木に苦しみ、擧つて皆亂を思ふ。西諸侯に至つては、概ね皆先君の恩澤に浴す。誰か來り援けざる者ぞ」と。遂に城下及び界浦の漕粟、及び火薬を買ひ、檣を四方に移す。關原の敗後、所在に潛匿する者、若しくは諸國の罪を獲て亡命せる者、先を争うて來り聚る。眞田幸村は高野より、長曾我部盛親は京師より、後藤基次は南都より、森勝永は土佐より、其の餘内藤政勝・小倉行春・明石守重・御宿政友・塙直次・仙石宗也・岡部則綱・山川賢信・長岡興秋・北川宣勝等數百人なり。治長、竹範を以て金馬を鎔し、以て兵を募る。飢寒の士姓名を僞つて募に應じ、旬日に五萬を得たり。而して有士の將士は一人の應ずる者なし。

通釋 前將軍は遂に天下に命令を下して、共に大阪を攻めることになつた。秀頼は諸將を集めて防禦の方法を相談した。それより以前、七隊長は更代に駿河に御機嫌伺ひに出懸けてゐた。治長等は何か有るのではないかと疑つて、其の部下の兵をかなり減らして終つた。その爲めに隊長達は皆怨んでゐた。前將軍が攻めることになつても、七隊長はその相談に關係しなかつた。速水守久が間に立つて之を和解した。そこで漸く出て來た。治長が建議して曰ふには「早速兵を擧げるのが宜いと思ふ。此の頃は全國とも飢饉色々の工事で難儀をしてゐて、皆亂

の起ることを希望してゐる。西國諸大名達は、大抵先君の恩恵を蒙つてゐる。一人として斯げに參らぬ者は無からう」と。そこで大阪城下及び界浦にある米と火薬を買ひ上げ、檣文を四方に飛ばせた。關原の戦敗後、方々に潛み隠れてゐた者や、諸國の罪の爲め逃亡してゐた者共が我れ先きに集まつて來た。眞田幸村は高野から、長曾我部盛親は京師から、後藤基次は南都から、森勝永は土佐から、その他内藤政勝・小倉行春・明石守重・御宿政友・塙直次・仙石宗也・岡部則綱・山川賢信・長岡興秋・北川宣勝等數百人に上つた。治長は竹の鑄型で例の金の馬を鎔かして、お金となし、それで兵を募つた。衣食に苦しんでゐる貧乏武士共が、姓名を僞つて之に應じて來た。十日間に五萬人にもなつた。而も領土を持つてゐる武將で募に應じたものは一人もなかつた。

語釋 漕粟(舟によつて運漕し來) ○竹範(竹を型に爲し、之に金をとかし) 僞(偽るもみこめ) 意(意)

秀頼手書招諸國主。前田氏以下皆縛使者、以其書獻德川氏。治長等意大沮。而事不可中止。乃颺言曰、「諸侯伯皆陰通款於我矣。東軍來夾而擊之耳。」遂修守備。壘高丈餘、十步一樓、北帶淀川、柵于長柄、神崎、二島、東控大和、木津、二川、鷓野。今福以南、至於鷺島、皆臨汗田、爲壁、西據橫港、連砦于川場、博勞淵、葦島、福島、穢多、道頓、諸處、列艦于海口、南穿空壕、交錯材木於壕內、以沮敵馳驅。七隊長曰、「寒不可廣。廣則難守。況以一城抗天下、曠日持久、而驅市人糜糧食、毋爲也。」治長不聽。

訓讀 秀頼手書して諸國主を招く。前田氏以下皆使者を縛し、其の書を以て徳川氏に獻す。治長等意大に沮む。而れども事中止すべからず。乃ち颺言して曰く「諸侯伯、皆陰に歎を我に通す。東軍來らば夾んで之を撃たんのみ」と。遂に守備を修む。壘の高さ丈餘、十歩に一樓、北は淀川を帯びて、長柄・神崎の二島に柵し、東は大和・木津の二川を控へ、鷺野・今福以南、鷺島に至るまで、皆汗田に臨んで壁を爲り、西は横港に據り、砦を川場・博勞淵・葦島・福島・穢多・道頓の諸處に連ね、艦を海口に列ね、南は空壕を穿ち、材木を壕内に交錯して、以て敵の馳驅を沮む。七隊長曰く「寨は廣くすべからず。廣ければ則ち守り難し。況んや一城を以て天下に抗し、日を曠しうして久しきを持するをや。而して市人を驅つて糧食を糜することは、爲す母れ」と。治長聽かず。

通釋 秀頼は自筆の手紙を作つて、諸大名を招いた。前田氏以下、その手紙を貰つた者は皆その使者を縛り、其の手紙を徳川氏に差し出した。治長等は大に意氣沮喪した。けれども今更ら中止も出来なかつた。言ひ觸らして曰ふには「諸大名は皆、私かに我が軍に内通してある。東軍がやつて來たら夾み撃ちにして終ふ迄だ」と。いよく防禦準備を始めた。城中の壘の高さは一丈餘で、十間毎に櫓を一つの割で造つた。北は淀川を中に取つて長柄・神崎の二島に柵をめぐらし、東は大和川と木津川を控へて、鷺野・今福以南、鷺島まで、皆低田に臨んで壘壁を造り、西は横港を據り處にして、川場・博勞淵・葦島・福島・穢多・道頓の諸所に砦を連結し、船を港口に並べ、南は空壕を掘り、材木をその壕の中に縦横に投げ込んで、敵の騎兵が馳せ廻ることのできぬやうにした。七隊長が曰ふには「とりでといふものは廣くすべきものでない。廣いといふと守り難いものです。ましてたつた一城で天下に對抗し、長い間持ちこたへて行かうといふのですもの。そして此の上町人まで追ひ使つて糧食

を無駄に使用するの止した方がよいです」と。治長はき、入れなかつた。

語釋 其書(秀頼の手紙) ○汗田(汗は低き意である。川に) ○糜(無駄に)

眞田幸村不喜受人約束。乃別築偃月城于玉造。阜開東西二門。募信濃遺民得百五十人。秀頼又附以伊木遠雄・山川賢信・北川宣勝等五千人守之。幸村因獻策曰「臣聞徳川氏檄天下兵以來攻我。我坐竢之、無他、奇道度關東北國之兵、強半未至。宜以此時出大旆于天王寺、以勝永與臣爲先鋒、赴于山崎、使盛親基次出大和路、扼宇治橋、攻拔伏見、縱火京師、以大關天下之衢路。則西國諸侯必有來屬者。是一奇也。基次曰「計雖善矣、非萬全者。本城壯固無匹、雖受天下兵、可支三五年。如此則敵必有内變。諸侯被先世恩者、必歸歎於我。何必遠出衆然之。」

訓讀 眞田幸村人の約束を受くるを喜ばず。乃ち別に偃月城を玉造の阜に築き、東西二門を開き、信濃の遺民を募つて百五十人を得たり。秀頼又附するに伊木遠・雄山川賢信・北川宣勝等五千人を以て之を守らしむ。幸村因つて策を獻じて曰く「臣聞く、徳川氏天下の兵に檄して以て來り我を攻む。我れ坐して之を竢ち、他の奇道なし。度るに關東・北國の兵、強半未だ至らず、宜しく此の時を以て、大旆を天王寺に出し、勝永と臣とを以て先

鋒と爲して山崎に赴かしめ、盛親・基次をして大和路に出で、宇治橋を扼し、攻めて伏見を抜き、火を京師に縦ち、以て大に天下の衢路を關さしむべし。則ち西國の諸侯必ず來り屬する者あらん。是れ一奇なり」と。基次曰く「謀善しと雖も、萬全の者に非ず。本城は壯固匹なし。天下の兵を受くと雖も、三五年を支ふべし。此の如くば則ち敵必ず内變あらん。諸侯、先世の恩を被る者、必ず歎を我に歸せん。何ぞ必ずしも遠く出でん」と。衆之を然りとす。

通釋 眞田幸村は人に指圖されることを好まなかつた。以上の他別に玉造、阜に出丸を築き、東西二門を開いて領國信濃の殘黨を募つて百五十人を得た。秀頼はそれに、伊木遠雄・山川賢信・北川宣勝等五千人をつけてそこを守らせた。幸村はそこで一策を上つて曰ふには「私は徳川氏が全國の兵に檄文を廻して我が軍を攻めに來ると聞いてをります。然るにこつちはじつとそれを待つてゐて、別に妙計もありませぬ。私が考へました所では、關東・北國の兵は大半まだ到着致しません。是非今の中に天王寺まで若君御自身打つて出られ、勝永と私とを先鋒にして山崎におやり下さい。盛親と基次をして大和路に出て宇治橋を抑へ、伏見を攻め落し、京都に火をつけて天下の要路を堰き止めさせるが宜しうございます。さうすれば西國の諸大名の中にはきつと我が軍に味方して來る者があります。これは一寸面白いと思ひます」と。基次が曰ふには「計略は中々善いが萬間違ひないといふ策ではない。本城の規模の大きく堅固なことは他に比較すべきものはありません。全國の兵を引き受けても三五年を支へることは出來ます。かく長い間支へてをる中には、敵方に必らず内輪の變事が起つて來ます。すれば諸大名中、先君の御恩を蒙つてゐる者は必ず味方について参りませう。何もそんなにして遠方まで討つて出ることはない」と。一同はそれに賛成をした。

語釋 偃月城(名を偃月城とした城・出丸。其の孫權が須彌場を造り、一形偃す月の如き故であるといふ。)

前將軍將軍率諸侯伯相繼西上。獨留福島正則・黑田長政・加藤嘉明・平野長泰・谷衛友于江戸、不許從軍。正則潛應大坂、需自其封安藝、輸粟五萬石。其二姪正守・正鎮、皆入城守。以故最見疑。竹中重信受命自駿河赴江戸、諭旨正則。正則因以書諫秀頼曰「郎君因事忤關東旨、遂動兵馬。是自速亡滅也。願改其圖、奉淀君子關東。以計無事。不則老奴爲東軍先鋒、一舉拔城。君其勿悔。豐臣氏安危將決於此。願熟計之。」前將軍途覽其書、遂不許從。秀頼得書亦無所答。重信復受命赴安藝、使正則子正勝治兵會師。正則遙戒其老福島丹波尾關石見曰「汝輩輔我兒、以應郎君。莫以我爲也。郎君而成事、吾死不恨。不然則吾何以見太閤地下哉。丹波欲從命、石見爭之曰「吾儕之於主公猶主公之於右府也。吾儕何可禍主公哉。遂擁正勝會東軍。蜂須賀家政既老、首迎謁東軍。」

訓讀

前將軍・將軍、諸侯伯を率ゐて相繼いで西上す。獨り福島正則・黑田長政・加藤嘉明・平野長泰・谷衛

友を江戸に留め、軍に従ふを許さず。正則潛かに大坂の需に應じ、其の封安藝より粟五萬石を輸す。其の二姪正守・正鎮、皆入つて城守す。故を以て最も疑はる。竹中重信命を受けて駿河より江戸に赴き、旨を正則に諭す。正則因つて書を以て秀頼を諫めて曰く「郎君、事に因つて關東の旨に忤ひ、遂に兵馬を動かす。是れ自ら亡滅を速くなり。願はくは其の圖を改め、淀君を關東に奉じ以て無事を計れ。不らざれば則ち老奴、東軍の先鋒と爲り、一舉城を抜かん。君其れ悔ゆる勿れ。豊臣氏の安危、將に此に決せんとす。願はくは之を熟計せよ」と。前將軍途に其の書を覽るも、遂に従ふを許さず。秀頼書を得て亦答ふる所なし。重信復命を受けて安藝に赴き、正則の子正勝をして、兵を治めて師に會せしむ。正則遂に其の老福島丹波・尾關石見を戒めて曰く「汝が輩、我が兒を輔けて以て郎君に應ぜよ。我を以て爲す莫れ。郎君にして事を爲さば、吾れ死すとも恨みず。然らずんば則ち吾れ何を以て太閤に地下に見えんや」と。丹波命に従はんと欲す。石見之を争うて曰く「吾が儕の主公に於ける、猶ほ主公の右府に於けるが如し。吾が儕何ぞ主公に禍すべけんや」と。遂に正勝を擁して東軍に會す。蜂須賀家政既に老す。首として東軍に迎謁す。

通釋 前將軍・將軍は諸大名を率ゐて次ぎ々と西上した。福島正則・黒田長政・加藤嘉明・平野長泰・谷衛友の五人だけは江戸に残して置いて從軍することを許さなかつた。正則はひそかに大阪の要求に應じ、自分の領地安藝からもみ五萬石を送つた。又二人の姪の正守と正鎮とが共に大阪に入城して守備についた。そんな譯で一番疑はれてゐた。竹中重友は命を受けて駿河から江戸に出向き、内命を傳へた。そこで正則は手紙を書いて秀頼を諫めて曰ふには「若君は此の度の事から關東の意向に逆ひ、遂に軍隊を動かさるゝことになりましたのは、御自分から滅亡を招くやうなもので御座います。どうぞそのお考へを改められ、淀君様を關東にお移しして無事

を計られまするやう。然らざれば老奴は東軍の先鋒となつて、一息に大阪を攻め落します。その時に後悔遊ばされざるやう願ひます。豊臣の安危難は此の際にお考へ一つによつて定まるのであります。どうぞよくお考へ召されよ」と。前將軍は西上の途中にその手紙を讀んだが、やはり從軍を許さなかつた。秀頼もその手紙を見て返事をやらなかつた。重信はまた命を受けて安藝に出向き、正則の子の正勝に、軍隊を纏めて大阪征伐の關東軍に加はらせようとした。正則は江戸から遙々家老の福島丹波と尾關石見に注意を與へて曰ふには「お前達は我が子を助けて、若君に味方せよ。私の眞似をしてぐづぐづしてゐてはならぬ。若君がもしも成功遊ばされたる曉には、私はたとひ死んでも恨みはない。然らずんば私はどの顔をして太閤殿下に冥途でお目にか、らうか」と。丹波はその命に従はうとした。石見はそれを争つて曰ふには「我々が殿様に對する態度は、殿様が右府公に對する態度と同じであるべきである。我々はどうして主家に禍のかゝる様な取計ひをしてよからうか」と。到頭正勝を守つて東軍に味方した。蜂須賀家政はこの時にはもう隱居してゐた。併し眞つ先に東軍を迎へて徳川氏に謁した。

片桐且元嘗託其貲于界浦人宗薫。宗薫告城兵來掠界浦。且元乃遣兵二百援之。至尼崎城。索舟。尼崎人疑而不許。大坂兵出擊且元。城兵亦不援。且元退守神崎。土民聞其叛大坂也。争起要之。與城兵合擊。遂慶其兵。且元僅免。於是前將軍至京師。召見之。且元辭曰「臣計輯和。乃開大隙。何以見爲。前將軍曰「兵起非汝罪。宜亟來此。

更爲後圖

訓讀 片桐且元嘗て其の費を界浦の人宗薫に託す。宗薫、城兵來つて界浦を掠むと告ぐ。且元乃ち兵二百を遣はして之を援く。尼崎城に至り舟を索む。尼崎の人疑つて許さず。大坂の兵出で、且元を撃つ。城兵亦援けず。且元退いて神崎を守る。士民其の大坂に叛すと聞くや、争ひ起つて之を要し、城兵と合撃して遂に其の兵を盡す。且元僅に免る。是に於て、前將軍京師に至り、之を召見す。且元辭して曰く「臣輯和を計り、乃ち大隙を開く。何を以て見ゆるを爲さん」と。前將軍曰く「兵起るは汝が罪に非ず。宜しく亟に此に來り、更に後圖を爲すべし」と。

通釋 片桐且元は前に自分の財産を界港の宗薫といふ人に預けておいた。その宗薫が、大坂城の兵が界港を荒しに來たと知らせた。且元は兵を二百人やつて宗薫を助けさせることにした。尼崎城まで行つて舟を索めた。尼崎の人は疑つて許さなかつた。所へ大坂の兵が來て且元を攻めた。尼崎城の兵は助けなかつた。且元は退いて神崎を守つた。士民は彼が大坂方に叛いたと聞いて、我も我もとやつて來て待ち受け、城兵と合撃して遂に且元の兵を皆殺しにした。且元は辛うじて免れた。この時に前將軍は京都につき且元を召しよせた。且元は辭退して曰ふには「私は和解を骨折つて、ひどい仲違ひを出來して終ひました。今更お會ひする面目もありません」と。前將軍が曰ふには「今度の戦はお前の責任ではない。とに角早速こゝに來て、後々の策を立てるが宜しからう」と。

輯和(あつらひ)

藤堂高虎爲東軍先鋒來陣住吉郡良列窺其孤軍欲襲之議不諧而止良列又欲遣間諜縱火兩將軍營亦不用東軍患二島難濟壅其上流城兵出爭之不克十一月池田氏兵自神崎濟城兵出距不利幸村基次等建議曰將軍不日至天王寺及其未陣襲之必克治長曰是可用之小戰今與天下戰始合失利不可復振不若致之堅城下而挫其鋒也幸村等曰以寡擊衆自非出奇何得勝乎良列亦勸之終弗聽已而東軍悉至列營四外大凡五十萬許治長發間使誘舊屬諸將諸將皆捕其使獻之前將軍

訓讀 藤堂高虎東軍の先鋒と爲り、來つて住吉に陣す。郡良列其の孤軍を窺ひ、之を襲はんと欲す。議諧はずして止む。良列、又間諜を遣はし、火を兩將軍の營に縱たんと欲す。亦用ひられず。東軍、二島の濟り難きを患へ、其の上流を壅ぐ。城兵出で、之を争ふ。克たず。十一月、池田氏の兵神崎より濟る。城兵出で距ぐ。利あらず。幸村・基次等建議して曰く「將軍不日、天王寺に至らん。其の未だ陣せざるに及んで之を襲はば必ず克たん」と。治長曰く「是れ之を小戦に用ふべし。今天下と戦ふ。始め合せて利を失はば、復振ふべからず。之を堅城の下に致して其の鋒を挫くに若かさるなり」と。幸村等曰く「寡を以て衆を撃つ。奇を出すに非ざるよりは、何ぞ勝

を得んや」と。良列も亦之を勸む。終に聽かず。已にして東軍悉く至り、營を四外に列す。大凡五十萬許り。治長間使を發して舊屬の諸將を誘ふ。諸將、皆其の使を捕へ、之を前將軍に獻す。

通釋 藤堂高虎は東軍の先鋒として、住吉に来て陣取つた。郡良列はその獨立部隊であること知つて襲はんとした。併し相談が纏まらないで止めた。良列は又忍びの者をやつて前將軍と將軍の陣屋に火をつけさせようとした。この謀も用ひられなかつた。東軍は長柄・神崎の二島へ川を渡つて上ることは中々困難だと考へて、淀川の上流を堰きとめた。城兵は出て行つてさうさせまいと争つたが打ち負かすことが出来なかつた。十一月、池田氏の兵が神崎の方から川を渡つた。城兵は出て防いだ。併し敗れた。幸村・基次等が建議していふには「將軍がその内に天王寺にやつて来る。その軍隊がまだ陣を整備しない中に襲つたら、必ず捷を得ることが出来るだらう」と。治長が曰ふには「さういふやり方は小規模な戦争には好い。今は天下を相手にしてゐるのだ。始めの合戦で負けると、後いつまでもそれが祟つて軍勢が振はなくなるものだ。敵を要害堅固なこの大阪城の下までおびき寄せて、その銳鋒を挫くのが最もよいと思ふ」と。幸村等が曰ふには「小勢で多勢を撃つのです。奇計を考へ出さなくてはとても勝は難いのでせう」と。良列もそれを勧めた。治長はどうしても承知しなかつた。その内に東軍は全部到着して、四方に陣屋を並べた。全軍凡そ五十萬許りである。治長は祕密の使者を出して、前に豊臣方であつた諸將を誘つた。彼等は皆その使者を捕へて、前將軍に差出した。

語釋 二島(長柄、)〇四外(四方の)城外)

前將軍遣書城内使請和不肯幸村叔父信尹從在東軍前將軍使之入諭幸村降

之。幸村答曰「關原之役臣父子屬西軍以寡兵抗大師及敗遁逃伏匿山野右府不以臣陋劣授臣以數千兵使將一面是知臣也士爲知己者死臣死不能負焉信尹復命再遣說之曰苟降則封以信濃地世世母絶幸村曰爲我謝前將軍臣一死報右府不知其他有如東西弭兵臣當寄食叔父耳不然則雖受日本之半而不能奉命矣願叔父勿復來也」

訓讀 前將軍書を城内に遣はし、和を請はしむ。肯んぜず。幸村の叔父信尹從つて東軍に在り。前將軍之をして入つて幸村を諭して之を降さしむ。幸村答へて曰く「關原の役に臣が父子西軍に屬し、寡兵を以て大師に抗し敗るゝに及んで遁逃し、山野に伏匿せり。右府、臣の陋劣を以てせず、臣に授くるに數千の兵を以てし、一面に將たらしむ。是れ臣を知るなり。士は己を知るもの、爲めに死す。臣死すとも負く能はず」と。信尹復命す。再び遣はして之に説かして曰く「苟も降らば則ち封するに信濃の地を以てし、世世絶つ母からん」と。幸村曰く「我が爲に前將軍に謝せよ。臣、一死右府に報ず。其の他を知らず。東西、兵を弭むるが如きことあらば、臣當に叔父に寄食すべきのみ。然らずんば則ち日本の半を受くと雖も、而も命を奉ずる能はず。願はくは叔父、復來る勿れと」。

通釋 前將軍は城内に手紙をやつて、和睦を願ひ出る様にと言つた。併し承諾しなかつた。幸村の叔父の信尹

は、東軍に従つてゐた。前將軍は彼に城内に行つて幸村に降参するやうにと諭させた。幸村は答へて曰ふのに「關原の役に私父子は西軍に味方し、小勢の兵力で大軍に抵抗しましたが、戦に敗れてからは逃げ出して邊鄙な在所に隠れてをりました。所が此の度、右府殿は私の愚かしき力量をも顧みず、數千の兵をお預け下され、一方の大將と爲されました。これは全く私をよく諒解して下さる爲めでありませぬ。武士は己を知つてくれる人の爲めに命を棄てるといふことであります。私はたとひ死んでも、右府殿に反くことは出来ませぬ」と。信尹はその通り報告した。前將軍は再び信尹を城中にやつて曰はせるには「只降参しなへすれば、信濃の國を領地と爲し、代々斷絶せぬ様に取計つてやり度いが」と。幸村が曰ふには「私の代りに前將軍に禮を述べて下され。私は一死を捨て、右府殿の恩に報いる許りです。その外のことには存じませぬ。東西兩軍が戦争を罷めた曉には、私は叔父上の食客になるばかりです。戦争が續く以上、日本の半分を頂戴しても仰せに従ふことはできません。どうぞ叔父さんはお出なさらぬやうに」と。

前將軍與木村重成、父重茲有故。又招降之。重成不應。薄田兼相守穢多崎。蜂須賀至鎮來攻之。兼相飲於倡家。其兵留守、不支而走。兼相深以爲恥。已而鶴野柵爲上杉景勝所破。今福柵爲佐竹義宣所破。木村重成聞急、單騎出拒義宣。渡部尙與七隊長出拒景勝。秀頼自城樓望見之。顧基次往援重成。基次即起。從士取鎧及之。京橋振而馳。謂重成曰「公勞矣。僕請代之。」重成曰「事方殷。代將則陣亂。公老於兵者、何爲是言也。」基次乃陣其後。泛舟澤中。排楫放銃。橫擊義宣陣。重成因大破之。斃其老澁江正光。尙等亦擊破景勝。前軍竟不利退。重成基次亦收兵。基次中丸傷其左肋。捫之曰「吾創不至死。右府命厚矣。」已而以柵難守、棄而入城。

訓 前將軍、木村重成の父重茲と故あり。又之を招降す。重成應ぜず。薄田兼相、穢多崎を守る。蜂須賀至鎮來つて之を攻む。兼相、倡家に飲す。其の兵留守し、支へずして走る。兼相深く以て恥と爲す。已にして鶴野の柵上杉景勝の破る所と爲り、今福の柵佐竹義宣の破る所と爲る。木村重成急を聞き、單騎出で、義宣を拒ぐ。渡部尙、七隊長と出で、景勝を拒ぐ。秀頼、城樓より之を望見し、基次を顧み、往いて重成を援けしむ。基次即ち起つ。從士鎧を取り、之に京橋に及ぶ。振して馳す。重成に謂つて曰く「公勞せり。僕請ふ之に代らん」と。重成曰く「一事、方に殷なり。將を代ふれば則ち陣亂る。公は兵に老いたるもの、何ぞ是の言を爲すや」と。基次乃ち其後に陣し、舟を澤中に泛べ、楫を排して銃を放ち、横に義宣の陣を撃つ。重成因つて大に之を破り、其老澁江正光を斃す。尙等も亦、景勝の前軍を撃破し、竟に利あらずして退く。重成・基次も亦兵を收む。基次丸に中り、其左肋を傷く。之を捫して曰く「吾が創死に至らず。右府の命厚し」と。已にして柵守り難きを以て、棄て、城に入る。

通釋 前將軍は木村重成の父重茲と友人關係であつた。重成をも招き降さうとした。重成は應じなかつた。薄田兼相は穢多崎を守つてゐた。蜂須賀至鎮が攻めて來た。丁度兼相は女郎屋で酒を飲んでゐた。部下の兵隊が守

つてあだが、防ぎ止められないで逃げ走つた。兼相は深くそれを恥ぢた。その内に鶴野の柵は上杉景勝に破られ、今福の柵は佐竹義宣に破られた。木村重成は今福の危急の知らせに、唯一騎走り出て義宣を防いだ。鶴野の方は渡部尙が七隊長と共に出張つて景勝を防いだ。秀頼は城の櫓からそれを打ち眺め、基次を振り返つて重成を援けに行くやうに言つた。基次は即坐に立ち上つて出かけた。從卒は鎧を持つて後追ひかけ、京橋で追ひついた。基次はそれをつけて馬を走らせた。重成に向つて曰ふには「貴公は疲れてをる。どうか僕に代らせてくれ」と。重成が曰ふには「今丁度真最中だ。大將を代へると陣形が亂れる。貴公は戦略に長けた方であるのに、何故左様なことを言はれる」と。基次はそこで後方に陣を構へ、沼の中に舟を出し、楯を並べてその間から鐵砲を放し、側面から義宣の陣を撃つた。その援護射撃のお蔭で重成は大に敵を打ち破り、佐竹の家老の澁江正光を討ち取つた。尙等も景勝の前衛隊を撃破したが、到頭戦敗れて退却した。重成・基次も兵を引き纏めた。基次は銃丸に當り、その左肋を負傷した。その傷所を押へて曰ふには「この傷では死なずに濟んだ。右府殿の御運は強くあらせられる」と。その内にこれらの柵は守り難くなつたので、何れも放棄して城中に引き揚げた。

語釋 京橋 城北の備前島に架してある橋。

片桐且元入軍備前島。而葦島・博勞淵前後皆陷。池田・淺野・蜂須賀諸將自西北進。七隊長曰「吾輩固曰、廣者難守。適以增敵氣耳。宜棄天滿・川場・道頓港三寨。約之内城。治房以萬人守道頓港。獨不肯。即夜諸將託軍議。召之。遣基次等燒諸壘寨。治房部下驚走入城。基次伏死。士誠曰「備前之軍其將年少氣銳。必來於此。汝輩突起取之。池田忠繼在福島望火。果欲馳入川場。其將花房職之曰「後藤多謀。必有伏也。乃止。伏兵徒歸。基次曰「花房未死乎。十二月、東軍入三寨。即夜大野治長第失火。東軍意城兵有內應者。自京橋口進。城兵堅拒卻之。

訓讀 片桐且元入つて備前島に軍す。而して葦島・博勞淵、前後皆陷る。池田・淺野・蜂須賀の諸將西北より進む。七隊長曰く「吾が輩固より曰く、廣ければ守り難しと。適、以て敵の氣を増すのみ。宜しく天滿・川場・道頓港の三寨を棄て、之を内城に約すべし」と。治房、萬人を以て道頓港を守り、獨り肯んぜず。即夜諸將、軍議に託して之を召し、基次等を遣はして諸壘寨を燒かしむ。治房の部下、驚き走つて城に入る。基次死士を伏せ、誠めて曰く「備前の軍、其の將年少く氣鋭し。必ず此に來らん。汝が輩突起して之を取れ」と。池田忠繼福島に在つて火を望み、果して馳せて川場に入らんと欲す。其の將花房職之曰く「後藤多謀。必ず伏あらん」と。乃ち止む。伏兵徒に歸る。基次曰く「花房未だ死せざる乎」と。十二月、東軍三寨に入る。即夜大野治長の第、火を失す。東軍、城兵に内應する者ありと意ひ、京橋口より進む。城兵堅く拒いで之を卻く。

通釋 片桐且元は入つて備前島に陣取つた。そして葦島・博勞淵は前後して陥落した。池田・淺野・蜂須賀の諸將は西北から進んで行つた。七隊長が曰ふには「我々は前々から、守備區域が廣いと守り難いと言つてあつた。やゝもすれば敵の元氣を増させる様になるだけだ。こゝは一つ天滿・川場・道頓港の三つの寨を放棄して、

その兵を本丸内に纏めておくやうにするがよい」と。治房は一萬人を率ゐて道頓港を守つてゐたが、獨りその説に承服しなかつた。直ぐその晩、諸將は軍評定の口實で彼を呼びつけ、基次等をやつて諸所の壘や寨を焼き拂はせた。治房の部下は驚き走つて城に入つた。基次は決死隊を隠し、深く注意して曰ふには「備前池田氏の軍は、大將が年少氣鋭だ。必ずこゝに攻め寄せると違ひない。そしたらお前達は飛び出して打ち破つて終へ」と。池田忠繼は福島に居つてその火を見付け、基次の言葉通り、馳せて川場に攻め入らうとした。その將の花房職之が曰ふには「後藤は策謀家故、きつと伏兵が御座いませう」と。そこでその襲撃は止めにした。伏兵は手持無沙汰で歸つて來た。基次が曰ふには「花房の奴まだ生きて居るな」と。十二月、東軍がその三寨に入つた。すぐその晩、大野治長の住居から火事が出た。東軍は城兵に内應をする者が有るのだと思つて、京橋口から進んで攻めた。城兵はよく拒いで之を退けた。

語釋 約之内城(約は、つゞめる、まとめおくの義。三寨の努力を内城に集結しおく意。)

幸村與前田利光對壘、出銃手于城外林中、日斃敵兵。利光先鋒奧村某欲奪林以爲功。幸村諜知之、潛收其兵。奧村至不見一人。城兵自銃眼指而笑曰「公等索狐兔乎。奧村忿、踰濠攀壁、則銃矢交發、殺傷數百人。南條光明在南壁、其叔父與藤堂高虎相識。高虎約書于矢、射壁上招降之。叔姪合謀、欲導高虎、兵期四日黎明事覺。秀

頼與諸將議、族誅之、而不更其幟。列銃以埃。黎明、藤堂氏井伊氏合兵、傳壁加賀。越前兵亦逼幸村壘下。皆遇銃而敗。會櫓上失火、敵二百人乘之而登。幸村擊之。是日之戰、自卯至午、而城兵不損一人。織田長頼守星谷口。其卒私鬪。東軍乘喧疾攻。秀頼遣北川宣勝等、援擊卻東軍。

訓讀 幸村、前田利光と壘を對し、銃手を城外の林中に出し、日に敵兵を斃す。利光の先鋒奧村某、林を奪つて以て功を爲さんと欲す。幸村諜して之を知り、潛に其の兵を收む。奧村至り一人を見ず。城兵銃眼より指して笑つて曰く「公等、狐兔を索むるか」と。奧村忿り、濠を踰え壁を攀づれば、則ち銃矢交々發し、數百人を殺傷す。南條光明、南壁に在り。其の叔父、藤堂高虎と相識る。高虎書を矢に約し、壁上に射て之を招降す。叔姪謀を合せて高虎の兵を導かんと欲す。四日の黎明を期す。事覺る。秀頼諸將と議して之を族誅し、而して其の幟を更へず。銃を列ねて以て埃つ。黎明、藤堂氏・井伊氏兵を合せて壁を傳く。加賀・越前の兵も亦幸村の壘下に逼る。皆銃に遇つて敗る。會、櫓上火を失ふ。敵二百人乘じて登る。幸村撃つて之を塵にす。是の日の戰、卯より午に至つて、城兵一人を損せず。織田長頼、星谷口を守る。其の卒私鬪す。東軍喧に乗じて疾く攻む。秀頼、北川宣勝等を遣はし、援け撃つて東軍を卻く。

通釋 幸村は前田利光と向き合つて壘を構へてゐたが、鐵砲隊を城外の林中に出して、毎日敵兵を打ち殺してゐた。利光の前鋒の奧村某はその林を奪取して手柄を立てようと思つた。幸村は斥候によつてそれを察知し、そ

つと林中の兵を引き揚げて終つた。奥村は来て見ると一人も見えない。城兵が銃眼から顔を出して指し乍ら、笑つて曰ふには「貴公達は狐か兎でも探してゐるのかね」と。そこで大に腹を立て、濠をこえ、城壁に攀ち上つて来た。すると城の上から鐵砲丸や矢を釣瓶打ちに放したので、殺傷すること數百人であつた。南條光明は大坂城の側の城壁を守つてゐた。その叔父が藤堂高虎と識合であつた。高虎は手紙を矢に括つて城壁に射上げ、光明を招き降した。そこでこの叔父姪は共謀して高虎の兵を案内することになつた。其の時刻は四日の夜明と定めた。所がそれが發覺した。秀頼は諸將と相談して、その一族残らず誅殺した。そしてその幟はわざとそのままにして(如何にも光明が守つてゐる様に見せかけて)夜明を待つた。夜明になると、藤堂氏・井伊氏が兵を合せて城壁に近づいて来た。加賀・越前の兵も幸村の壘の下に攻め寄せた。何れも鐵砲丸の見舞を受けて敗れた。丁度その折、城の櫓の上で火を失した。敵二百人がそれに乘じて登つて来た。幸村は攻め撃つて皆殺しにした。此の日の戦は卯の刻(午前六時)から午の刻(午後零時)まで續いたが、城兵は一人も損害が無かつた。織田長頼は星谷口を守つてゐた。所がその兵卒が喧嘩をした。東軍がそのどさくさに乘じて烈しく攻め寄せた。秀頼は北川宣勝等を遣り、援け撃つて東軍を卻けた。

語釋 銃眼(鐵砲を發射する爲め、城壁の牆) ○星谷口(城門の名)

東軍於是自天王寺口穴地而進。城兵亦穴地而拒之。東軍休戰、每夜發砲而闕。城兵亦發砲而闕。前將軍數遺書於織田長益、勸和、要二事曰「毀羅城、填周池。若徒封

大和、若以淀君爲質、皆不肯。然城兵聞和議起、守備頗怠。而東使至、愈頻。長益、治長以秀頼、旨使答之曰「雖果成和、而諸客兵不忍棄之。願得益封、議乃輟。」

訓讀 東軍是に於て、天王寺口より地に穴して進む。城兵も亦地に穴して之を拒ぐ。東軍戰を休め、毎夜砲を發して闕す。城兵も亦砲を發して闕す。前將軍數、書を織田長益に遺つて和を勸め、三事を要して曰く「羅城を毀ち周池を填めん。若しくは封を大和に徙さん。若しくは淀君を以て質と爲せ」と。皆肯んせず。然れども城兵和議起ると聞いて、守備頗る怠る。而して東使至ること愈々頻なり。長益・治長、秀頼の旨を以て使をして之に答へしめて曰く「果して和を成すと雖も、而も諸客兵は之を棄つるに忍びず。願はくは封を益を得ん」と。議乃ち輟む。

通釋 東軍はそこで、天王寺口から地中に穴を掘つて進んだ。城兵も穴を掘つてそれを防いだ。東軍は戰を止めて終つて、毎晩、大砲を放つてはときの聲を擧げた。城兵も大砲を打つては、ときの聲を擧げた。前將軍は度織田長益に手紙を送つて和睦を勸め、次の三ヶ條の一つを要件とした。即ち二の丸を破壊して外堀を填めること。でなければ大和に領地替へをすること、然らずんば淀君を人質にすること。だが、どれも承知しなかつた。けれども共城兵は和議が起つたと聞いて、守備が餘程好い加減になつて来た。そこへ持つて来て、關東方の使者は益々頻繁にやつて来た。長益と治長とは秀頼の内命で使者に返事をさせて曰ふには「誠に和睦が出来ても、諸所の客分の兵隊達を棄て、終ふのは可哀相だ。その扶持料に祿を増して貰ひ度い」と。この和睦話はそこで中止となつた。

語釋 天王寺口(城の南) ○客兵(諸方面から新たに募つた兵)

塙直次・長岡貞安、請大野治房曰、「受圍日久。不一出戰、軍氣何得振。今備前・阿波、兵陣本街橋、南北宜分兵襲之。」治房曰、「吾亦欲之。夜戰、利於寡寡而分之、恐不能克。宜專襲其一軍。」乃揀壯士百餘、申暗令、以直次・貞安將之、出斫阿波營、斬其將中村重勝。治房與御宿政友、出迎之橋上而還。

訓讀 塙直次・長岡貞安、大野治房に請うて曰く、「圍を受くること日久し。一たび出で戦はずんば、軍氣何ぞ振ふを得ん。今、備前・阿波の兵、本街橋の南北に陣す。宜しく兵を分つて之を襲ふべし」と。治房曰く、「吾も亦之を欲す。夜戦は寡に利あり。寡にして之を分つ、恐らくは克つ能はざらん。宜しく専ら其一軍を襲ふべし」と。乃ち壯士百餘を揀び、暗令を申べ、直次・貞安を以て之に將とし、出で、阿波の營を斫り、其將中村重勝を斬る。治房、御宿政友と出で、之を橋上に迎へて還る。

通釋 塙直次と長岡貞安は大野治房に願ひ出で曰ふには「包圍されてから随分日が経ちました。一度城を出て戦はないと士氣を盛んにすることが出来ません。今備前と阿波の軍が本街橋の南と北とに陣してゐます。兵を二手に分けて襲撃するが宜いと思ひます」と。治房が曰ふには「自分もさうしたいと思つてゐる。一體夜戦は小勢の方に勝目がある。併しその小勢を又二つに分けるといふが、それでは勝利を得ることは難しくなりはしないか」と思ふ。これは唯その片一方だけを襲ふ方がよい」と。そこで元氣一杯な兵隊百餘人を選抜し、暗號をよく定め、直次と貞安を指揮官にして、城を出で阿波軍の陣營に斬り込み、その大將の中村重勝を討ち取つた。治房は御宿政友と共に橋の上まで迎へに出て、一緒に城中に歸つた。

當是時、天下諸侯皆從東軍。未至者、獨島津氏而已。京極高次、子忠高從攻城。其母常光在京師。前將軍以其爲淀君妹也、使人迎之以講和議。又陰誘降城兵。淀君遂使治長・長益勸秀賴。秀賴召七隊長及新附將士議。或曰、「關東之謀不可測也。宜嬰城二三年、以俟敵有變。」或曰、「諸侯無援者、而城兵有貳者、以有貳之兵守無援之城、而城內糧仗不足以支三年。不若媾和以爲後圖也。」治長・長益欲和、說秀賴甚力。秀賴曰、「片桐且元爲我盡忠、以計無事。汝輩乃沮之、勸我舉事。今何與前言相反也。」會常光氏至、德瀨淀君數往復傳東旨。終約逐客兵、填周池。長益出子尙長、治長出子治德爲質。十九日和成。翌夜、茶臼山下失火、延燒二十餘營。幸村曰、「敵新和而懈備。宜掩擊之。」治長等不許。

訓讀 是の時に當り、天下の諸侯、皆東軍に従ふ。未だ至らざる者獨り島津氏のみ。京極高次の子忠高従つて城を攻む。其母常光、京師に在り。前將軍其淀君の妹たるを以て、人をして之を迎へ以て和議を講ぜしむ。又陰に城兵を誘降す。淀君遂に治長・長益をして秀頼に勧めしむ。秀頼、七隊長及び新附の將士を召して議す。或ひと曰く「關東の謀測る可からざるなり。宜しく城に要る二三年、以て敵の變あるを俟つべし」と。或ひと曰く「諸侯の援くる者なく、而して城兵貳ある者あり。貳あるの兵を以て、援なきの城を守る。而して城内の糧仗は以て三年を支ふるに足らず。媾和して以て後圖を爲すに若かず」と。治長・長益和せんと欲し、秀頼に説くこと甚だ力む。秀頼曰く「片桐且元は我が爲に忠を盡し以て無事を計る。汝が輩乃ち之を沮み、我を勸めて事を擧げしむ。今何ぞ前言と相反するや」と。會、常光氏至り、淀君を慫慂し、數、往復して東旨を傳ふ。終に客兵を逐ひ、周池を填めんと約す。長益は子尙長を出し、治長は子治徳を出し質と爲す。十九日、和成る。翌夜、茶臼山の下火を失し、二十餘營を延焼す。幸村曰く「敵、新に和して備を懈る。宜しく之を掩撃すべし」と。治長等許さず。

通釋 此の當時、全國の諸大名は皆東軍に従ひ、まだやつて來ないものは島津氏だけであつた。京極高次の子の忠高も從軍して城を攻めて居た。その母の常光といふ者は京都に居た。淀君の妹に當るので、前將軍は人を迎へにやつて和陸の相談をさせた。又ひそかに城兵を誘つて降参させようとしたりしてゐた。遂に淀君は治長と長益をして秀頼に降伏を勧めさせた。秀頼は七隊長並びに今度新たに味方についた將士を召して相談をした。或る者が曰ふには「關東の謀は中々見通しがつかず、當てになりませぬ。こゝ二三年籠城して、敵方に變事の起るのを待つてをるが宜しい」と。又或る者が曰ふには「諸大名には一人も援けに來る者がなく、城兵には二心を抱く者がある。二心のある軍隊で孤立無援の城を守るのです。且つ城内の兵器武器も三年を持ちこたへるには不

足です。媾和して後の事は又後で計畫するのがよいと思ひます」と。治長と長益は和睦を徹し、非常な熱心で秀頼に説得した。秀頼が曰ふには「片桐且元は自分の爲に忠義を盡して無事を計つてくれ。お前達はそれを邪魔して、私に兵を起すことを勧めた。今の言葉は前とは裏腹ではないか」と。折から常光氏が城中にやつて來て淀君にすゝめ、度々往復して關東方の意向を傳へた。それで終に他所から加勢に來てゐる客兵を逐ひ出し、周圍の堀を填めることを約束した。長益は子の尙長を出し、治長は治徳を出して人質とした。十九日に和議が成立した。その翌晩、茶臼山の麓で火事を出して二十餘りの陣屋に延焼した。幸村が曰ふには「敵は今度和睦が出來た許りで防備を怠つてゐる。どつと不意討をかけるがい」と。治長等はそれを許さなかつた。

語釋 茶臼山(天王寺の西)

二十日、前將軍遣板倉重昌、將軍遣阿部正次、入莅誓焉。秀頼遣木村重成、出莅誓焉。而以郡良列爲之副。重成年少有風儀。盛服騎馬、抵茶臼山營、自轅門下馬。關東諸將設臚幕中、引重成。重成不揖而入。永井直勝、土井利勝、擯之、使坐。下座。重成不顧而進、叙秀頼旨、然後退伏。前將軍曰「是常陸介子乎。何酷肖父也。」因問其齡。曰「二十二矣。」曰「然則與右府同年矣。往日鷓野今福之戰、壯勇無雙。」重成慨然對曰「臣有遺憾焉。」已而誓書出。押血模糊。重成曰「淀君婦人、恐有疑焉。敢請更面刺鮮血。」前將

軍鉞於指曰「年老血枯」重成爲不聞者遂取血誓拜謝而退禮諸將乃還。

二十日、前將軍、板倉重昌を遣はし、將軍、阿部正次を遣はし、入つて誓に莅ましむ。秀頼、木村重成を遣はし、出で、誓に莅ましむ。而して郡良列を以て之が副と爲す。重成、年少くして風儀あり。盛服、馬に騎し、茶臼山の營に抵り、轅門より馬を下る。關東の諸將、臚を幕中に設け、重成を引く。重成揖せずして入る。永井直勝・土井利勝之を擯し、下座に坐せしむ。重成顧みずして進み、秀頼の旨を叙し、然る後、退き伏す。前將軍曰く「是れ常陸介の子か。何ぞ酷だ父に肖たるや」と。因つて其齡を問ふ。曰く「二十二なり」と。曰く「然らば則ち右府と同年なり。往日、鶴野・今福の戰には壯勇無雙なりし」と。重成慨然として對へて曰く「臣、遺憾あり」と。已にして誓書出づ。押血模糊たり。重成曰く「淀君は婦人、恐らくは疑ふあらん。敢て請ふ更に面のあたり鮮血を刺せ」と。前將軍指に鉞して曰く「年老い血枯る」と。重成聞かざる者の爲して遂に血誓を取り、拜謝して退き、諸將に禮して乃ち還る。

二十日、前將軍は板倉重昌を遣はし、將軍は阿部正次を遣はして城中に入つて誓の場に臨席させた。秀頼は木村重成を遣はして、城を出て誓の場所に赴かせた。郡良列が重成の介添に爲つた。重成は年が若い風采威儀が立派であつた。大禮服を着て馬に乗り、茶臼山の本營に着いて陣門より馬を下りた。關東の諸將は陣幕の中に坐席を設けておいて重成を引き入れた。重成は會釋もせず幕中に入つた。永井直勝と土井利勝が彼を案内して下座に着かせようとした。彼は構はずに進んで秀頼の意向を述べ、それが終つてから後に退いて拜伏した。前將軍が曰ふには「これが常陸介(木村重成)の子息か。何とよく親爺に似られたことぢや」と。そこで年

を尋ねると曰ふには「二十二で御座います」と。曰ふには「それならば右府殿と同年ぢやな。先達の鶴野・今福の戰はまことに雙びな勇壯ぢやつた」と。重成は無念さうに答へて曰ふには「私はまだ心残りなことが御座います」と。その内に誓書が持ち出された。血判が薄ぼんやりしてゐた。重成が曰ふには「淀君は御婦人です。疑はれるやうなことがあるかも知れませぬ。失禮乍ら今一應この面前にて鮮血をお出し下さいますやう」と。前將軍は指を針で刺して曰ふには「年を取つて血が少なくなつた」と。重成はそれを聞かない振りをして遂に血判誓文を受取り、禮を言ひ挨拶をして退り、諸將にも挨拶して立ち戻つた。

語釋 莅誓 その場に立ち合ひて誓ふことをいふ。臚 列、陳と同義。この所は着座。不揖而入 豊臣家の使者だか。有遺憾 敵將佐竹義宣を討ち取りなかつたことをいふ。

旦日、東軍發卒十萬人、隲外城填空壕、以吏七名監焉。是日、島津氏始至兵庫。居二日、治長與長益俱往謁兩營。前將軍見治長、面稱揚之曰「卿年少、能爲秀頼舉事、何其壯哉。吾欲上野介事將軍、猶卿也。」上野介者、本多正純也。因命正純請其上。衣遠近傳以爲榮。治長意氣益驕。其夜、前將軍遽入京師。吏請夷壕淺深。前將軍晒而對曰「使三歲小兒可得上耳。」初、城中諸將約填周池以爲止。西南外壕居數日、外壕既堙、遂及內壕。城中大驚。皆咎治長。治長使人出詰監吏。吏對曰「吾輩受命填周池。」

以爲周者周内外之謂也。是時將軍猶在岡山。治長自馳赴岡山。岡山將吏皆曰「是大御所命已。治長乃馳使京師。因板倉勝重請之。勝重曰「本多正純主此事。我所不與也。還詣正純。正純稱疾不出面。往復數回。而東軍益興卒。晨夜督責。以至明春。塹壘皆夷。獨存牙城而已。」

訓讀 旦日、東軍、卒十萬人を發し、外城を鑿ち穴壕を填め、吏七名を以て監す。是の日、島津氏始めて兵庫に至る。居ること二日、治長、長益と俱に往いて兩營に調す。前將軍、治長を見て面のあたり之を稱揚して曰く「卿、年少くして、能く秀頼の爲に事を擧ぐ。何ぞ其れ壯なるや。吾れ上野介をして、將軍に事ふること猶卿がごときを欲するなり」と。上野介は本多正純なり。因つて正純に命じて、其上衣を請はしむ。遠近傳へて以て榮と爲す。治長、意氣益々驕る。其夜、前將軍遽に京師に入る。吏、壕を夷ぐるの淺深を請ふ。前將軍、晒つて對へて曰く「三歳の小兒をして上下するを得可からしむるのみ」と。初め城中の諸將、周池を填むるを約し以爲へらく、西南の外壕に止ると。居ること數日、外壕既に埋め、遂に内壕に及ぶ。城中大に驚いて皆治長を咎む。治長、人をして出で、監吏を詰らしむ。吏對へて曰く「吾が輩、命を受けて周池を填む。以爲へらく、周とは内外を周るの謂なり」と。是の時、將軍猶ほ岡山に在り。治長自ら馳せて岡山に赴く。岡山の將吏皆曰く「是れ大御所の命のみ」と。治長乃ち使を京師に馳せ、板倉勝重に因つて之を請ふ。勝重曰く「本多正純此の事を主る。我が與らざる所なり」と。還つて正純に詣る。正純疾と稱して出で面せず。往復數回、而して東軍、益々卒を興

し、晨夜督責して以て明春に至り、塹壘皆夷ぐ。獨り牙城を存するのみ。
通釋 翌日、東軍は人夫十萬人を繰り出し、外城をぶちこはし、空濠を填め、七人の役人で監督をさせた。この日島津氏がやつと兵庫まで来た。二日経つて、治長は長益と共に、前將軍と將軍の陣屋へ夫々拜謁に往つた。前將軍は治長に會つて目の前で褒めそやして曰ふには「貴方は年が若いに拘らず、秀頼の爲めに大事を擧げることがお出来なされて何ん共お壯なことを、感服した。私は上野介をして、將軍秀忠に事へること、そなたが秀頼公に事へたやうに事へて貰ひ度いと思つてゐますのぢや」と。この上野介といふのは、本多正純のことである。そこで正純に命じて、治長の羽織を貰ひ受けさせた。遠近一帯の人々は傳へ聞いて光榮なこと、思つた。治長は益々驕り傲ぶる様になつた。その夜、前將軍は急に京師に入つた。監督の役人は堀をどの位まで填めたら宜しいかと尋ねた。前將軍は笑つて答へて曰ふには「三つ兒にも上つたり下つたり出来る位にして終へばよい」と。初め城中の諸將は周りの堀を填める約束をしたものゝ、内心は西と南の外堀だけのこと、考へてゐた。數日経つと外堀はすつかり填まつて終ひ、内堀の方に移つて来た。城中では大層吃驚して皆治長を咎めた。治長は人をやつて監督の役人を詰責させた。役人が答へて曰ふには「我々は只命令を受けて周りの堀を填めてをるのだ。考へて見た所、周りといへば、内城外城の周りのことだ」と。此の時將軍はまだ岡山の陣に居つた。治長は自分で大急ぎで岡山に行つた。諸將が皆曰ふには「それは大御所の命令なのだ」と。治長はそこで京都に使を飛ばせて、板倉勝重を通じて談判させた。勝重が曰ふには「本多正純の管轄だ。私は關係して居らぬ」と。そこで戻つて正純の所へ行つた。正純は病氣だといつて、對面しなかつた。かく往つたり來たり幾度もしてゐる中に、東軍は益々人夫を増やし、朝早くより夜遅くまで嚴しく急かせ、翌春になると、堀も壘も皆平らになつて終つた。たゞ本城だけ

がぼつんと建つてゐるだけになつた。

語釋 兩營(家康、秀忠)の兩營

元和元年正月、兩將軍皆東歸。諸國兵罷之。國淀君游嬉恬安、而荒殘之餘、將士莫所仰給。物議囂然。三月、遣青木一重及大藏正永請賑於關東。關東不報。客兵交勸秀頼母子再舉。曰、「去歲舉天下攻我、而不能取。是世所共知也。今而再舉、必有歸者。」乃召募遠近得十二萬人。上下大喜。於是大議戰備。數日未決。真田幸村進曰、「今日之事、兩言決耳。可戰也。不可守也。猶有急襲京師、挾天子以令天下而已。治長兄弟不聽。七隊長乃說曰、「城壕隳廢、誠不可比前役。此地三面迫水、而南接平野、敵每至自南。請以我兩軍迎彼兩帥、直衝突磨下。其勝敗天也。」議終決。乃急繕守備。柵于外城、舊趾穿塹二尺。四月、東軍先鋒已至京師。兩將軍兼程西上、飛檄諸侯復急赴大坂。留一重等不遣。使常光氏來言曰、「弭兵徙大和。七年則吾修大坂如故。還予之。」不答。

元和元年正月、兩將軍皆東歸す。諸國の兵罷めて國に之く。淀君、游嬉恬安、而して荒殘の餘、將士給を仰ぐ所莫し。物議囂然たり。三月、青木一重、及び大藏正永を遣はし賑を關東に請ふ。關東報せず。客兵交々秀頼母子に再舉を勸む。曰く「去歲、天下を擧げて我を攻む。而して取る能はず。是れ世の共に知る所なり。今にして再舉せば必ず歸する者あらん」と。乃ち遠近に召募して十二萬人を得たり。上下大に喜ぶ。是に於て、大に戰備を議す。數日未だ決せず。真田幸村進んで曰く「今日の事、兩言にして決するのみ。戰ふ可きなり。守る可からざるなり。猶ほ急に京師を襲ひ、天子を挾んで以て天下に令する有るのみ」と。治長兄弟聽かず。七隊長乃ち説いて曰く「城壕隳廢し、誠に前役に比すべからず。此地、三面水に迫つて、南は平野に接し、敵毎に南より至る。請ふ我が兩軍を以て彼の兩帥を迎へ、直に磨下に衝突せん。其の勝敗は天なり」と。議終に決す。乃ち急に守備を繕ふ。外城の舊趾に柵し、塹を穿つこと二尺。四月、東軍の先鋒已に京師に至る。兩將軍、程を兼ねて西上し、檄を諸侯に飛ばし、復急に大坂に赴かしむ。一重等を留めて遣らず。常光氏をして來り言はしめて曰く「兵を弭めて大和に徙ること七年ならば、則ち吾れ大坂を修むること故の如くして之を還し予へん」と。答へず。

通釋 元和元年正月、兩將軍は並びに東歸した。諸國の軍隊も夫々解散して國に歸つた。淀君は浮き遊び興じて至極暢氣に暮してゐたが、戰敗の後で何もかもすつかり荒れ果てゝあるので、將士は俸祿を頂戴すること出来なかつた。色々の噂が喧しくなつた。三月、青木一重と大藏正永をやつて關東に救助を請うた。關東では返答もしなかつた。客兵共はかはるゝ秀頼母子に再舉を勸めた。曰ふには「去年は全國總懸りでこゝを攻めました。併し落城させることが出来ませんでした。世間ではそのことをよく承知してゐます。今再舉したらきつと

味方に附く者がありませう」と。そこで遠近一帯に兵を召し募つた所、十二萬人を得た。上下一同は非常に喜んだ。そこで色々と戦備の相談をした。五六日経つても中々定まらなかつた。眞田幸村は進み出て曰ふには「今回の事は二た言で定る。『進んで戦ふべきである。退いて守るべきではない』。計略は只一つ、急いで京都を襲ひ取り、天皇を背景にして天下に命令を下すことだけである」と。治長兄弟は承知しなかつた。七隊長がそこで説いて曰ふには「城も堀も壊されたり填められたりして、前の戦の時とはとても比較になりません。此の土地は三方水に接して南だけが平野に續いてゐるので、敵は何時も南からやつて來ます。だから我が二手の軍を以て敵の兩軍を夫々引き受け、いきなり敵の旗下に突き入りませう。その勝敗は天運です」と。相談は遂にそれと定つた。そこで急に防備を直した。昔の外城の跡に柵をめぐらし、壕を二尺許り堀つた。四月、東軍の先鋒が早くも京都に到着した。兩將軍も二日路を一日にして急いで西上し、檄文を諸侯に飛ばし、又もや急いで大阪に向はせた。使の一重等は留め置いて還さなかつた。常光氏をして大阪に行つて曰はせるには「戦争をやめて大和に移り、七年も経つたならば、大阪城を昔通りにすつかり直してお返し致しますが」と。大阪方は返辭もしなかつた。

語釋 元和(後水尾天皇)の年號(可戰也。不) ○兩言(秀忠) ○兩帥(家康)

於是分軍爲三、大野治長領一軍、七隊長及後藤基次隸之。大野治房領一軍、長曾我部盛親、森勝永、仙石宗也隸之。木村重成領一軍、眞田幸村、渡部尙、明石守重隸之。秀賴具旗鼓親、按視南郊。上茶臼岡山指揮三軍、所嚮士氣頗奮。然治長矜持太甚、以淀君命抑沮諸將、軍議屢變。長益父子出奔京師。治長益專、治長一夜過櫻門前、有人刺之、不中走。治長卒追殺之。旦日、檢尸治房部卒也。城中莫不相猜防。前將軍潛使人招重成、重成不應。其女兄夫猪飼某應。城中召募、創病歸鄉。重成遣書及物、訣之曰「城中近狀無復足觀。諸謀議皆決於母氏。我輩所陳一切不聽。天下永爲家康之有可知也。已。家康與僕有舊。使板倉伊賀數招僕。僕受先君命、以屬嗣君。而懷藏二心、心所不安。故雖無一所聊賴、且因循在此。特願速戰死。復何言哉。此刀僕所常佩服。經數十戰、未嘗蹉跌者。今以贈公。幸愛護之。諸將皆以治長之故、鞅鞅不樂。皆如重成意。」

訓讀 是に於て、軍を分ちて三と爲し、大野治長一軍を領し、七隊長及び後藤基次之に隸す。大野治房一軍を領し、長曾我部盛親・森勝永・仙石宗也之に隸す。木村重成一軍を領し、眞田幸村・渡部尙・明石守重之に隸す。秀賴、旗鼓を具へて、親ら南郊を按視し、茶臼・岡山に上り、三軍の嚮ふ所を指揮す。士氣頗る奮ふ。然るに治長の矜持太甚しく、淀君の命を以て諸將を抑沮し、軍議屢變す。長益父子京師に出奔す。治長益々專なり。治長一夜、櫻門の前を過ぐ。人あり之を刺す。中らずして走る。治長の卒追うて之を殺す。旦日、尸を檢すれば治房

の部卒なり。城中、相猜防せざる莫し。前將軍潛に人をして重成を招かしむ。重成應ぜず。其女兄夫猪飼某、城中の召募に應じ、創病にて郷に歸る。重成、書及び物を遣り、之に訣して曰く、「城中の近狀、復觀るに足るなし。諸の謀議皆母氏に決す。我が輩の陳ぶる所一切聽かれず。天下永く家康の有と爲ること知るべきのみ。家康僕と舊あり。板倉伊賀をして數、僕を招かしむ。僕先君の命を受けて以て嗣君に屬す。而して二心を懷藏するは心の安んぜざる所。故に一も聊頼する所なしと雖も、且く因循して此に在り。特速に戦死せんと願ふのみ。復何をか言はんや。此の刀は、僕の常に佩服する所。數十戦を経て未だ嘗て蹉跌せざるもの、今以て公に贈る。幸に之を愛護せよ」と。諸將皆治長の故を以て、鞅鞅します。皆重成の意の如し。

通釋 そこで總勢を三軍に分け、大野治長がその一軍を指揮して、七隊長と後藤基次とがそれに屬した。大野治房が一軍を指揮し、長曾我部盛親・森勝永・仙石宗也の三人がそれに屬した。木村重成が一軍を指揮して、眞田幸村・渡部尚・明石守重がそれに屬した。秀頼は旗や太鼓をすつかり整へて親ら南の郊外を視察してまはり、茶臼山と岡山に上つて三軍の向ふべき所を指圖した。士氣大に振つた。所が治長は非常に威張つて、淀君の命を受けて諸將を抑へ邪魔し、一旦決められた戦の評議でも度々變更された。長益父子は京都に出奔して終つた。其の後治長は益我儘になつた。治長が或る晩櫻門の前を通つた。人がとび出して彼を刺さうとした。届かなかつたので逃げ出した。治長の兵卒が追ひかけて殺した。翌朝死骸を検べると治房の部下の兵卒であつた。かくの如き有様なので、城中の者はお互ひに疑ぐりの眼を以て見、用心を合はぬものはなかつた。前將軍はひそかに人をやつて重成を招かせた。重成は應じなかつた。その姉婿の猪飼某は、召募に應じて城中に来てゐたが、削が悪くなつて郷里に歸ることになつた。重成は手紙と物品を贈つて別を告げて曰ふには「近頃城中の有様は口

にも言へぬやうな事計りです。世々の評議相議は皆諸君殿の考へて定つてあります。吾々の言ふことは一切きかれません。天下が永く家康のものとなつて終ふことは明白なことです。家康は私と古い關係があります。板倉伊賀をして度々私を招かせました。私は先君の命令を受けて嗣君を守り立てゝあるのです。二心を懷くのはまことに氣持の悪いことです。だから、心頼みにすることは一つもないに拘らず、こゝにぐづくしてゐるのです。この上は唯一時も早く戦死したいだけです。もう外に希望は有りません。此の刀は私がいつも持つてゐたものです。數回の戦に未だ一度も失敗りをしたことのないものですが、今貴方にお贈り致します。どうか大事にして下さい」と。諸將は皆治長のお蔭で氣が滅入つて不愉快な思ひをしてゐた。皆重成の考と同じであつた。

語釋 櫻門(本丸入口) ○女兄夫(姉) ○母氏(淀君を)

兩將軍既至京師。大坂間細狙擊之。皆不成。乃遣大野道見、縱火界浦、奪東軍據資。遣大野治房、以萬人入大和、攻郡山、走其守將筒井定慶。聞淺野氏舉紀伊軍、至因誘其國民、乘虛起兵。紀伊軍乃還救治房尾之。先鋒塙直次戰于檜井、戰死。治房赴援不及。既而東軍來自大和河内。水野勝成、藤堂高虎、井伊直孝、伊達政宗爲前鋒。諸隊長執前議、欲迎之南郊。基次不可曰、野戰勝敗以衆寡決。今以寡擊衆、不若邀